甲府市文化財調査報告 47

史跡 武田氏館跡XIII

— 史跡武田氏館跡第１期整備事業（大手門周辺ゾーン）に伴う字三角・字高塀試掘調査報告書 —

2010

甲府市教育委員会

序

甲府盆地の北部に位置します躑躅ヶ崎の麓に築かれた国指定史跡武田氏館跡は、武田信虎・信玄・勝頼と戦国大名武田氏三代が居住した館として「躑躅ヶ崎館」の名で親しまれております。現在では館の中心部分に武田信玄をお祀りする武田神社が鎮座していることもあり、年間を通じて多くの来訪者で賑わっております。

本市では、貴重な歴史遺産であるとともに、戦国時代を学ぶ上で重要な史跡武田氏館跡を保護・保存し、将来に伝えるとともに、より多くの方にこの史跡を理解いただくことを目的として、平成16年度に『史跡武田氏館跡整備基本構想・基本計画』を策定いたしました。整備予定地内を４期に分割して事業を推進する計画でありますが、第１期整備事業に位置づけられております大手門周辺ゾーンから発掘調査成果をもとに整備を進めているところでございます。

本書に収録しましたのは、大手門周辺ゾーンのうち、躑躅ヶ崎の麓に広がる字三角・字高塀と呼ばれる最も東側の区域の試掘調査成果であります。部分的な確認ではありましたが、小さく段々に造成された区画の中に屋敷が営まれた痕跡が確認されるとともに、土器や陶磁器、土人形など戦国時代の人々が使用した道具が多数出土いたしました。中でも溶けた金属が付着した土器皿が多数の出土したことは、鍛冶職人が居住する城下町が広がっていたことを裏付ける資料として注目されます。

本書は、本市の新たな歴史を語る上で不可欠な発掘調査による学術成果を広く活用いただくことを目的に刊行しておりますが、今後の史跡整備や歴史教育の場など多方面でご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりますが、このたびの発掘調査にあたりご指導、ご協力を賜りました文化庁、山梨県教育委員会ならびに地元自治会の皆様をはじめといたします関係各位に厚く御礼申し上げますとともに、史跡武田氏館跡の整備事業につきまして、ますますのご理解とご助力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成22年３月

甲府市教育委員会

教育長　奥　田　　理

例　　言

１．本書は、山梨県甲府市古府中町・屋形三丁目・大手三丁目地内に所在する国指定史跡武田氏館跡における字三角・字高塀の試掘調査報告書である。

２．本調査は、史跡環境整備事業に伴う発掘調査であり、甲府市教育委員会が主体となり実施した。

３．本調査に係る経費は、国庫補助金ならびに山梨県費補助金の交付を受けている。

４．本調査は、史跡武田氏館跡保存整備委員会の指導の下、佐々木満（文化振興課文化財主事）が担当した。

５．発掘調査の期間及び面積は以下の通りである。
期　間：平成18年10月16日 ～ 平成19年３月30日
面　積：字三角　約440㎡　　字高塀　約140㎡　　合計580㎡

６．本書の執筆は佐々木満が行い、遺物の実測作業は栗田かず子・分部綾子が行い、遺構図トレース及び図版作成、遺物トレース及び図版作成を株式会社シン技術コンサルに委託した。

７．史跡整備地全体の国土座標測量は、（株）昭和測量に委託しており、発掘調査区内の国土座標測量及び空中写真測量等は、（株）シン技術コンサルに委託した。

８．出土品の保存処理業務については、（財）山梨文化財研究所に委託した。

９．炭化材・金属製品の自然科学分析については、（株）パレオ・ラボに委託した。

10．本書の編集は、小林純一（文化振興課長）を責任者とし、佐々木満が行った。

11．本書に係る出土遺物及び記録図面、写真などは甲府市教育委員会で保管している。

12．発掘調査及び報告書の作成にあたっては、次の機関及び諸氏からご指導・ご教示・ご協力を賜った。記して厚く感謝申し上げる。（敬称省略）
文化庁記念物課・山梨県教育委員会学術文化財課・（財）山梨文化財研究所・
（株）丸光建設・山梨県立博物館・数野雅彦・沓名貴彦・畑　大介

13．発掘調査参加者

赤沢　雅之	雨宮　小春	雨宮　英郎	池谷富士子	岡　　悦子	金子　春枝
金井いく代	倉田　勝子	岸本　美苗	工藤　忠誠	小池　孝男	小池　幹子
小宮　通子	坂本しのぶ	佐田　金子	佐藤美喜男	末木　千並	高橋　主税
長沢　晴雄	長澤　由人	花曲　敬子	早川みどり	波木井祥和	平沢　則子
古屋袈裟男	保坂　秋蘭	保坂　　哲	望月　宏美	望月貴美子	渡辺百合子
分部　綾子					

調査組織

事務局（平成21年度）
　甲府市教育委員会文化振興課
　文化振興課長　小林純一（事務職員）
　文化財係長　　萩原寛二（事務職員）・望月祐仁（事務職員：文化財主事）
　主　　任　　伊藤正幸・志村憲一・伊藤正彦・平塚洋一・佐々木満（事務職員:文化財主事）
　嘱　　託　　林陽一郎・中村里恵・三神千佳

史跡武田氏館跡保存整備委員会

委員長	萩原三雄（財団法人　山梨文化財研究所所長）
副委員長	山本光信（相川地区自治会連合会会長）
委　員	清雲俊元（山梨郷土研究会理事長）
	小野正敏（大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館教授）
	笹本正治（国立大学法人信州大学教授）
	鈴木　誠（東京農業大学教授）
	伊藤裕久（東京理科大学教授）
	土橋勝夫（宗教法人武田神社代表役員宮司）
	谷川義孝（甲府市議会議員）
	渡辺礼子（甲府市議会議員）

凡　　例

1．発掘調査の測量においては、日本測地系Ｘ－36850.00・Ｙ－5360.00を基軸として５ｍグリッドを設定している。

2．本書に掲載した地図は、平成14年要部修正50万分の１地方図（４）関東甲信越、平成３年度甲府市都市計画図2500分の１･10000分の１を用いた。

3．遺構断面土層の色調及び遺物観察表中の色調は、『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　1997後期）に基づいている。

4．遺構・遺物の実測図縮尺は、基本的にはトレンチ１/60・１/50、土坑・溝跡１/30、出土遺物１/３であるが、大型の遺構や陶磁器・石製品には例外もあるため、図中に示した各スケールを参照願いたい。

5．セクション図に表記されている水平線の数値は、海抜高度を表し、単位はｍである。また、セクションポイント表記のＥ・Ｗ・Ｓ・Ｎは、東西南北を表し、同じ遺構で複数の断面観察を行っているところは、アルファベットで表記している。

6．遺物実測図で反転復元したものについては、実測部分と復元部分の間にスペースを設けているが、全体を反転復元したものについては、中央線部でスペースを設けて区別した。

7．本書作成に際して引用・参考にした文献は、一括して本書第５章末尾に記載した。

8．本書に使用した記号及びスクリーントーンは、以下のとおりである。

熔融物　　漆　　須恵器

目　　次

序
例　言・調査組織・凡　例
目　　次
挿図・挿表目次

第１章　武田氏館跡の概要 …… 1
第１節　立地環境 …… 1
第２節　歴史背景 …… 1
第３節　武田氏館跡の構造 …… 1

第２章　調査の概要 …… 5
第１節　調査に至る経緯 …… 5
第２節　調査の目的 …… 5
第３節　調査区とその周辺の概要 …… 7
第４節　調査の方法 …… 7
第５節　調査の経過 …… 10
第６節　調査後の処置 …… 10

第３章　遺構と遺物 …… 11
第１節　字三角 …… 11
第２節　字高塀 …… 20

第４章　自然科学分析 …… 36
第１節　史跡武田氏館跡大手周辺から出土した炭化種実 …… 36
第２節　史跡武田氏館跡大手周辺出土土器に付着する金属の成分分析 …… 39

第５章　考　　察 …… 47
第１節　字三角の様相 …… 47
第２節　字高塀の様相 …… 48

第６章　結　　語 …… 51

写真図版 …… 53

付図：字三角調査区全体図
　　字高塀調査区全体図

図版・表目次

図１　史跡武田氏館跡及び関連史跡
位置図 …… 2
図２　武田氏館跡曲輪配置図 …… 4
図３　史跡武田氏館跡年次別整備事業
計画図 …… 6
図４　字三角・字高塀の古地籍図及び
古写真 …… 8
図５　字三角・字高塀調査区位置図…… 8
図６　史跡武田氏館跡グリッド図…… 9
図７　字三角トレンチ５ ……13
図８　字三角トレンチ７ ……15
図９　字三角トレンチ９ ……16
図10　字三角トレンチ13……19
図11　字三角トレンチ16・17 ……21
図12　字高塀トレンチ１ ……23
図13　字高塀トレンチ２ ……24
図14　字高塀トレンチ３・４ ……25
図15　字高塀トレンチ５ ……27
図16　字高塀トレンチ５遺構断面図 ……28
図17　字三角出土遺物(1) ……31
図18　字三角出土遺物(2) ……32
図19　字三角出土遺物(3)
字高塀出土遺物(1)……33
図20　字高塀出土遺物(2) ……34
図21　字三角・字高塀出土金属製品 ……35

表１　出土遺物観察表 ……29

※第４章・第５章の図表は各章、各接毎に付しており、省略する。

写真図版目次

武田氏館跡遠景・武田氏館跡近景 …… 53
字三角俯瞰 …… 54
字三角調査区全景 …… 55
字高塀俯瞰・字高塀調査区全景 …… 56
字三角調査前～トレンチ４・５全景…… 57
トレンチ４・５全景～トレンチ７全景…… 58
トレンチ８・９全景～トレンチ10全景 … 59
トレンチ10南側断面～トレンチ13東側
Pit列 …… 60
トレンチ14北壁断面～トレンチ17全景 … 61
字高塀調査前～トレンチ２惣堀跡西側
断面 …… 62
トレンチ３全景～トレンチ５南側全景 … 63
トレンチ５全景 …… 64
出土遺物 …… 65

第１章　武田氏館跡の概要

第１節　立地環境

国史跡武田氏館跡は、甲府盆地北部の山梨県甲府市古府中町、屋形三丁目、大手三丁目地内に所在する（図１）。水ヶ森山地と甲府盆地との境界に位置する上積翠寺町の山塊を源流とする相川が形成した扇状地開析部の標高約350mの南向きの傾斜地上に武田氏館跡は占地している。三方を山に囲まれた相川扇状地の西側には相川、東側には藤川が南流しており、両河川の造り出した深い谷を活かした天然の要害とみることも可能である。

相川扇状地東縁に連なる竜華の峰南端部は、尾根が半島状に突出しており、かつてはツツジが多かったことから「躑躅ヶ崎」、あるいは「花岡山」と呼ばれてきた。そのため、尾根の麓に築かれた武田氏館は一般に「躑躅ヶ崎館」の呼称で親しまれている。

武田信虎は、武田氏館造営の翌年（1520）には館の北に位置する積翠寺丸山（要害山）に城を築いている。さらに大永３年（1523）には扇状地南西端の尾根上に湯村山城を築城するとともに、その翌年（1524）には扇状地南東端の独立丘である一条小山に砦（現甲府城跡）を築いており（図１）、相川扇状地の三方を囲む山塊の頂部とその両端を結ぶ城砦網を整備した。地形的な要因による必然とも言えるが、城砦網が形成する三角形の中央に武田氏館が立地するよう当初から設計されていた可能性もあり、相川扇状地はまさに防御に適した場所であった。

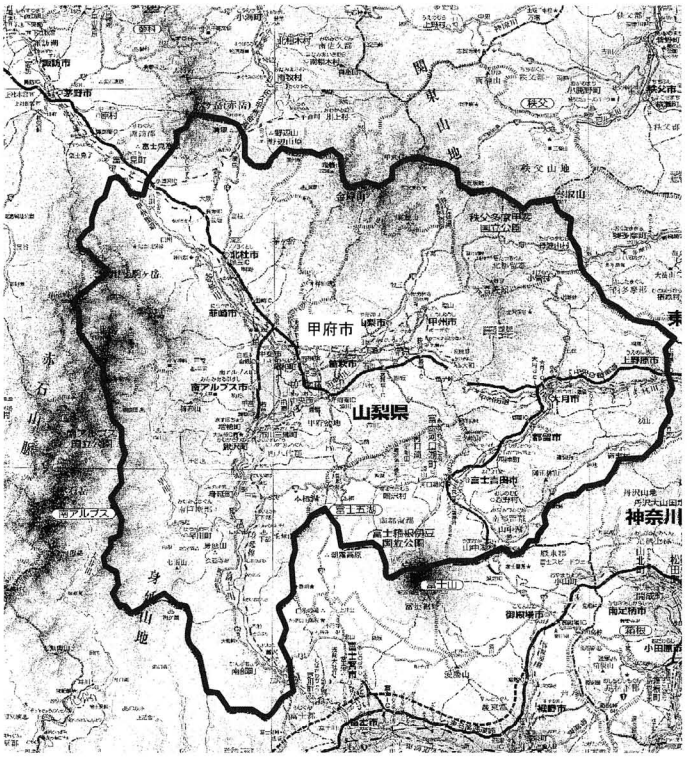
第２節　歴史背景

室町後期の甲斐国は混沌とした状況が続き、国人領主層の台頭によって守護の基盤も不安定であった。若干14歳で甲斐守護武田家の家督を継いだ信虎（信直）の周囲には、近隣の親族衆とともに甲府盆地の北に今井氏、西に大井氏、南に穴山氏、富士北麓の郡内地域に小山田氏などが割拠し、虎視眈々と勢力拡大の機会を窺っていた。

しかし、信虎は対抗勢力を次々と屈服させて甲斐国統一を推し進め、永正16年（1519）には石和の川田館（現甲府市川田町）から天然の要害を形成していた相川扇状地開析部の躑躅ヶ崎の地に新たな居館を築いた。現在は主郭の周囲に複数の曲輪群が展開しているが、信虎が甲斐守護の館として築いた初期の武田氏館は、短期間で移転を終えていることを考慮すると、単郭の方形館である主郭のみであったと推測され、発掘調査の結果、主郭の規模も現在よりも小さな館であったことが明らかになっている。

武田氏館は、天正９年（1581）の武田勝頼による新府城移転まで約62年間、戦国大名武田氏三代（信虎・信玄・勝頼）の本拠となり、武田氏の領国統治の拠点として機能した。天正10年（1582）織田氏・徳川氏の連合軍による侵攻を受けて武田勝頼は田野で自刃し、名門武田家は滅亡した。

論功行賞の結果、甲斐国の多くは河尻秀隆に与えられたが、本能寺の変で織田信長が倒れると、河尻秀隆は一揆によって討たれ、空白となった甲斐国は、小田原北条氏との争奪戦の末、徳川家康への帰属が決まった。家康は、平岩親吉を入れて甲斐を守備させたが、その拠点は武田氏館跡が再利用されたと考えられる。徳川氏が関東に移されると、豊臣秀吉の家臣らが武田氏館跡に改修を加え、甲府城が完成するまで拠点としていたことが発掘調査成果等でも明らかにされている。



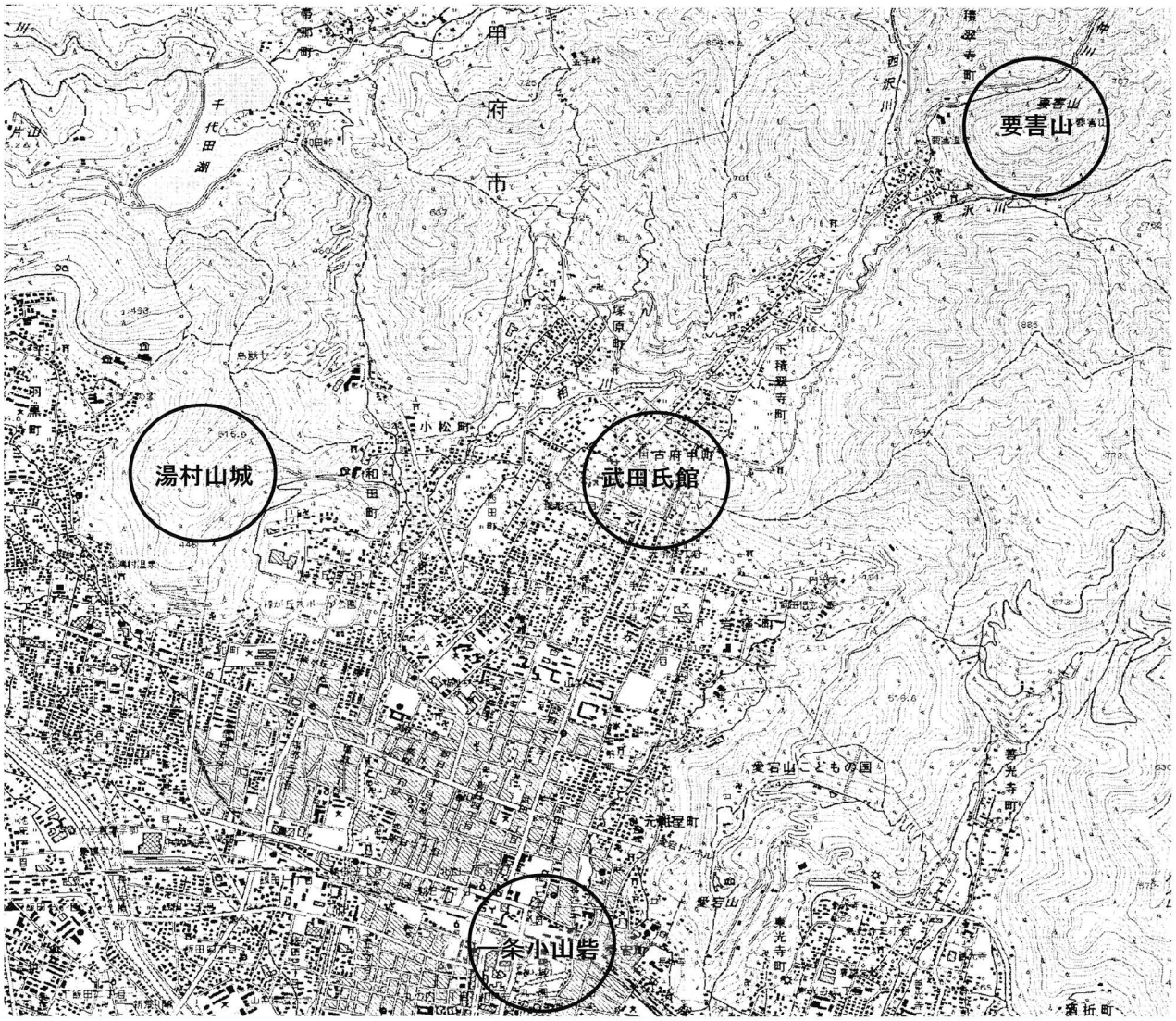


図１　史跡武田氏館跡及び関連史跡位置図

第３節　武田氏館跡の構造

武田氏館跡は、２町四方の方形単郭の主郭を中心として周囲に曲輪群が取り巻いている（図２）。武田氏の居所であった主郭には、現在甲府市街地から延びる県道（通称武田通り）に直結する形で通路が開かれているが、この通路は大正８年（1919）の武田神社造営時に参道として新設されたものであり、戦国期の虎口は東・西・北の三方に設けられていた。中でも東側に位置する虎口が館の正門にあたる大手と言われており、大手虎口東側の発掘調査によって丸馬出などが検出されている（甲府市教育委員会2009）。

『高白斎記』の記述にみられる武田信虎による新館の造営は、永正16年（1519）８月15日に鍬立を行い、12月20日に移転している。甲斐を統一したばかりの信虎の動員力と約４ヶ月という期間などを考慮すると、初期の姿は方形単郭の主郭のみであったと考えられる。実際に近年の発掘調査の結果、主郭の南土塁の中から現状規模より一回り小さな主郭の堀跡と土塁跡が検出され、大手においても古い時期の石積みが施された大手土橋と堀跡が検出されたことからも、初期の主郭が小さかったことが裏付けられつつある。

その後、天文年間の２度の火災を経て徐々に武田氏館の整備が進み、天文20年（1551）には武田義信の婚儀に伴い西曲輪が新造された。西曲輪の北には味噌曲輪、主郭北側には稲荷曲輪、無名曲輪、御隠居曲輪が連続して存在していることを考慮すると、武田信玄による領国拡大に伴い付属曲輪群も含めた館の拡充が進んだものとみられる。

主郭内部は、これまでの発掘調査によって武田神社創建時に大きな改変を受けたことが明らかになっているが、それまでは大きく三段の平場が形成され、武田期には庭園が南側に築庭されていたことも明らかになっている。武田氏滅亡後には大規模な改修を受け、野面積みの石垣で築かれた石塁などによって主郭内の空間は細分化されるとともに、北西隅に天守台が築かれるなど、織豊系大名による城郭化が進んだとみられる。

また、武田氏館跡南側には梅翁曲輪が造営されているが、江戸初期に成立したとみられる恵林寺蔵「甲州古城勝頼以前図」をみると、梅翁曲輪は徳川家康の家臣平岩親吉が築いたと記載されている。梅翁曲輪の名前の由来となっている梅翁についても、豊臣秀吉の家臣加藤光泰の家老であった井上梅雲斎に由来するとした説もある。いずれも徳川氏・豊臣氏の関与が窺われることから、現時点では武田氏滅亡後に築かれた曲輪であるとの見方が強い。

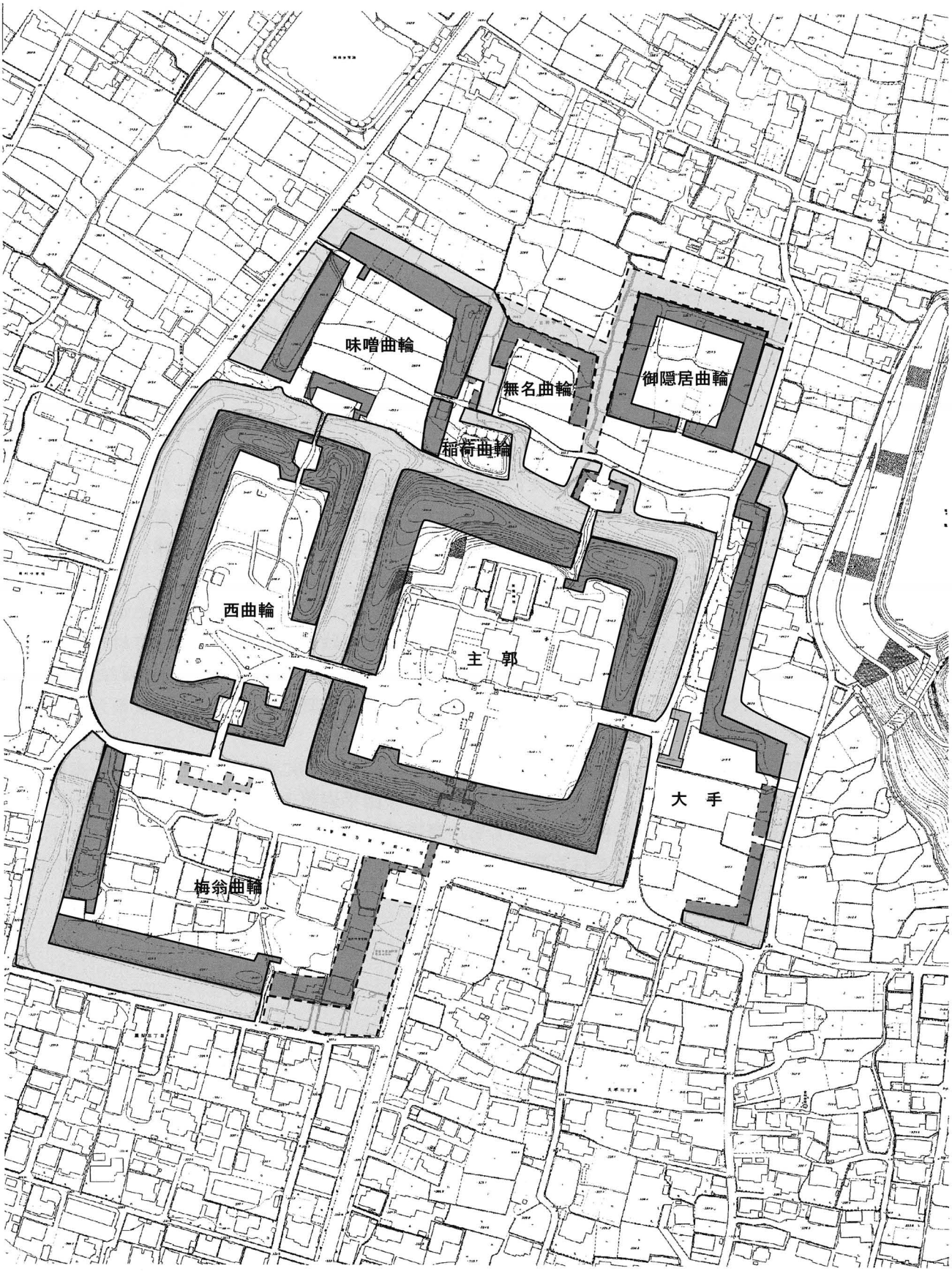


図２　武田氏館跡曲輪配置図

第２章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

武田氏館跡は、昭和13年（1938）年５月30日付けで国史跡に指定され、面積は武田神社境内地及びその周辺一帯で約17万㎡に及ぶ。昭和30年代後半以降急速に宅地化が進む中、平成６年（1994）10月には紆余曲折を経て地元合意の下で『史跡武田氏館跡保存管理計画』を策定し、史跡指定地内の取り扱いについて管理基準を定め、史跡の保護と整備へ向けた取り組みを開始した。

『史跡武田氏館跡保存管理計画』の策定を受けて甲府市教育委員会では史跡の整備や活用を検討するため、平成７年７月に学識経験者と地元代表、行政が参画した「史跡武田氏館跡整備活用委員会」を組織し、整備基本構想と整備基本計画の策定に向けた作業に着手した。平成７年度から平成14年度にかけて史跡整備を進める上での判断材料を得るために武田氏館跡の主たる曲輪群を対象として、曲輪の構造と変遷、範囲や遺構残存状況の確認を目的とした試掘調査を実施してきた。

その成果を基に平成15年度から整備内容などの検討を行い、平成16年度には『史跡武田氏館跡整備基本構想・整備基本計画』（以下では、「基本構想・基本計画」という。）を策定し、整備事業を推進することとした。策定に至る過程において、武田氏館跡全体の整備範囲や手順について検討がなされ、全体を大きく４つの区域に分割し、武田氏館が築かれてちょうど500年の節目を迎える平成31年（2019）を目途に事業を展開することとした（図３）。整備順序については、武田神社が創建された際に開削された南側の参道を多くの来訪者が武田氏館の正門と誤解している現状を勘案し、戦国期の武田氏館の正門にあたる大手空間の復元を目的として、大手門周辺ゾーンが第１期整備事業として位置づけられた。翌年には新たに学識経験者を主体とした「史跡武田氏館跡保存整備委員会」を設置し、発掘調査や設計内容の検討など細部に及ぶ協議の上に事業を展開している。

字三角・字高塀の発掘調査に関わる法令等の手続きに関しては、平成17年11月７日付け教発第1287号で文化財保護法に基づく史跡名勝天然記念物の現状変更許可申請書を文化庁長官に提出し、平成17年12月19日付け17庁財第４の1360号で許可を受けていた。

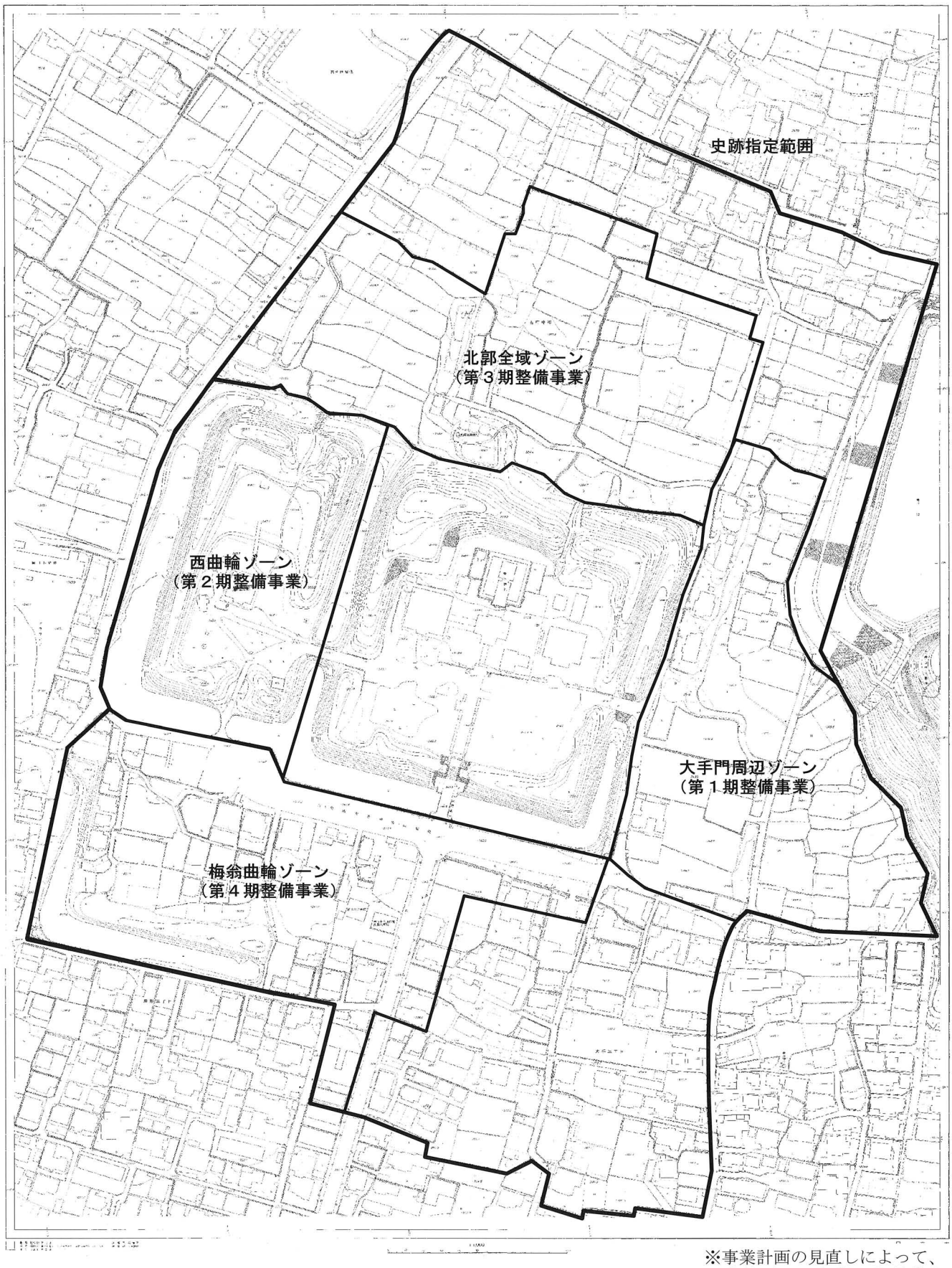
しかし、結果的には平成17年度段階では大手三日月堀の発見などを受け、大手東側周辺の調査を優先的に実施したため、字三角・字高塀の発掘調査は、翌年度の平成18年10月３日から着手している。調査順序は惣堀北側の字高塀から開始し、続いて字三角の調査を実施している。その後、平成19年３月30日までに埋め戻しを含めて作業を終了している。

第２節　調査の目的

基本構想・基本計画に基づき、第１期整備事業に位置づけられた大手門周辺ゾーンのうち、大手正面に位置する馬出から惣堀にかけての一帯が直近の整備工事範囲として検討され、発掘調査も重点的に行われた。その結果、大手門周辺ゾーンの空間構成は、大手門正面の馬出空間を包括するように惣堀と土塁によって一つの曲輪とも言える外郭を形成していたことが判明した。

しかし、惣堀内側の様相が明らかにされるにしたがい、さらにその外側の様相を把握する必要が生じた。特に惣堀の外側を南北に貫く戦国期の古道の一つである甲府市道鍛冶小路線から躑躅ヶ崎の麓にかけて広がる字三角・字高塀と呼ばれる一帯は、武田氏館跡に関する文献や古絵図にも記録がなく、用途も含めた遺跡の詳細は明らかにされていなかった。

よって、惣堀による大手東側の外郭線の外側に位置する字三角・字高塀地区の地下遺構の残存状況の把握や土地利用状況、場の性格を把握することを目的として試掘調査を実施することとした。



※事業計画の見直しによって、西曲輪ゾーンを第２期整備とし、北郭ゾーンを第３期整備に変更している。

図３　史跡武田氏館跡年次別整備事業計画図

第３節　調査区とその周辺の概要

基本構想・基本計画の中で第１期整備に位置づけられた大手門周辺については、惣堀と土塁によって区画された外郭とも言える曲輪状の区画と、惣堀から躑躅ヶ崎の山裾一帯に広がる字三角・字高塀地区に大別される。

字三角は、大手東側の惣堀から市道鍛冶小路線を挟んですぐ東側に位置し、その範囲は躑躅ヶ崎の山麓を南流する藤川と市道鍛冶小路線によって区画された南向きの緩斜面地であり、道路と河川によって仕切られた文字通り三角形の地形を呈している。公有地化以前は扇状地の地形を利用した棚田状の小区画の水田が多くを占めており、水田の間を細長い畦道が縦横に走っていた。

字高塀については、館跡の東側一帯に残る惣堀土塁に字名は由来すると思われ、大手正面一帯から北側の御隠居曲輪周辺までの広範囲が範囲として含まれる。その中で本調査地点は、大手東側の惣堀北側で躑躅ヶ崎の先端を利用して昭和初期に築堤された竜ヶ池の堤下に位置し、字三角同様小規模な段状の区画が展開しており、以前は畑や水田として利用されていた（図４）。

土地利用の概況をみるかぎり、字三角・字高塀ともに雛段状の小規模な区画が展開する地域であり、隣接する地区も含めて類似した土地利用の形態を有する。その点に関しては、字三角南側に隣接し、同形態の小規模区画が展開する字鍛冶小路地区では、発掘調査によって熔融物付着土器が多数出土するなど鍛冶工人が居住した城下町域と推定されている。

第４節　調査の方法

旧地形の把握を目的として、字三角では棚田状の小さな区画を網羅するように対象地全体を縦断する南北方向のトレンチを設定するとともに、東西方向へも横断するトレンチを設定し、全体を十字のトレンチで調査した。加えて、一部遺構の範囲確認を目的として２箇所にトレンチを設けて調査を実施し、全体で調査区番号を17まで付した。字高塀についても、大きな上下２区画の造成地内の中で調査区番号を５まで付した。

トレンチ幅は基本的に２ｍで設定したが、字高塀のうち古府中町3610－１地点に設定したトレンチ５については、調査成果の中間報告を史跡武田氏館跡保存整備委員会で検討した結果、調査区を拡大して面的な調査をする必要があると判断され、調査手法を切り替えた（図５）。

掘削作業は、基本的に人力による掘削を行っているが、字高塀については、公有地化以前に宅地造成が行われていた箇所もあり、人力での掘削が困難であったことから重機を使用している。字三角は棚田状の水田として利用されていたため、旧耕土等除去後、遺構面の確認作業を行っているが、各地点とも概ねその段階で包含層及び遺構を検出している。

個々の遺構等の調査方法は、史跡整備に必要な情報を得るために必要最小限の調査に止めることを目標としたため、基本的には全掘を避けて半截あるいは平面形を確認するだけに止めている。柱穴・土坑などの小遺構は、半截した上で遺構であるか判断し、写真・断面図・横断図などにより記録し、溝跡など大規模な遺構については部分的に観察面を設け、写真・断面図・横断図により記録した。その後、個々の調査がある程度完了したところで、空中写真測量により調査区全体を写真撮影し、図化した。

武田氏館跡の調査記録に関しては、整備対象地域を対象として日本測地系による座標に合わせた方眼測量によって50ｍ×50ｍの大グリッドを設定しており、東西列を算用数字、南北列をアルファベットで表記したものを組み合わせてグリッド番号として用いている（図６）。さらに大グリッド内を５ｍ×５ｍの小グリッドに細分化し、北東隅から１～100までの算用数字を順に付すことによって区分している。各グリッド番号は、北東隅にあたる座標杭を基準としており、遺構実測、遺物の取り上げ等は、すべて大グリッドと小グリッドの組み合わせで記録した。

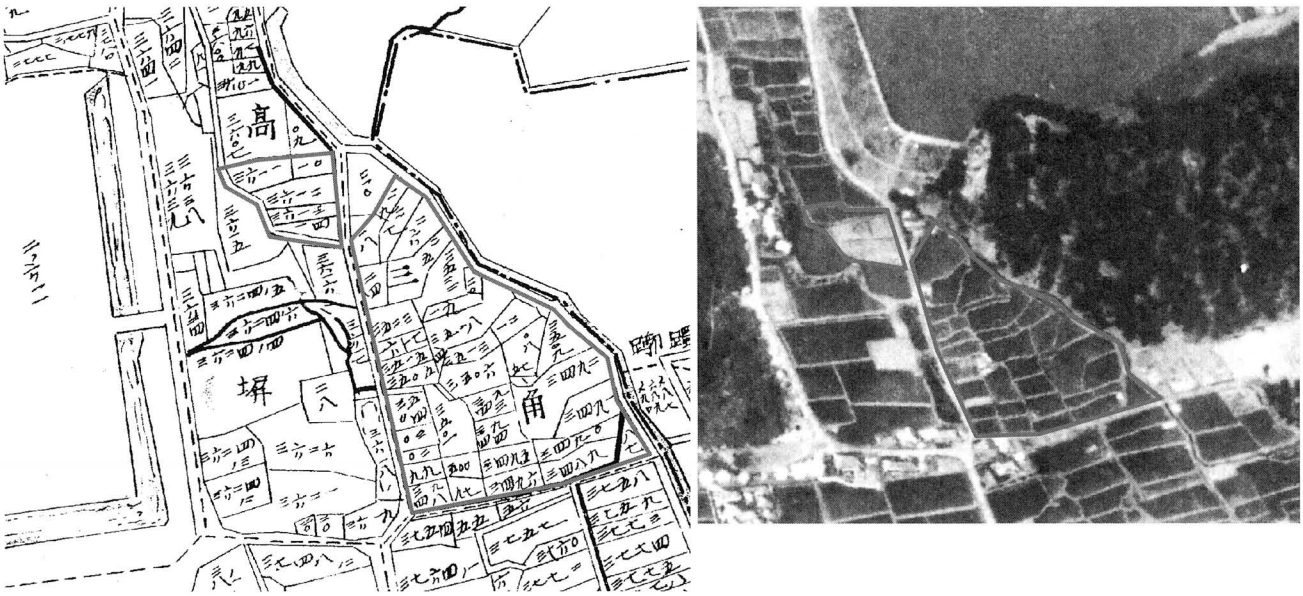


図４　字三角・字高塀古地籍図及び古写真

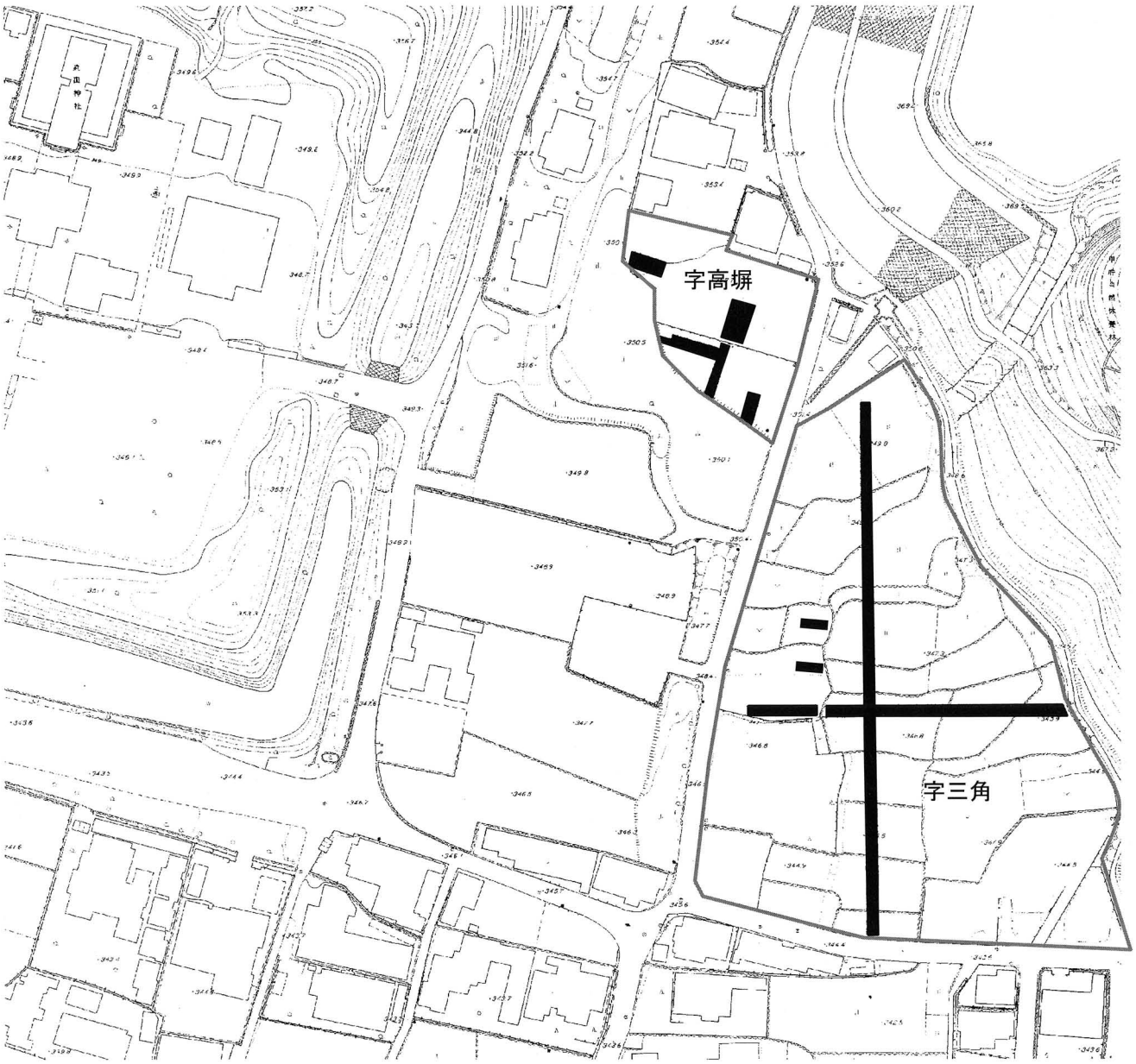
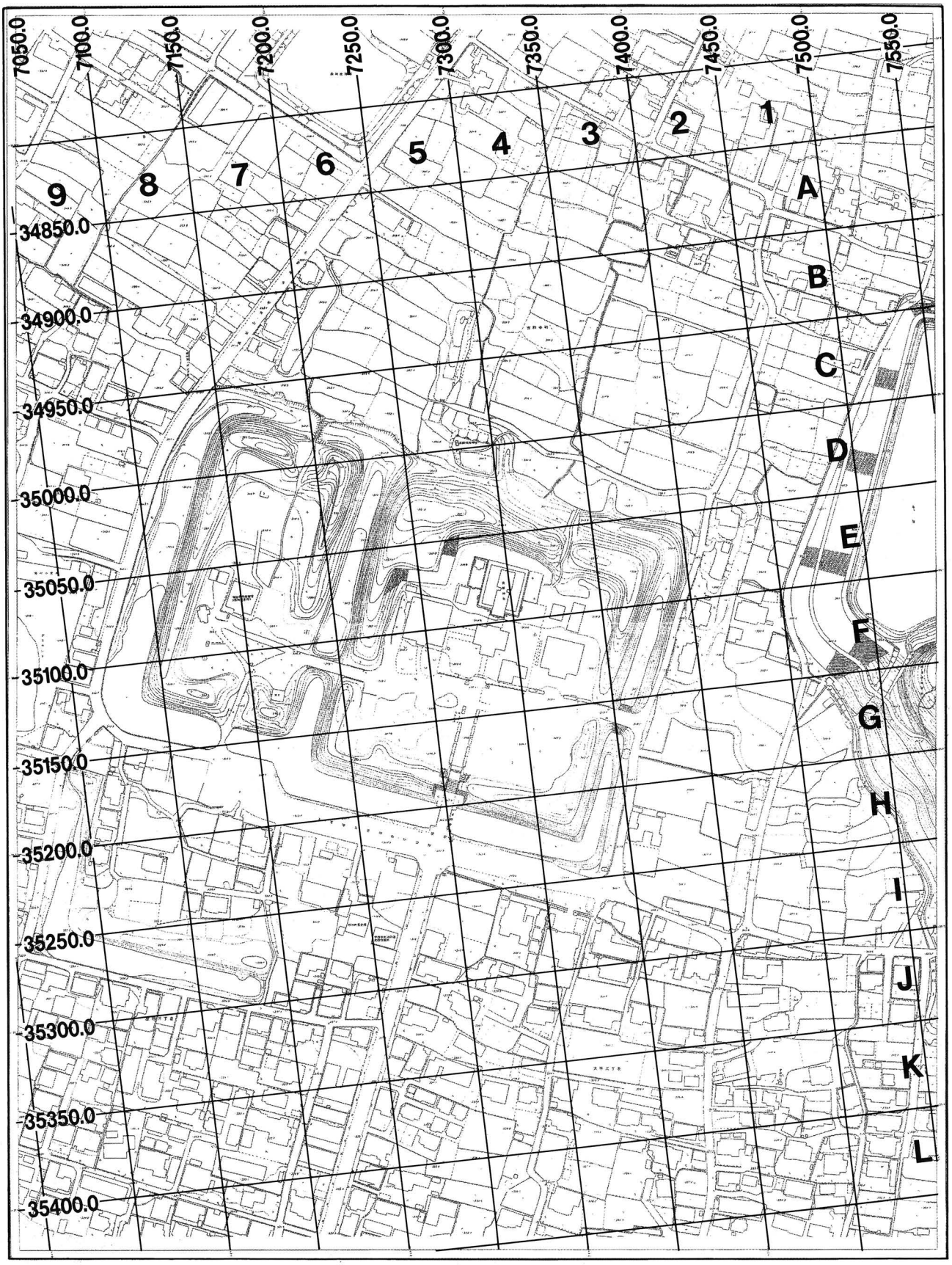


図５　字三角・字高塀調査区位置図



0 100m

図6 史跡武田氏館跡グリッド図

第５節　調査の経過

字三角・高塀の発掘調査は、大手三日月堀周辺の追加調査及び、大手南側の試掘調査、主郭西虎口石積み解体修理に伴う調査と併行して実施しているため、断続的に行っている。発掘調査順序は、字高塀から着手し、次いで字三角を実施している。両地点は各トレンチの進捗状況を踏まえた上で順次進めており、以下では主要な調査状況について概況を整理する。

10月16日　字高塀調査区設定。重機により掘削。
10月17日　トレンチ全体精査、掘削。トレンチ１・２の畑畝跡掘削。
10月25日　畑畝跡を完掘し、中世遺構確認。トレンチ５において土坑等確認。
10月27日　字三角調査区設定。
10月30日　字三角調査開始。人力によりトレンチ１から掘削。
11月１日　重機により字三角東西トレンチ掘削。
11月２日　基準点測量着手。
11月７日　調査用方眼測量杭設置。８日終了。
11月13日　字三角トレンチ５において１号溝跡確認。
12月４日　字高塀調査再開。
12月18日　字高塀において惣堀の範囲確認のためのトレンチ４を掘削。
１月15日　12月21日に開催された史跡武田氏館跡保存整備委員会第５回専門委員会において、字高塀の場の性格を把握するために調査範囲を拡張するよう指導を受け、トレンチ５を拡張した。
１月18日　字三角において、道路遺構の確認のためトレンチ17を新設し、掘削に着手。
１月23日　字三角の空中写真測量実施。
２月２日　字三角全体の最終精査。トレンチ５において連続した４基の土坑を確認。
２月６日　パレオ・ラボによる科学分析試料採取。
２月７日　字三角南側のトレンチにおいて、サブトレンチによる断ち割りを実施し、地形造成状況の確認。
２月26日　字高塀のトレンチ１・２・５内で確認された溝跡・Pit等の半截等部分調査着手。
３月１日　字三角トレンチ14西側の北壁に設定したサブトレンチから炭化米などが多数出土。
３月４日　現地見学会開催。参加者318名。
３月９日　字三角トレンチ５のうち、連続した４基の土坑東側を拡張して調査。
３月14日　すべての調査を完了。埋め戻しのための養生処置を行う。
３月15日　字高塀埋め戻し開始。
３月23日　字三角埋め戻し開始。
３月30日　養生処置を施し、平成18年度調査終了。

第６節　調査後の処置

発掘調査後は、山砂を主体とする混合土を遺構面及び掘削箇所に５cm前後の厚さで敷設し、重機と人力によって埋め戻しを行っている。また、惣堀跡の護岸石垣周辺などには、部分的に山砂を詰めた土のうを設置して埋め戻しを行った。

発掘調査によって記録された図面や写真、出土遺物については、甲府市山宮甲文館において整理作業を実施した。遺構図は一部のトレース、図版作成を委託によって行い、出土遺物は洗浄、注記、接合、実測までを甲府市教育委員会で行い、トレース、写真撮影、図版作成等を委託して本書の刊行に至っている。

第３章　遺構と遺物

史跡整備事業に伴う保護・保存を前提とした発掘調査であるため、字三角・字高塀の基本的に調査方法は、表面観察による遺構平面形の確認を主としており、遺構番号については、トレンチ毎に１から順に番号を付している。個々の遺構の調査に関しては、規模や性格の判別など必要に応じて半截など部分的な掘削を行った。

遺物についても、遺構確認面上層に堆積していた表土や盛土層内の遺物や掘削中にやむを得ず原位置を失ったもの、あるいは小破片に関しては、トレンチ毎に一括して取り上げているが、それ以外については位置と高さを記録した上で取り上げを行っている。

第１節　字三角

トレンチ番号は、各区画の段差毎に付しており、南北方向で１～11まで、東西方向で12～17までを設定した。調査対象区全体が公有地化以前に水田として利用されてきたため、各トレンチの基本層序は、現地表から約0.3～0.4mまで水田耕作土と床土が堆積していた。

トレンチ１（遺構：全体図中　遺物：図17）

位　　置：Ｇ１－47～87グリッド付近

調査状況：南北方向に設定したトレンチの規模は、長さ約22.5m、幅約2.0mである。水田床土除去後すぐに中世と考えられる遺構確認面が検出された。遺構確認面の検出状況は、Ｇ１－67・68グリッドラインより北側では地山が検出され、明確な遺構は確認されなかったが、それ以南では土坑やPitなどが確認された。

検出遺構：個々の遺構の掘削は実施しなかったが、確認した範囲で溝跡１条、土坑２基、Pit１基が確認された。しかし、１号溝跡については、覆土の状況から水田に伴う溝跡と考えられる。

出土遺物：１は瓦質の三脚付香炉である。肩部に刻印があり、胴部から底部にかけて膨らむ形態であり、これまでの武田氏館跡の調査の中でも出土例がない。２は16世紀後半のかわらけ、３は火鉢口縁部であり、押印が施されている。

トレンチ２（遺構：全体図中　遺物：図17・21）

位　　置：Ｈ１－８～18グリッド

調査状況：やや変形した区画に合わせて設定したトレンチの規模は、西側が約9.5m、東側が約5.5mであり、幅は約2.0mである。遺構確認面の検出状況は、全体的に焼土や炭化物が散乱した状況であり、調査区北側では地山面も確認された。

検出遺構：溝状遺構１条、土坑１基、Pit１基が確認されたが、個々の遺構の掘削は実施しなかった。中でも１号土坑では炭化物と灰が集中的に確認されたことから、炉や竈など火を扱った遺構であった可能性が高い。関連した状況として、調査区南側には炉や竈の廃棄物か、あるいは火災後の堆積と考えられる焼土や炭化物層が堆積しており、その状況は、接続するトレンチ３北端まで続くことが確認された。

出土遺物：４～８まではかわらけ、９は瀬戸美濃灰釉皿、10は青花皿である。５のかわらけは16世紀後半のものと考えられるが、内面に熔融物が付着している。熔融物付着土器は、このトレンチだけでも図化したもの以外に12点出土した。他にも110の六角形の銅製品や図化できなかったが、小さく磨耗した砥石片なども出土している。

トレンチ３（遺構：全体図中　遺物：図17）

位　　置：Ｈ１－18～38グリッド

調査状況：トレンチ２から続くやや変形した区画に合わせて設定したトレンチの規模は、西側が約8.3m、東側が約12.0mであり、幅は約2.0mである。

遺構確認面の状況は、前述のとおり、北端部に焼土や炭化物を含む層の堆積が確認されており、区画の関連性が窺えた。また、Ｇ１－67・68グリッドラインより北側では明確な遺構は確認されなかったが、地山が検出されている。対照的にそれ以南では包含層も確認され、土坑やPitなどが確認された。

検出遺構：個々の遺構の掘削は実施しなかったが、確認した範囲で溝跡３条、土坑２基、Pit１基を確認した。最も北に位置する溝跡には焼土や炭化物が多量に含まれていたが、トレンチ２南側に広がっていた焼土や炭化物と関連があると考えられ、上段との境界に設けられた溝である可能性もある。ほかにトレンチ中央付近から礫群が検出されているが、遺構であるかははっきり断定できなかった。

出土遺物：11～13はかわらけ、14は土器鉢、15～17は瀬戸美濃製品、18は青花皿であり、瀬戸美濃製品は大窯第１・２段階の遺物群である。

トレンチ４（遺構：全体図中　遺物：図17・21）

位　　置：Ｈ１－48グリッド

調査状況：東西に細長い区画内のうち、南北トレンチの延長上で長さ約2.4m、幅約2.0mのグリッド状に掘削したが、狭い調査区内の遺構面からは多数の小礫が検出された。水田耕作によって上面は削平されたと考えられるが、小礫は比較的密に敷設されたような箇所も確認された。

検出遺構：明確な遺構は発見されなかったが、小礫群は敷石状になっていたことから、道路跡である可能性もある。

出土遺物：19は瀬戸美濃端反皿であるが、漆接ぎがなされていた。他に105の釘が出土している。

トレンチ５（遺構：図７　遺物：図17・18）

位　　置：Ｈ１－58～79グリッド付近

調査状況：トレンチの規模は、長さ約13.5m、幅約2.0mである。トレンチの状況は、中央付近で確認された２号溝跡を境に北側は礫混じりの地山層、南側は炭化物を含む包含層に分かれていた。地山面が検出された北側では、直径0.6～0.7mの円形土坑が４基連続して確認されたことから、付随する遺構の有無を確認することを目的として遺構検出箇所の東側を２m四方で拡張してＬ字状の調査区とした。

検出遺構：確認した遺構は、溝跡２条、土坑５基、Pit１基である。トレンチ南側では配石された１号溝跡によって区画された基壇状の区画とPit１が確認されている。特に１号溝跡とその東側の基壇状の区画周辺には包含層が残されており、多数の遺物が出土した。１号溝跡は、サブトレンチによって確認したが、深さは約0.15mであった。

トレンチ中央では２号溝跡をサブトレンチによって掘削し、幅約0.7m、深さ0.3mであることを確認した。その北側に位置する４基連続した土坑は、紺屋が藍染などで用いた甕を埋設したものである可能性も想定されたため、１号土坑のみ半截して確認作業を行った。１号土坑は、直径0.8mの円形の平面形で、深さ約0.4mでU字状に掘り込まれており、全体に炭化物を含む暗褐色土に覆われていた。想定された埋甕の破片等の出土はなく、確証は得られなかったが、土坑は炭化物を含む土で一度に埋め戻されていたことから、埋甕など埋設物が

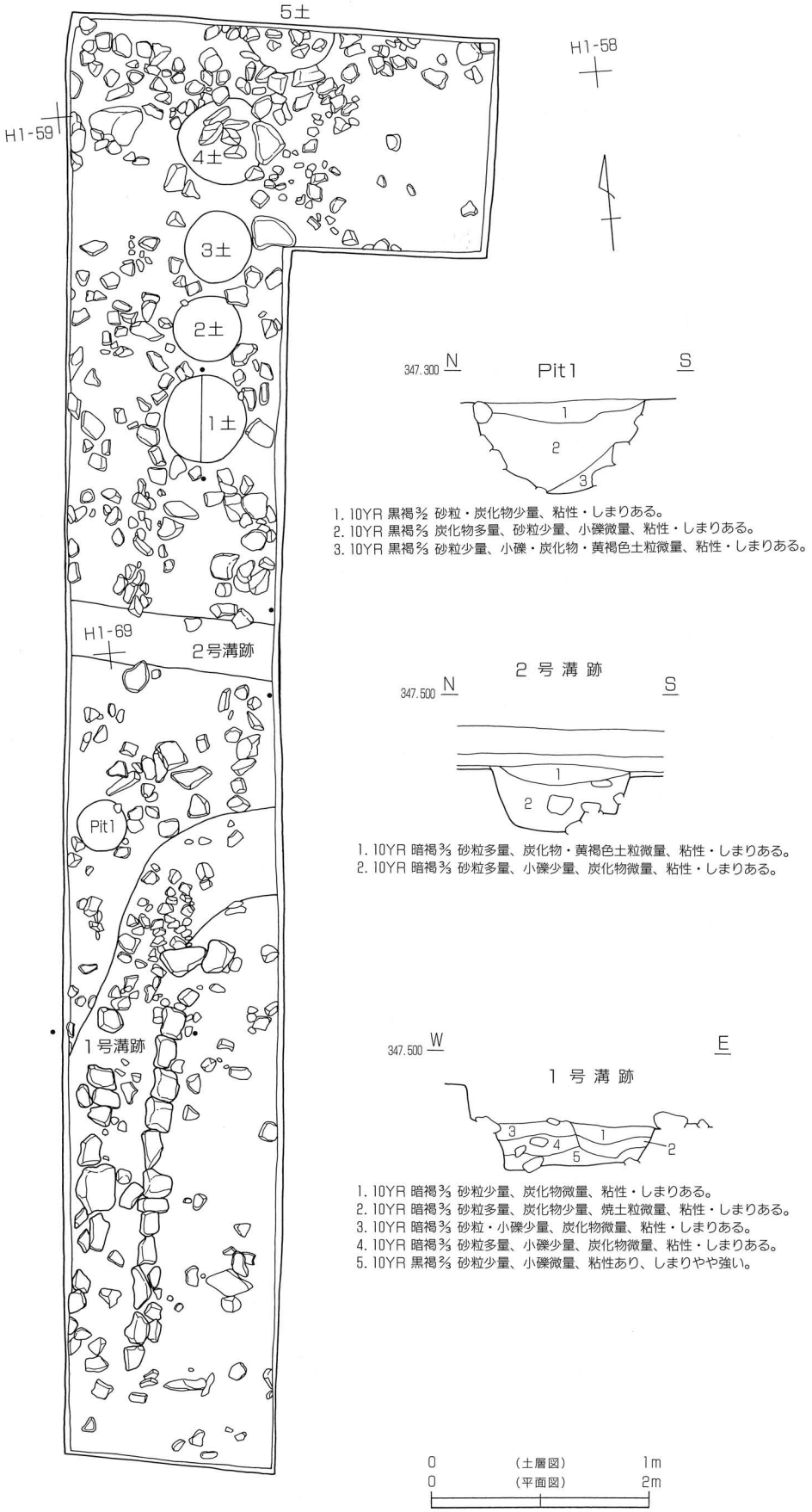

5土
H1-58
H1-59
4土
3土
2土
1土
H1-69
2号溝跡
Pit1
1号溝跡
347.300 N
Pit1
S
1
2
3
1. 10YR 黒褐3/2 砂粒・炭化物少量、粘性・しまりある。
2. 10YR 黒褐3/3 炭化物多量、砂粒少量、小礫微量、粘性・しまりある。
3. 10YR 黒褐3/3 砂粒少量、小礫・炭化物・黄褐色土粒微量、粘性・しまりある。
2 号 溝 跡
347.500 N
S
1
2
1. 10YR 暗褐3/3 砂粒多量、炭化物・黄褐色土粒微量、粘性・しまりある。
2. 10YR 暗褐3/3 砂粒多量、小礫少量、炭化物微量、粘性・しまりある。
347.500 W
E
1 号 溝 跡
3
4
5
1
2
1. 10YR 暗褐3/3 砂粒少量、炭化物微量、粘性・しまりある。
2. 10YR 暗褐3/3 砂粒多量、炭化物少量、焼土粒微量、粘性・しまりある。
3. 10YR 暗褐3/3 砂粒・小礫少量、炭化物微量、粘性・しまりある。
4. 10YR 暗褐3/3 砂粒多量、小礫少量、炭化物微量、粘性・しまりある。
5. 10YR 黒褐3/3 砂粒少量、小礫微量、粘性あり、しまりやや強い。
0 (土層図) 1m
0 (平面図) 2m

図7　字三角トレンチ5

抜き取られたものである可能性が高いと考えられた。

出土遺物：遺構に伴うものは、20～25までは１号溝跡、26がPit１出土である。20～23はかわらけ小皿、23は火鉢、24は土人形、25は青花碗で小野編年Ｃ群である。そのほか、27～33も１号溝跡周辺から出土しており、いずれも同時期の遺物と考えられるが、27～29がかわらけ、30が大窯２段階の灰釉丸皿、31～33は白磁端反皿である。

トレンチ６（遺構：全体図中　遺物：図18）

位　　置：Ｈ１－79・88・89グリッド付近

調査状況：南北方向に設定したトレンチの規模は、長さ約5.5m、幅約2.0mである。小礫などが確認面で多数検出されたが、遺構としてのまとまりや意図的な配置はみられず、明確な遺構は確認されなかった。

検出遺構：遺構なし。

出土遺物：34～36はかわらけ、37は白磁端反皿の底部と考えられる。

トレンチ７（遺構：図８　遺物：図18・21）

位　　置：Ｈ１－99・Ｉ１－９・19グリッド付近

調査状況：東西方向に設定したトレンチと交わるトレンチであり、トレンチの規模は、長さ約13.0m、幅約2.0mである。遺構確認面は、概ね地山面で確認されており、溝状遺構や土坑、Pitなどが確認されている。特にＩ１－９グリッド付近が最も遺構密度が高く、Pitの中には、掘立柱建物跡など構造物になる可能性が高いものも存在した。

検出遺構：個々の遺構の掘削は実施しなかったが、確認した範囲で溝状遺構１条、土坑１基、Pit10基が確認された。

出土遺物：遺構の検出量の割に実測可能なものは意外と少なく、掲載遺物も38の小型かわらけと39の白磁端反皿のほか、115の古銭（開元通寶）のみであった。

トレンチ８（遺構：全体図中　遺物：図18・21）

位　　置：Ｉ１－29・39グリッド付近

調査状況：トレンチ７とは現況で約0.9mの段差が生じている。トレンチの規模は、長さ約12.0m、幅約2.0mであり、検出状況は全体的に礫が多く、トレンチ北側に位置するＩ１－29グリッド内は礫が混じる地山であった。Ｉ１－39グリッド側も類似した状況であったが、礫の間から遺物が出土するなど、僅かながら包含層が残されていた。

　土層観察のためにトレンチ西側をサブトレンチによって掘り下げたが、下層は地山と考えられる礫層に覆われており、掘削も困難な状態であった。

検出遺構：明確な遺構なし。

出土遺物：40～42はかわらけであり、うち41には熔融物が付着していた。43～45は大窯１段階の瀬戸美濃灰釉皿である。このほか、108は釘である。

トレンチ９（遺構：図９　遺物：図18・21）

位　　置：Ｉ１－49～69グリッド付近

調査状況：トレンチ８とは現況で約0.5mの段差が生じている。トレンチの規模は、長さ約11.5m、幅約2.0mである。トレンチ中央から北側は礫層に覆われ、南側は包含層と考えられる暗褐色土層が堆積しており、南端部には石列と小礫群が検出された。

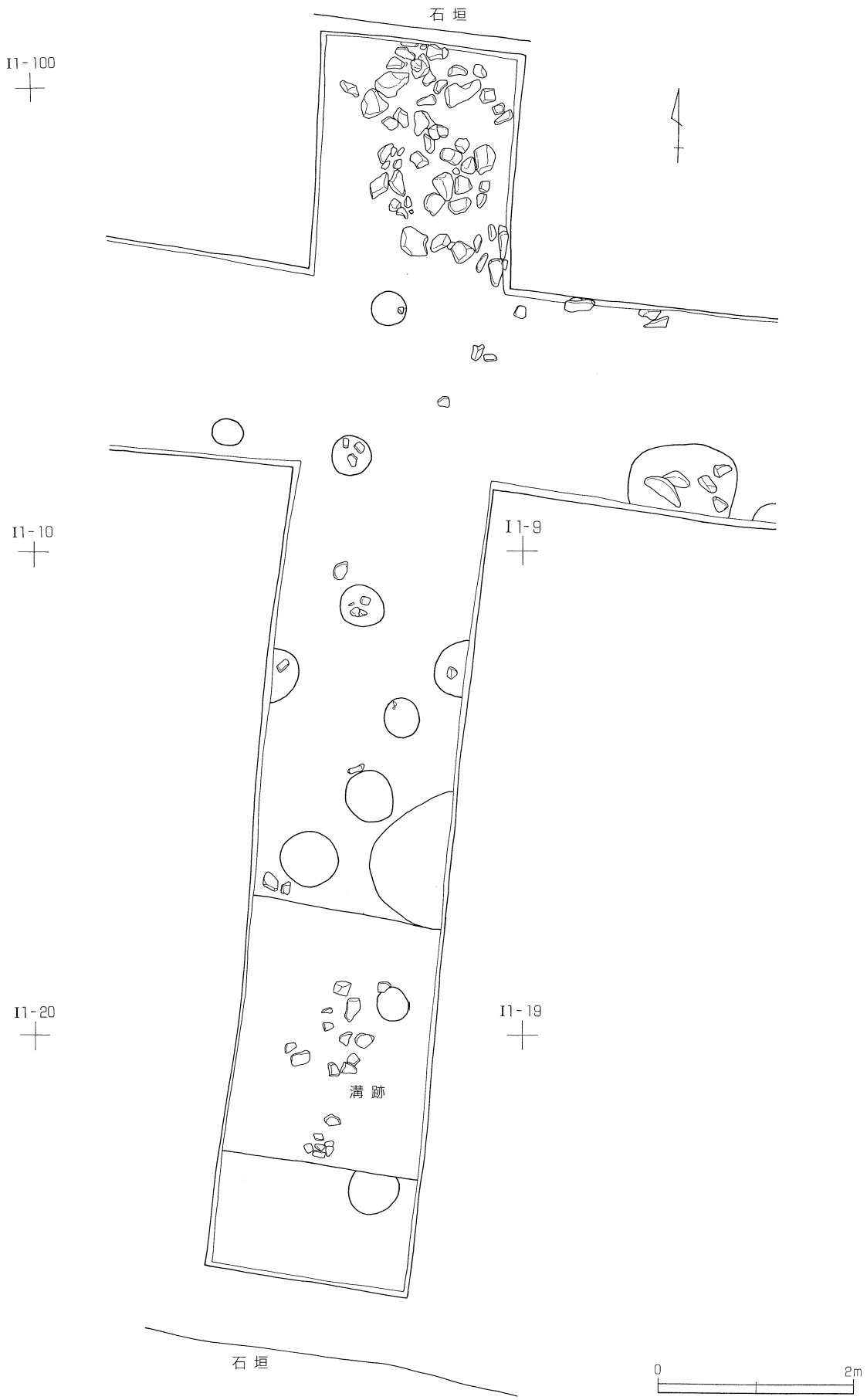


図８　字三角トレンチ７

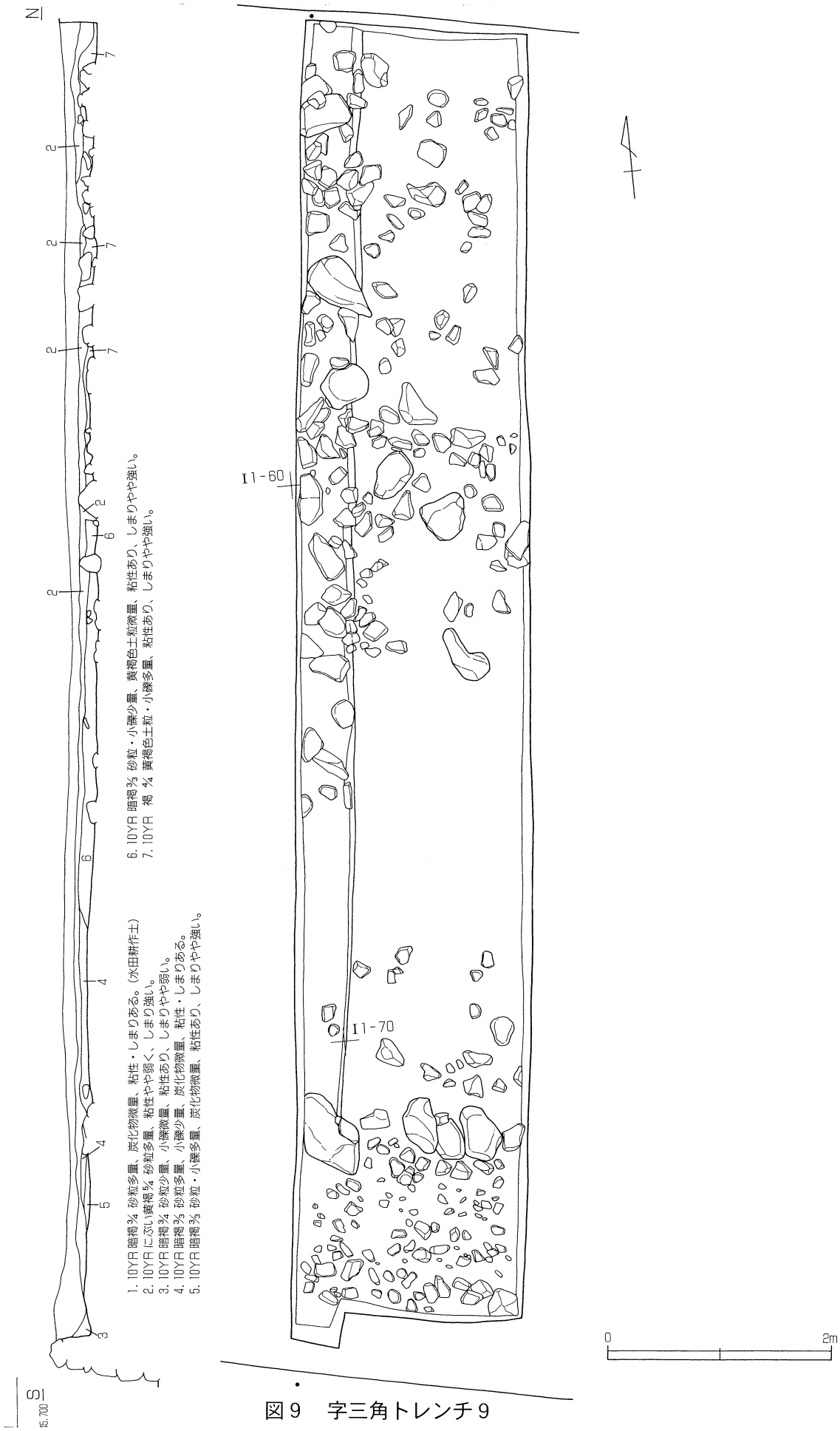

N
S
15.700
1. 10YR 暗褐 3/4 砂粒多量、炭化物微量、粘性・しまりある。(水田耕作土)
2. 10YR にぶい黄褐 5/4 砂粒多量、粘性やや弱く、しまり強い。
3. 10YR 暗褐 3/4 砂粒少量、小礫微量、粘性あり、しまりやや弱い。
4. 10YR 暗褐 3/3 砂粒多量、小礫少量、炭化物微量、粘性・しまりある。
5. 10YR 暗褐 3/3 砂粒・小礫多量、炭化物微量、粘性あり、しまりやや強い。
6. 10YR 暗褐 3/3 砂粒・小礫少量、黄褐色土粒微量、粘性あり、しまりやや強い。
7. 10YR 褐 4/4 黄褐色土粒・小礫多量、粘性あり、しまりやや強い。
I1-60
I1-70
0
2m

図9　字三角トレンチ9

トレンチ西側をサブトレンチによって掘り下げたが、北側の礫層は地山と考えられ、掘削も困難な状態であった。南側については、盛土層が約0.6mまで確認された。

検出遺構：トレンチ南側で検出された石列は、不整形ながら東西方向に伸びており、石列からトレンチ南端までの間には小礫群が検出されている。検出状況から判断し、石列が敷地境界となり、小礫群が道路跡になるのではないかと考えられる。

出土遺物：46・47はかわらけ、48は火鉢、49・50は大窯１・２段階の瀬戸美濃灰釉皿、51は白磁端反皿である。116は古銭（紹聖元寶）である。

トレンチ10（遺構：全体図中　遺物：図18）

位　　置：Ｉ１－80・90グリッド付近

調査状況：トレンチ９とは現況で約0.9mの段差が生じている。トレンチの規模は、長さ約12.0m、幅約2.0mである。トレンチ北側のうち、北端部から約3.0mまでは地山と考えられる礫層が露出し、それ以南は暗褐色層が確認された。暗褐色土層上では、溝跡が１条検出されたが、ほかに明確な遺構は検出されなかった。

トレンチ西側にサブトレンチを掘削して土層観察を行ったが、南側は予想以上に盛土層が厚く、現況の地形の原形が中世段階で造成されたものであることが確認された。

検出遺構：１号溝跡は掘削していないものの、長さ約8.4mであった。覆土の状況から水田跡に伴う溝と考えられ、中世よりは新しい遺構と考えられる。

出土遺物：掲載したものは、52の白磁端反皿である。

トレンチ11（遺構：全体図中　遺物：掲載なし）

位　　置：Ｉ１－100・Ｊ１－グリッド付近

調査状況：南北トレンチの南端に設定されたトレンチであり、南接する道路面からは0.7m、トレンチ10との段差は約1.0m生じている。トレンチの規模は、長さ約6.0m、幅約2.0mである。全体的に礫混じりの黒褐色土層が検出されたが、明確な遺構は確認されなかった。

検出遺構：明確な遺構なし。

出土遺物：微量の遺物が出土しているが、掲載遺物はない。

トレンチ12（遺構：全体図中　遺物：図18・19・21）

位　　置：Ｈ１－91～94グリッド付近

調査状況：東西方向に設定したトレンチのうち、西端の鍛冶小路側に位置しており、平成13年度には本トレンチ北側で遺構の有無を確認するための試掘調査を実施しており、溝跡やPitを検出していた。今回はその広がりと連続性を確認するために併行する位置にトレンチを設定しており、その規模は、長さ約15.0m、幅約2.0mとした。南北トレンチ同様に現地表から約0.3mまで水田層があり、水田床土除去後すぐに中世と考えられる遺構確認面が検出された。

遺構確認面の状況は、暗褐色の包含層が堆積しており、当初は遺構確認ができなかったが、地山近くになり、Ｈ２－92・93グリッドで遺構が確認された。

検出遺構：個々の遺構の掘削は実施しなかったが、遺構面の精査によって土坑１基やPit１基が確認された。

出土遺物：53・54はかわらけで、54は内面に熔融物が付着していた。55は内耳鍋、56は青花碗である。このほか、金属製品で106・107が釘、112の銅製品、114の古銭などが出土している。

トレンチ13（遺構：図10　遺物：なし）

位　　置：Ｈ１－96～100グリッド付近

調査状況：南北トレンチ７と交わるように設定された東西方向で最も長いトレンチであり、規模は、長さ約27.5m、幅約2.0mである。トレンチ西側に位置するＨ１－100、Ｈ２－91グリッドでは水田層直下で礫が入り混じる地山が検出され、明確な遺構は確認されなかった。対照的にトレンチ７より東側では、僅かながら包含層が残存し、土坑や溝跡、Pitが多数確認された。

検出遺構：遺構の検出状況は、全体的に地山面で確認されており、トレンチ内ではPit17基、土坑３基、溝跡１条が検出されている。1.9m間隔で並んでいたPit１～３を半截して確認したところ、深さは約0.4～0.5mであり、堆積土や深度も近似していたことから、掘立柱建物跡などの一部である可能性も想定された。その他、１号土坑を半截したが、非常に浅い掘り込みであり、遺構の性格などは不明であった。

出土遺物：かわらけなどが少量出土しているものの、掲載遺物はない。

トレンチ14（遺構：全体図中　遺物：図19・21）

位　　置：Ｉ１－３～５グリッド付近

調査状況：トレンチ13の東に位置し、約0.4mの段差が生じている。トレンチ規模は、長さ約15.0m、幅約2.0mである。Ｉ１－４・５グリッド一帯には褐色粘土層が広がっており、Ｉ１－４の粘土層上で溝状遺構が確認された。

　しかし、粘土層の性格を把握するため北壁にサブトレンチを掘削したところ、下層から火災の痕跡とみられる炭化物層が確認されたため、粘土層が火災層を覆う整地層であることが判明した。上面で溝状の平面形なども確認されているが、整地の土砂の一部である可能性も想定された。炭化物には肉眼観察で多量の炭化米が含まれていることが判明し、科学分析を行っているが、付近に存在した倉庫などが焼失した可能性も考えられる。

検出遺構：溝状遺構が１条確認されているものの、前述のとおり整地層の一部の可能性が高く、明確な遺構は確認されなかった。

出土遺物：57・58はかわらけで、うち58には熔融物が付着していた。59は瀬戸美濃鉄釉の小坏であった。ほかに104の鉄製品があるが、用途などは不明である。

トレンチ15（遺構：全体図中　遺物：図19）

位　　置：Ｉ１－０～２グリッド付近

調査状況：東西トレンチの最も東に位置し、トレンチ14とは約0.6mの段差が生じている。トレンチ規模は、長さ約9.5m、幅約2.0mであり、東端は藤川脇の道に接する。

　遺構確認面は、地山上で確認されているが、溝状遺構がトレンチ中央付近で数条確認されている。トレンチ東側では石列が確認されており、その付近には暗褐色土の包含層が残されていた。

検出遺構：南北方向の溝状遺構が４条確認されたが、礫が含まれる溝跡と含まれない溝跡に区別された。それぞれの重複関係なども判然としなかった。

　その他、トレンチの東側には躑躅ヶ崎の麓を流れる藤川があり、現在では河川沿いに細い歩道が設けられている。歩道はトレンチよりも一段低い位置にあり、歩道とトレンチの境界には既存の石積みが存在するが、その裏側から現況地形に沿うように石列が検出された。石列は、溝跡などが検出されている遺構面上で検出されたもので、中世遺構と考えられ、敷地

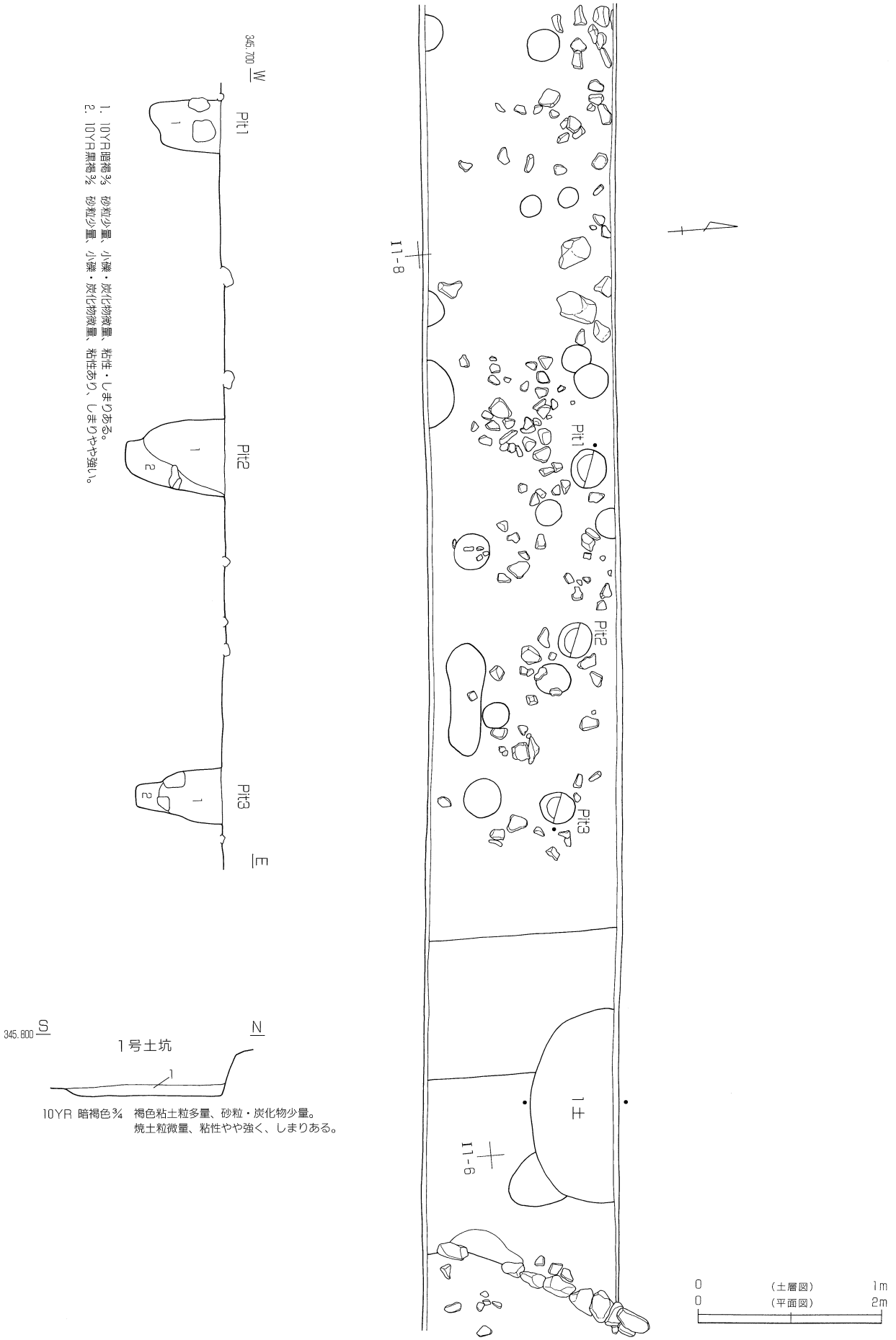


図10　字三角トレンチ13

を何らかの意図で区画する役割があったものと推測される。既設の歩道がいつ頃まで遡るものであるか定かではないものの、場合によっては、石列は道路との境界に設けられた区画施設であった可能性もある。

出土遺物：60は瀬戸美濃灰釉皿、61は五輪塔の水輪であり、溝跡上面から出土したが、意図的に据えられていたものであるかは判断できなかった。

トレンチ16（遺構：図11　遺物：なし）

位　　置：Ｈ１－60・Ｈ２－51グリッド付近

調査状況：トレンチ５の西側で一段高い位置にあり、トレンチは鍛冶小路に接する区画の東端に長さ約5.0m、幅約2.0mの規模で設定した。

検出遺構：Pit１基とＨ２－51から61ライン上で石列が検出されている。合わせて石列東側から小礫群が検出されたが、状況的には南北トレンチ９南端部の状況に類似していた。石列から約1.8m東側は大きな地形の段差が生じているが、検出状況から判断すると、段差と石列の間が道路跡として利用された可能性が想定される。その際、石列は一つの敷地境界として意識されたと考えられ、土地の利用形態が近年まで使用されてきた水田の畦道と重複することから、戦国期の道路がそのまま継続的に使用されてきた可能性が高い。

出土遺物：かわらけなどが少量出土しているが、掲載遺物はない。

トレンチ17（遺構：図11　遺物：図21）

位　　置：Ｈ２－71・72グリッド付近

調査状況：トレンチ規模は、長さ約5.0m、幅約2.0mであった。

検出遺構：トレンチ16同様にＨ２－72グリッド内において小礫群が検出され、北壁際で石列の一部とみられる礫が１石検出された。位置的にはトレンチ16を南へ下った場所でもあり、東側の段差との間が道路として使用された可能性が高い。

出土遺物：かわらけなどが少量出土しているが、掲載遺物は、62は熔融物付着土器で、63は砥石、64は須恵器甕片であった。111の管状の銅製品のみである。

第２節　字高塀

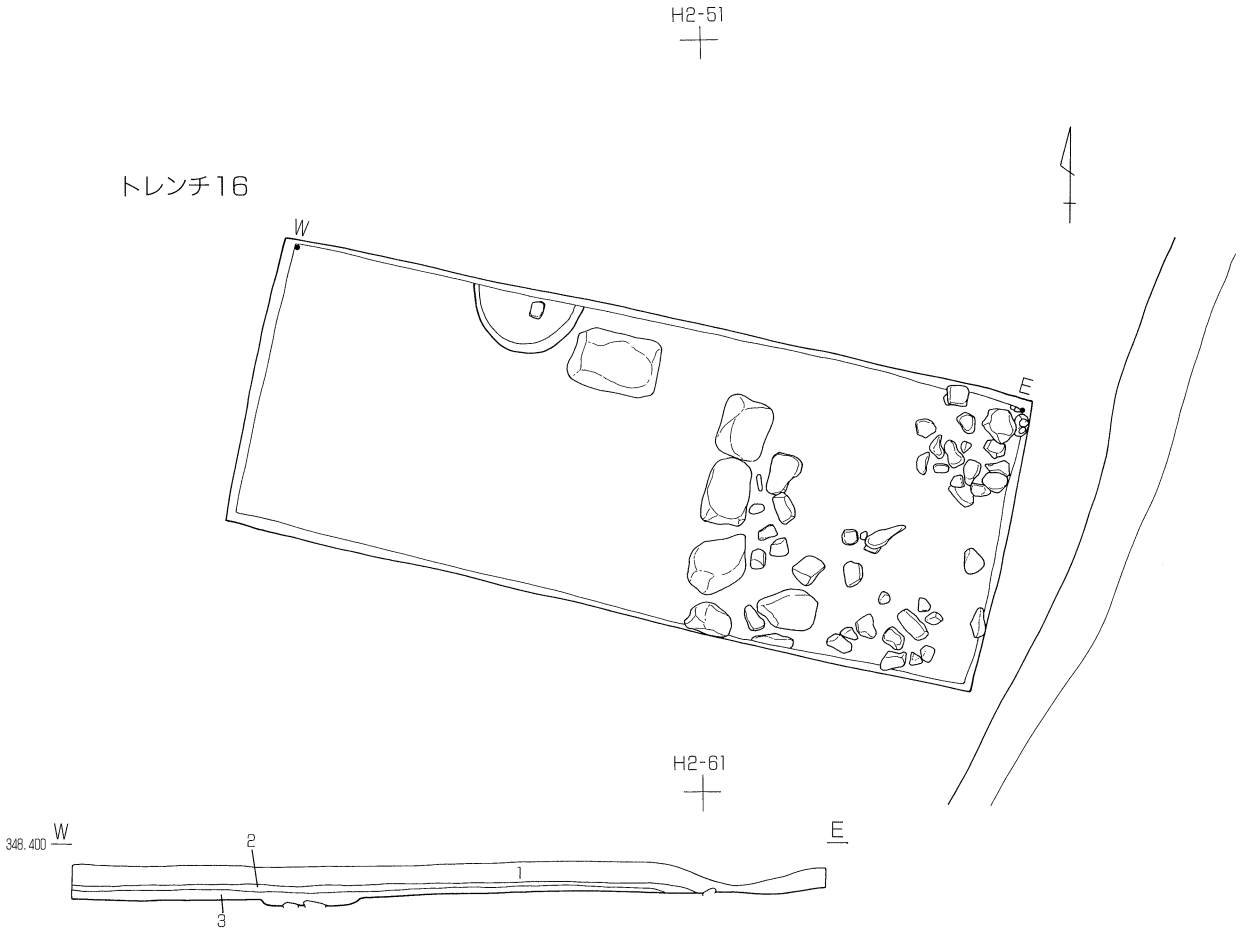
大きく上下２区画に造成されていた敷地に対して下段部で３箇所、上段部で２箇所のトレンチを設定した。下段については、惣堀の立ち上がりを捉えるためにＬ字型に設定し、東西方向をトレンチ１、南北方向をトレンチ２とした。さらにトレンチ１・２の東側に南北方向のトレンチ３を設定した。上段部でも惣堀の範囲確認のために堀に近接する敷地西側で東西方向にトレンチ４を設定するとともに、トレンチ２の軸線に合わせるように南北方向にトレンチ５を設定して調査した。

トレンチ１・２（遺構：図12・13　遺物：図19・20）

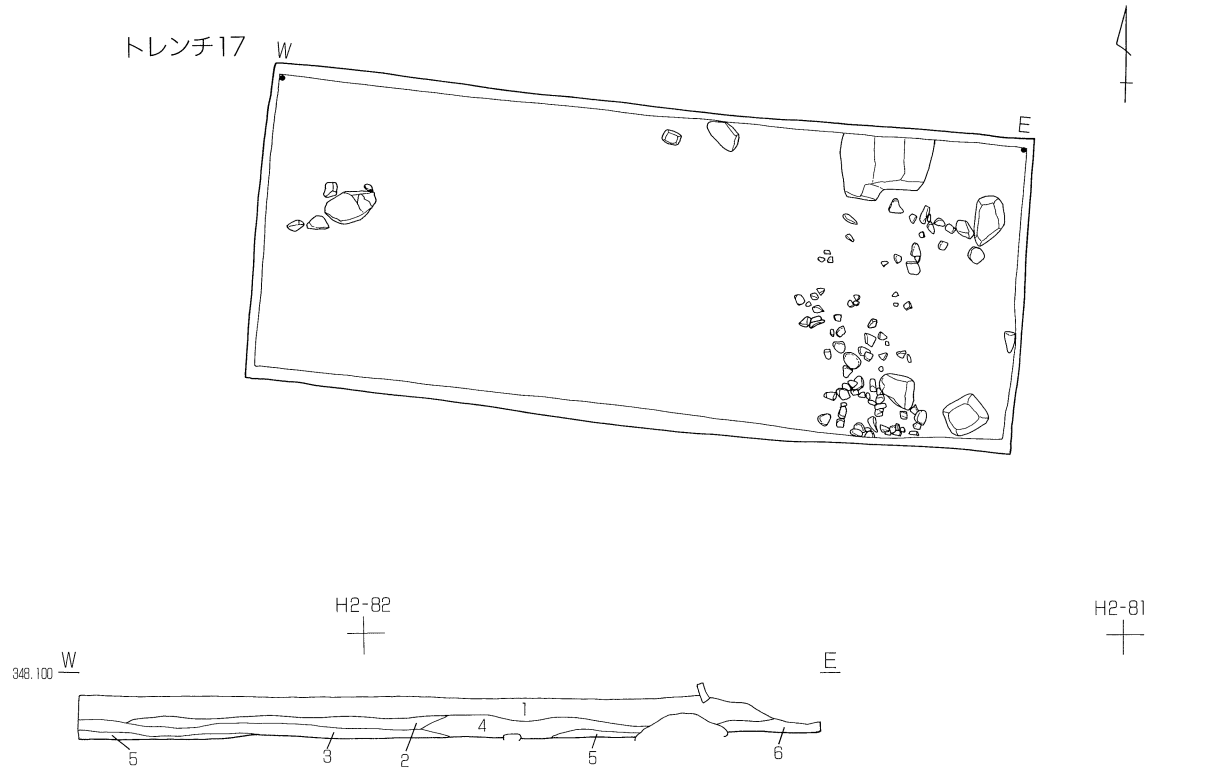
位　　置：Ｇ２－15・16、Ｇ２－23～25、Ｇ２－34・44グリッド

調査状況：東西方向に設定したトレンチ１の規模は、トレンチ２との接続部から長さ約11.0m、幅約2.2mで調査したが、東側は惣堀際までさらに長さ約3.0m、幅約1.0mの規模で延長した。南北方向に設置したトレンチ２の規模は、長さ約13.5m、幅約1.8mで設定したが、トレンチ１同様に惣堀の範囲確認のため、南側に長さ約3.0m、幅約1.0mで拡張している。

調査区の層序は、全体に約0.6mの盛土層があり、その下層から炭化物を多量に含む暗褐色土が全面で確認された。掘り下げたところで東西方向の溝跡が16条検出され、本格的な



1. 10YR 暗褐 3/4 砂粒多量、炭化物微量、粘性・しまりある。(水田耕作土)
2. 2.5Y 黄褐 5/4 砂粒多量、粘性やや弱く、しまり強い。
3. 10YR 暗褐 3/3 砂粒少量、小礫・炭化物・焼土粒微量、粘性あり、しまりやや強い。



4. 10YR 暗褐 3/4 砂粒少量、炭化物微量、粘性あり、しまりやや強い。
5. 10YR 暗褐 3/3 砂粒多量、炭化物・焼土粒微量、粘性・しまりある。
6. 10YR 暗褐 3/4 砂粒・小礫少量、粘性・しまりある。

図11　字三角トレンチ16・17

調査はその段階で開始したが、この地点では水田跡は確認されていない。

検出遺構：盛土層除去後の上層において確認された16条の溝跡のほか、地山に近い下層から土坑５基、Pit９基が確認されている。そのうち、上層で確認された16条の溝跡については、部分的に掘削し、土層堆積や形状等を確認したが、近現代の遺物が出土したことから時期的には新しい遺構と判断し、すべて完掘した。溝跡の性格は、畑の畝跡と考えられる。

土坑は５基のうち１～４号土坑を半截している。いずれも隅丸方形や不整形な平面形であり、深さ約0.1m程度と浅く、出土遺物も少なかったことから、性格は不明である。Pitについては、平面形の確認に止め、掘削は行っていない。

惣堀については、既存の護岸として石積みが施されていたが、調査の結果、トレンチ１西端部では明確な立ち上がりは確認されず、遺構面が断ち割られているような状況が確認された。トレンチ２南端部では、護岸石積みから約1.8m内側で堀跡の立ち上がりが検出された。全体の形状等は不明であったが、既存の護岸軸に沿った形で掘り込まれた素掘りの堀であり、この地点では石積み等は確認されなかった。

出土遺物：遺構に伴う遺物は、65～70が上層の畑の畝跡と考えられる溝跡群からの出土であり、71～73は17号溝跡から出土している。その他74～84までは出土位置を計測した上での取り上げや一括であるが、74～81までがかわらけで、うち74～76、80・81は熔融物付着土器であり、82は徳利、83は青花碗、84は須恵器であった。

トレンチ３（遺構：図14　遺物：なし）

位　　置：Ｇ２－42、Ｇ２－52・53グリッド

調査状況：東西方向に設定したトレンチ規模は、長さ約7.0m、幅約2.2mで調査し、トレンチ１・２同様盛土を除去したところで調査を開始した。トレンチ北東側は大きく撹乱を受けていたものの、他は比較的良好な状態であったため、確認作業を進めたところ、トレンチ南側で惣堀が確認された。

検出遺構：既存の惣堀護岸石積みの内側からトレンチ２と同様に素掘りの堀の立ち上がりが検出されている。規模等は一部分であるため定かではないが、トレンチ３南側に存在する溜池開削時に破壊を免れたことは幸いであった。

出土遺物：少量ながら出土しているものの、掲載遺物はない。護岸石積み裏の栗石層から江戸後期の茶碗片が出土している。

トレンチ４（遺構：図14　遺物：なし）

位　　置：Ｆ２－76・77・86グリッド

調査状況：東西方向に設定したトレンチ規模は、長さ約7.0m、幅約3.0mで調査したが、全体に撹乱が著しく、特に西側はコンクリート擁壁によってすべて破壊されていた。しかし、トレンチ東側では深さ約0.7mで水田層が確認されたことから、遺構面が残存する可能性もあるとして、人力で確認作業を進めた。

検出遺構：トレンチ南・西側は大きく撹乱を受けており、東側で僅かに残された水田層直下の確認においても明確な遺構は検出されなかった。ただし、地山層が検出されたことにより、調査区を含む敷地北側一帯の地盤の高さを確認することはできた。

出土遺物：遺物なし。

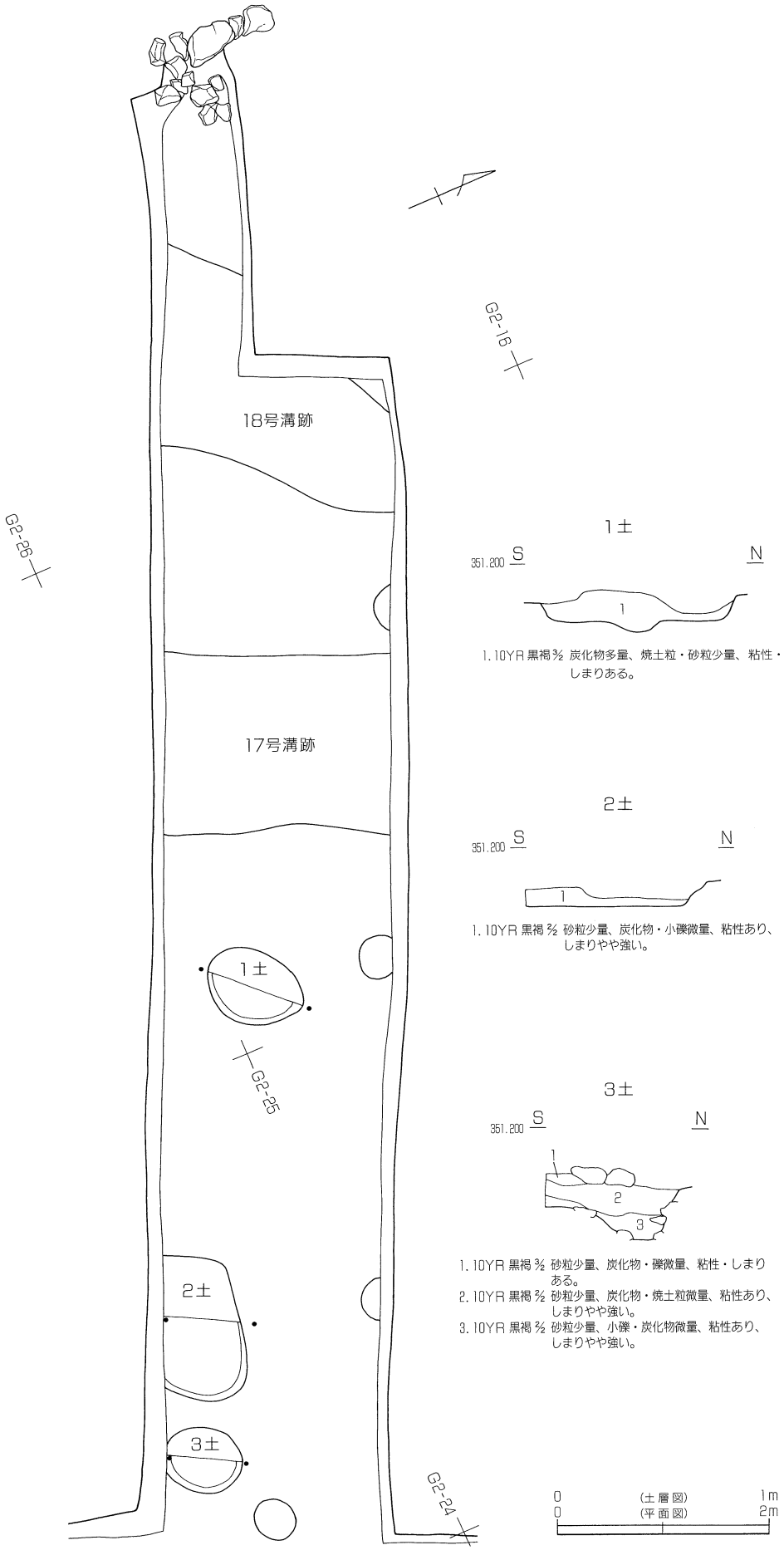


図12　字高塀トレンチ1

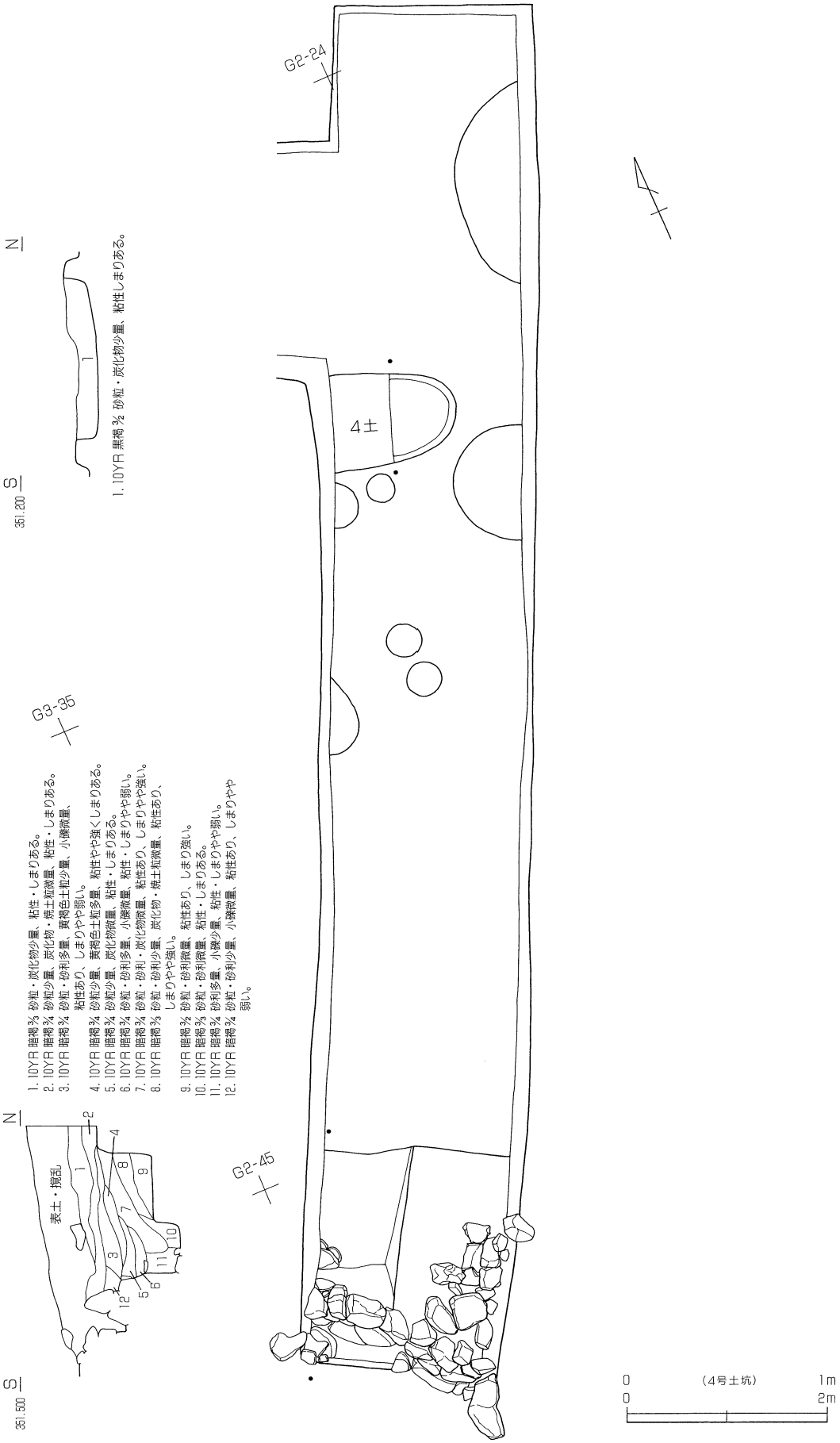
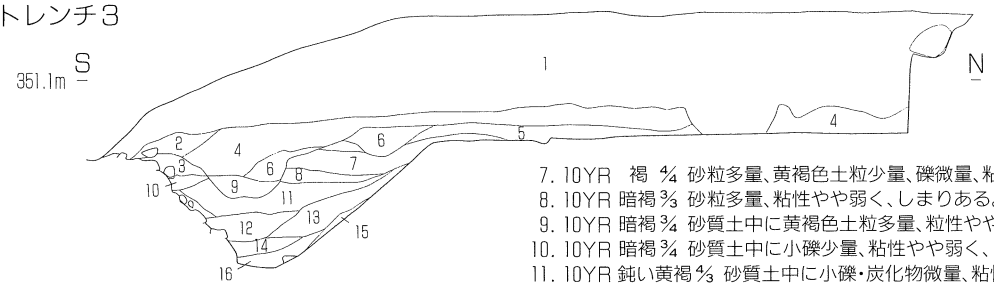
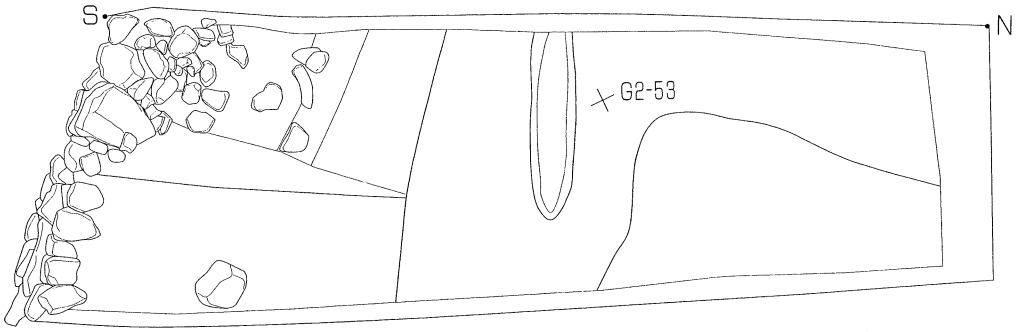


図13　字高塀トレンチ2

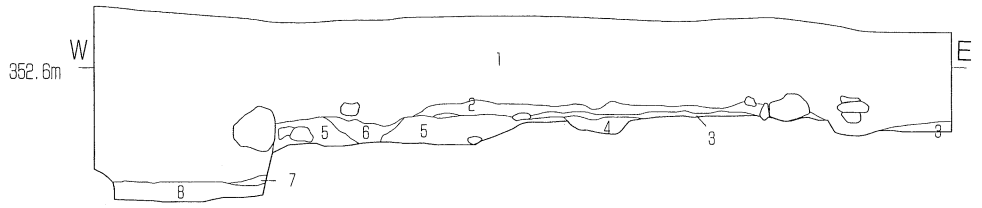
トレンチ3



1. 鈍い黄褐色土等による表土・盛土層。
2. 10YR 暗褐 3/4 砂粒多量、炭化物微量、粘性あり、しまりやや多い。
3. 10YR 暗褐 3/4 砂粒少量、小礫微量、粘性・しまりある。
4. 10YR 暗褐 3/4 砂粒多量、炭化物少量、粒性あり、しまりやや強い。
5. 10YR 暗褐 3/4 砂粒多量、炭化物微量、粘性あり、しまりやや弱い。
6. 10YR 暗褐 3/4 砂粒多量、炭化物・黄褐色土粒微量、粘性・しまりある。
7. 10YR 褐 4/4 砂粒多量、黄褐色土粒少量、礫微量、粘性・しまりある。
8. 10YR 暗褐 3/3 砂粒多量、粘性やや弱く、しまりある。
9. 10YR 暗褐 3/4 砂質土中に黄褐色土粒多量、粒性やや弱く、しまりある。
10. 10YR 暗褐 3/4 砂質土中に小礫少量、粘性やや弱く、しまりある。
11. 10YR 鈍い黄褐 4/3 砂質土中に小礫・炭化物微量、粘性なし、しまりある。
12. 10YR 暗褐 3/4 砂質土中に小礫微量、粘性なし、しまりある。
13. 10YR 暗褐 3/3 砂粒多量、炭化物微量、粒性・しまりある。
14. 10YR 暗褐 3/3 砂粒少量、炭化物微量、粘性強く、しまりある。
15. 10YR 黒褐 3/2 砂粒少量、粘性あり、しまりやや強い。
16. 2.5Y 暗オリーブ褐 3/3 砂粒少量、炭化物微量、粘性やや強く、しまりある。



トレンチ4



1. 砕石等による表土・盛土層
2. 2.5Y 暗オリーブ褐 3/3 砂粒多量、炭化物微量、粘性あり、しまりやや強い。(水田耕作土層)
3. 2.5Y オリーブ褐 4/3 砂粒多量、粘性なく、しまり強い。(水田床土層)
4. 10YR 暗褐 3/4 砂粒多量、炭化物・黄褐色土粒微量、粘性・しまりある。
5. 10YR 暗褐 3/4 砂粒多量、小礫少量、炭化物微量、粘性あり、しまりやや強い。
6. 10YR 暗褐 3/4 砂粒少量、黄褐色粒微量、粘性・しまりある。
7. 10YR 褐 4/4 地山層
8. 2.5Y オリーブ褐 4/6 地山層

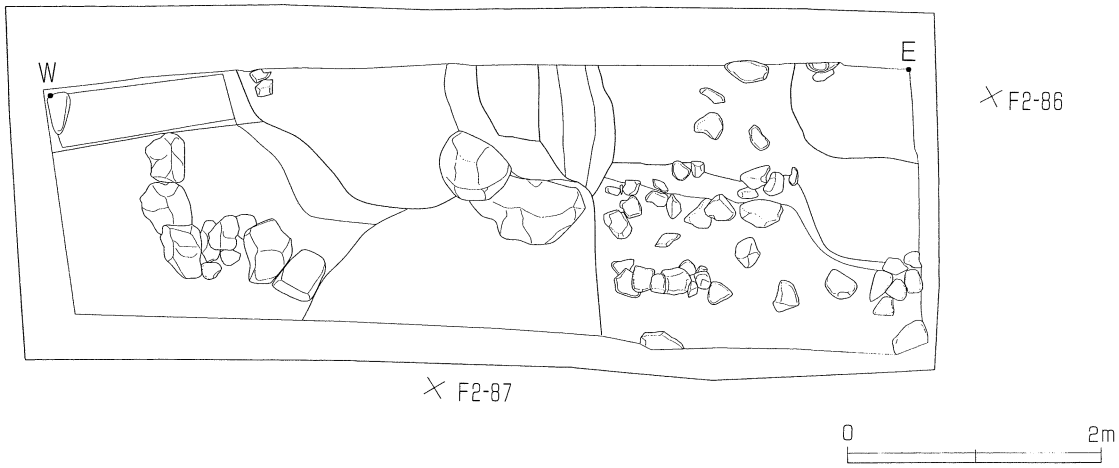


図14　字高塀トレンチ3・4

トレンチ５（遺構：図15・16　遺物：図20・21）

位　　置：Ｇ２－２・３・13グリッド

調査状況：当初の調査規模は、南北方向に長さ約8.0m、幅約2.0mのトレンチで調査したが、Pitや焼土で覆われた土坑等が確認されたことを受け、調査区の性格を把握するために長さ約9.5m、幅約4.5mまで拡張して調査を実施した。

基本層序は、近接するトレンチ４とは異なり、砕石等による盛土層が約1.0mと厚く、以前の宅地造成が北側の高い敷地に合わせて平坦面が造り出されたことが確認された。盛土層直下には水田層が検出され、遺構面は、水田層除去後に全体的に確認された。

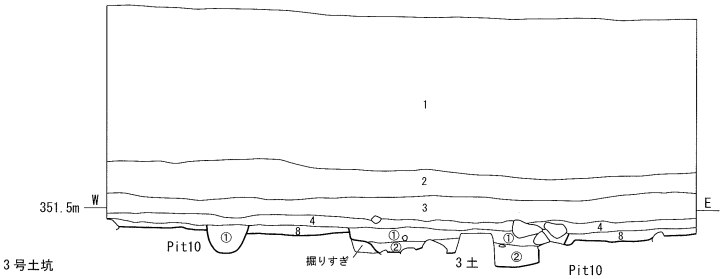
検出遺構：溝跡１条、土坑４基、Pit13基を検出し、いずれも半截によって確認している。溝跡は調査区を東西方向に横断しており、上層の形状は不整形であったが、地山を掘り込む下層はU字の断面形であった。

土坑のうち、１号土坑については、床面全体が焼けており、覆土中にも焼土や炭化物が多量に含まれていた。このことから、竈や鍛冶炉など火を扱った場所であると考えられるが、用途の特定はできなかった。

Pitについては、部分的な調査であったために全体像の確認はできなかったが、調査区東壁際のPit３・７・９は、規模や軸線も類似することから、掘立柱建物跡などの構造物である可能性も想定された。

出土遺物：遺構に伴う遺物は、85・86が１号溝跡からの出土であり、86には熔融物が付着していた。１号土坑からは87の常滑甕片が出土し、２号土坑からは88・89のかわらけと113の古銭（天禧通寶？）が出土しており、89のかわらけには熔融物が付着していた。Pit１からは90・91・92のかわらけ、Pit９からは117の古銭（永楽通寶）、Pit10からは93の熔融物が付着したかわらけがそれぞれ出土した。

その他、調査区内からはかわらけを中心に出土しており、94から99までがかわらけで、うち97～99までは熔融物が付着している。100は瀬戸美濃擂鉢、101は焼き締めの大皿であり、102・103のかわらけは、調査区北西の焼土等が多量に含まれた包含層掘削時に出土したものであるが、後に１号土坑が検出されたため、遺構に伴うものであった可能性もあるが、確証が得られなかったために遺構とは別に掲載した。



1. 砕石等による表土・盛土層
2. 2.5Y 暗オリーブ褐 3/3 盛土層
3. 2.5Y 黒褐 3/2 砂粒・炭化物少量、粘性やや強く、しまりある。（水田耕作土層）
4. 2.5Y 暗オリーブ褐 4/4 砂粒多量、炭化物微量、粘性やや弱く、しまり強い。（水田床土層）
5. 10YR 暗褐 3/3 砂粒多量、炭化物微量、粘性あり、しまりやや強い。
6. 10YR 暗褐 3/3 砂粒多量、炭化物少量、焼土粒微量、粘性・しまりある。
7. 10YR 暗褐 3/4 砂粒少量、炭化物微量、粘性・しまりある。
8. 2.5Y 暗オリーブ褐 3/3 砂粒多量、小礫・炭化物微量、粘性・しまりやや強い。

3号土坑
1. 2.5Y 黒褐 3/2 砂粒・小礫少量、炭化物微量、粘性・しまりある。
2. 2.5Y 暗オリーブ褐 3/3 砂粒多量、小礫・炭化物微量、粘性あり、しまりやや強い。

Pit10
1. 2.5Y 黒褐 3/2 砂粒多量、小礫・炭化物微量、粘性やや弱く、しまりある。

Pit7
1. 10YR 黒褐 3/2 砂粒少量、礫・小礫・炭化物微量、粘性やや強く、しまりある。
2. 10YR 黒褐 3/2 砂粒多量、炭化物・焼土粒少量、粘性・しまりある。
3. 10YR 黒褐 3/2 砂粒・小礫少量、粘性・しまりある。

Pit3
1. 10YR 暗褐 3/3 砂粒少量、礫・小礫・炭化物微量、粘性・しまりある。
2. 10YR 暗褐 3/3 砂粒少量、炭化物微量、粘性・しまりある。

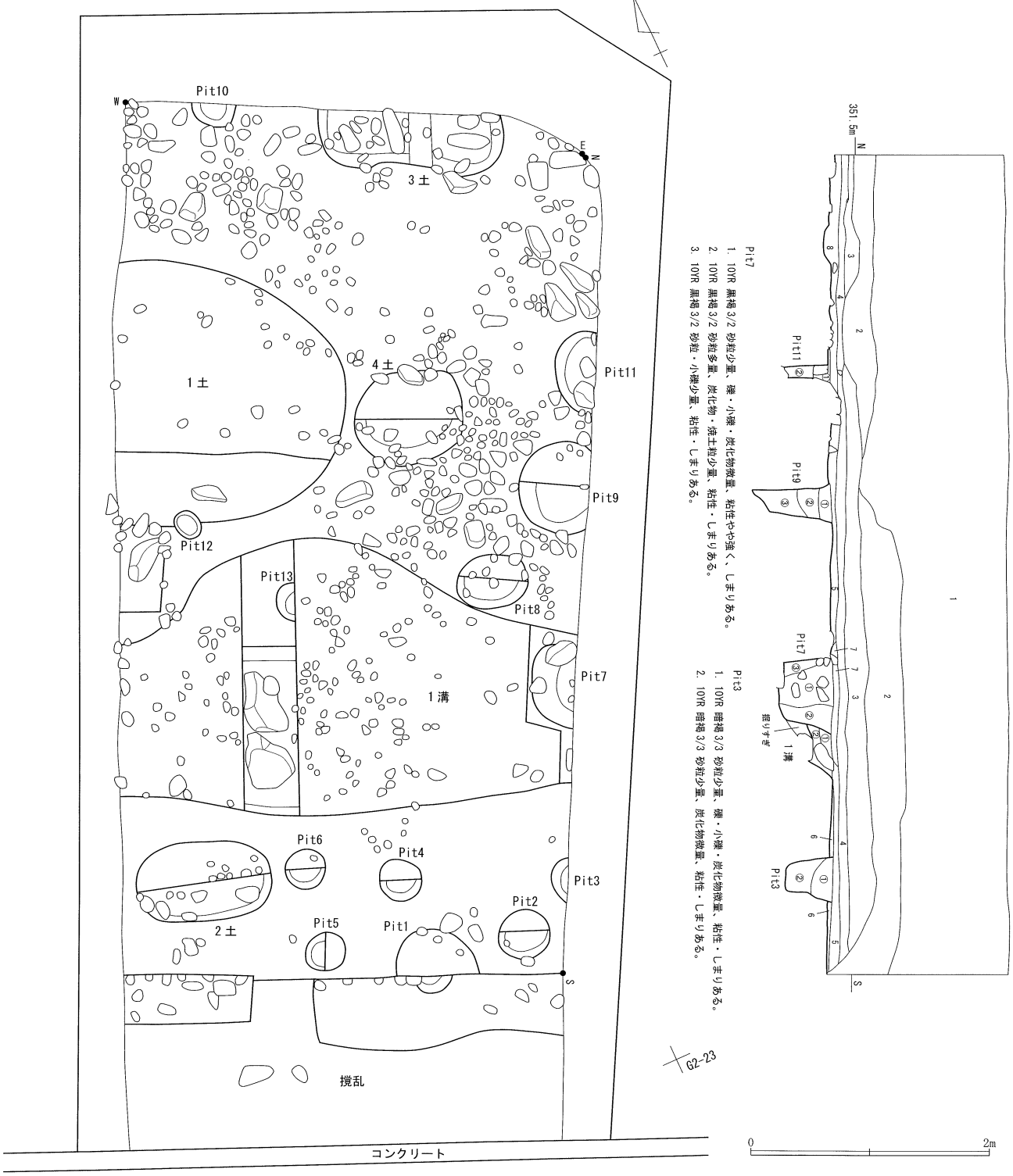
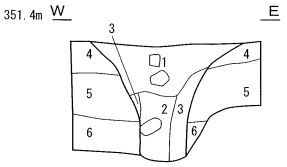


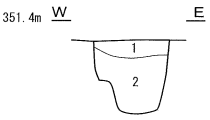
図15　字高塀トレンチ５

Pit1



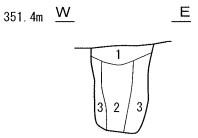
1. 10YR 黒褐 3/2 砂粒・炭化物・焼土粒多量、礫・小礫微量、粘性やや強く、しまりある。
2. 10YR 黒褐 2/2 炭化物・焼土粒多量、砂粒少量、礫微量、粘性やや強く、しまりある。
3. 10YR 黒褐 3/2 砂粒少量、炭化物・小礫微量、粘性・しまりある。
4. 10YR 黒褐 3/2 砂粒多量、炭化物・焼土粒微量、粘性あり、しまりやや強い。
5. 10YR 黒褐 2/2 砂粒多量、小礫微量、粘性あり、しまりやや強い。
6. 10YR 鈍い黄褐 4/3 地山層

Pit2



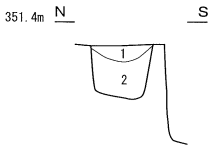
1. 10YR 黒褐 3/2 砂粒多量、炭化物少量、粘性・しまりある。
2. 10YR 黒褐 3/2 砂粒少量、炭化物微量、粘性・しまりある。

Pit4



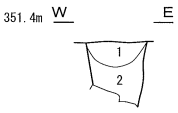
1. 10YR 暗褐 3/3 砂粒多量、炭化物少量、小礫・焼土粒微量、粘性やや弱く、しまりやや強い。
2. 10YR 黒褐 3/2 砂粒・炭化物少量、粘性・しまりある。
3. 10YR 黒褐 3/2 砂粒少量、黄褐色土粒・炭化物微量、粘性やや強く、しまりある。

Pit5



1. 10YR 暗褐 3/3 砂粒多量、炭化物・焼土粒少量、粘性やや弱く、しまりやや強い。
2. 10YR 暗褐 3/3 砂粒少量、小礫・炭化物・焼土粒微量、粘性・しまりある。

Pit6

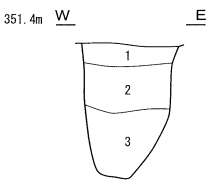


1. 10YR 暗褐 3/3 砂粒・炭化物、焼土粒多量、粘性あり、しまりやや強い。
2. 10YR 暗褐 3/3 砂粒少量、小礫・炭化物微量、粘性・しまりある。

Pit8

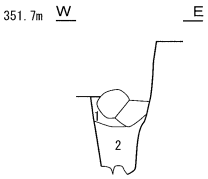
1. 10YR 黒褐 3/2 砂粒多量、小礫・炭化物少量、粘性あり、しまりやや強い。

Pit9



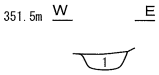
1. 10YR 黒褐 3/2 砂粒多量、小礫少量、黄褐色土微量、粘性・しまりある。
2. 2.5Y 暗オリーブ褐 3/3 砂粒多量、小礫少量、炭化物微量、粘性・しまりある。
3. 2.5Y 暗オリーブ褐 3/3 砂粒多量、小礫・炭化物微量、粘性やや強く、しまりある。

Pit11



1. 10YR 暗褐 3/3 小礫多量、砂粒少量、炭化物微量、粘性・しまりある。
2. 10YR 黒褐 3/2 砂粒少量、炭化物微量、粘性やや強く、しまりある。

Pit12



1. 10YR 暗褐 3/3 砂粒少量、炭化物微量、粘性・しまりある。

Pit13・1号溝跡

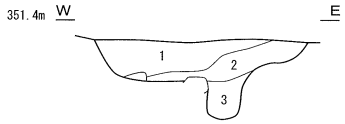
1号溝跡

1. 10YR 黒褐 3/2 小礫・炭化物・焼土粒多量、砂粒少量、粘性・しまりある。
2. 2.5Y 黒褐 3/2 砂粒多量、小礫・炭化物微量、粘性やや弱く、しまりやや強い。
3. 10YR 黒褐 2/3 砂粒少量、小礫・炭化物微量、粘性あり、しまりやや強い。

Pit13

1. 2.5Y 暗オリーブ褐 3/3 砂粒多量、小礫・炭化物微量、粘性やや弱く、しまりある。
2. 10YR 黒褐 3/2 砂粒・炭化物微量、粘性やや強く、しまりある。

2号土坑



1. 10YR 暗褐 3/3 炭化物多量、砂粒・黄褐色土少量、小礫微量、粘性・しまりある。
2. 10YR 暗褐 3/3 砂粒多量、炭化物微量、粘性・しまりある。
3. 10YR 黒褐 3/2 砂粒・炭化物微量、粘性・しまりある。

1号土坑

1. 10YR 黒褐 3/1 炭化物・焼土粒多量、砂粒少量、小礫微量、粘性やや強く、しまりある。

4号土坑

1. 2.5Y 黒褐 3/2 砂粒・炭化物少量、小礫微量、粘性やや強く、しまりある。

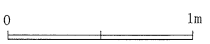


図16　字高塀トレンチ５遺構断面図

出土遺物観察表

単位：cm　（　）は反転実測による復元値

掲載番号	実測番号	出土位置・遺構	産地	器種	法量 口径	器高	底径	色調	焼成	備考
1	13	三角トレンチ1 G1－67No.1 Pit1	在地	瓦質香炉	10.0	6.9	7.7	5Y オリーブ黒 3/1	良	
2	72	三角トレンチ1 G1－88No.2	在地	かわらけ	(10.7)	2.1	(5.6)	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
3	73	三角トレンチ1 G1－88	在地	火鉢	－	－	－	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
4	1	三角トレンチ2 H1－8No.11 1号溝跡	在地	かわらけ	10.1	2.0	4.8	7.5YR 橙 7/6	良	
5	126	三角トレンチ2 H1－8No.25 1号土坑	在地	かわらけ	－	－	5.1	2.5Y 黄灰 6/2	良	熔融物付着
6	25	三角トレンチ2 H1－18No.2	在地	かわらけ	－	－	(7.4)	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
7	28	三角トレンチ2 H1－18No.4	在地	かわらけ	(10.7)	2.3	(6.0)	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
8	40	三角トレンチ2 H1－8	在地	かわらけ	(9.3)	1.9	(5.6)	10YR 鈍い黄褐 7/4	良	
9	43	三角トレンチ2 H1－8	瀬戸美濃	灰釉皿	(11.8)	－	－	10YR 灰白 8/2	良	
10	127	三角トレンチ2 H1－8No.13・28	中国	青花皿	(11.8)	2.4	7.4	N 灰白 8/	良	
11	24	三角トレンチ3 H1－38	在地	かわらけ	(9.7)	2.7	(5.8)	7.5YR 橙 7/6	良	
12	123	三角トレンチ3 H1－39No.9	在地	かわらけ	(10.6)	2.3	6.5	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
13	39	三角トレンチ3 H1－38	在地	かわらけ	(13.0)	－	－	7.5YR 鈍い褐 5/4	良	
14	38	三角トレンチ3 H1－38No.6	在地	鉢	－	－	(14.2)	7.5YR 橙 6/6	良	
15	41	三角トレンチ3 H1－38	瀬戸美濃	鉄釉皿	－	－	(6.5)	10YR 浅黄橙 8/4	良	
16	30	三角トレンチ3 H1－38No.5	瀬戸美濃	灰釉皿	－	－	(5.8)	2.5Y 灰白 8/1	良	
17	34	三角トレンチ3 H1－28No.5	瀬戸美濃	擂鉢	－	－	－	5Y 灰白 8/1	良	
18	36	三角トレンチ3 H1－38No.2	中国	青花皿	－	－	(7.0)	N 灰白 8/	良	
19	42	三角トレンチ4 H1－48	瀬戸美濃	灰釉皿	(9.4)	－	－	2.5Y 灰白 8/2	良	
20	20	三角トレンチ5 H1－68No.6 1号溝跡	在地	かわらけ	(7.8)	2.1	(4.8)	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
21	22	三角トレンチ5 H1－69No.5 1号溝跡	在地	かわらけ	(7.0)	1.6	(4.6)	5YR 鈍い橙 6/4	良	
22	3	三角トレンチ5 H1－79No.6 1号溝跡	在地	かわらけ	(6.9)	1.8	(3.9)	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
23	37	三角トレンチ5 H1－69No.10 1号溝跡	在地	火鉢	－	－	－	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
24	14	三角トレンチ5 H1－79No.5 1号溝跡	在地	土人形	－	4.7	－	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
25	35	三角トレンチ5 H1－69No.4 1号溝跡	中国	青花碗	(11.6)	－	－	7.5Y 灰白 8/1	良	
26	125	三角トレンチ5 H1－58 1号土坑	瀬戸美濃	灰釉皿				5Y 灰白 7/1	良	
27	4	三角トレンチ5 H1－78No.8	在地	かわらけ	(7.4)	1.8	(4.1)	5YR 鈍い橙 6/4	良	口縁部煤
28	5	三角トレンチ5 H1－79No.4	在地	かわらけ	－	－	5.6	5YR 明赤褐 5/6	良	
29	23	三角トレンチ5 H1－79No.10	在地	かわらけ	－	－	(6.2)	2.5Y 灰黄 6/2	良	
30	29	三角トレンチ5 H1－79No.9	瀬戸美濃	灰釉皿	(11.0)	－	－	2.5Y 灰黄 7/2	良	
31	44	三角トレンチ5 H1－78	中国	白磁皿	(12.0)	－	－	2.5Y 灰白 7/1	良	31と同一か
32	32	三角トレンチ5 H1－78No.11	中国	白磁皿	(12.0)	－	－	2.5Y 灰白 7/1	良	32と同一か
33	33	三角トレンチ5 H1－68No.3	中国	白磁皿	(11.0)	－	－	5Y 灰白 7/1	良	
34	27	三角トレンチ6 H1－88	在地	かわらけ	12.2	2.5	6.9	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
35	26	三角トレンチ6 H1－89No.4	在地	かわらけ	(11.4)	2.2	(5.7)	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
36	19	三角トレンチ6 H1－98No.1	在地	かわらけ	(13.5)	2.9	(7.2)	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
37	31	三角トレンチ6 H1－88No.3	中国	白磁皿	－	－	(6.2)	5Y 灰白 8/1	良	
38	6	三角トレンチ7 I1－9No.4	在地	かわらけ	(3.3)	0.9	3.0	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
39	70	三角トレンチ7 I1－19	中国	白磁皿	(13.6)	－	－	5Y 灰白 8/1	良	
40	54	三角トレンチ8 I1－29No.3	在地	かわらけ	(11.5)	－	－	7.5YR 橙 6/6	良	
41	64	三角トレンチ8 I1－39	在地	かわらけ	(7.0)	－	－	5Y 灰 5/1	良	熔融物付着
42	55	三角トレンチ8 I1－39No.2	在地	かわらけ	(12.7)	－	－	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
43	63	三角トレンチ8 I1－39	瀬戸美濃	灰釉皿	(11.0)	－	－	5Y 灰 4/1	不良	二次被熱か
44	65	三角トレンチ8 I1－39	瀬戸美濃	灰釉皿	(11.4)	－	－	5Y 灰白 8/1	良	
45	66	三角トレンチ8 I1－39	瀬戸美濃	灰釉皿	(11.6)	－	－	7.5Y 灰白 7/1	良	
46	60	三角トレンチ9 I1－59No.5	在地	かわらけ	11.7	2.7	6.4	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
47	56	三角トレンチ9 I1－69No.4	在地	かわらけ	－	－	(6.4)	5YR 橙 6/6	良	
48	59	三角トレンチ9 I1－59No.9	在地	火鉢	(26.0)	－	－	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
49	67	三角トレンチ9 I1－59	瀬戸美濃	灰釉皿	－	－	(6.7)	2.5Y 灰黄 7/2	良	
50	57	三角トレンチ9 I1－59No.3	瀬戸美濃	灰釉皿	－	－	(6.4)	7.5YR 灰白 8/1	良	
51	58	三角トレンチ9 I1－69No.3	中国	白磁皿	(13.5)	－	－	N 灰白 8/	良	
52	15	三角トレンチ10 I1－80No.1	中国	白磁皿	－	－	(9.3)	N 灰白 8/	良	
53	49	三角トレンチ12 H2－92	在地	かわらけ	(11.3)	－	－	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
54	50	三角トレンチ12 H2－92	在地	かわらけ	(8.0)	－	－	5Y 灰 5/1	良	熔融物付着
55	48	三角トレンチ12 H2－93	在地	内耳鍋	－	－	－	7.5YR 橙 7/6	良	
56	52	三角トレンチ12 H2－94	中国	青花碗	(11.6)	－	－	7.5Y 灰白 8/1	良	
57	62	三角トレンチ14 I1－5	在地	かわらけ	(9.6)	－	－	7.5YR 鈍い橙 7/4	良	
58	53	三角トレンチ14 I1－4	在地	かわらけ	(11.6)	－	－	2.5Y 黄灰 5/1	良	熔融物付着
59	69	三角トレンチ14 I1－5	瀬戸美濃	鉄釉小杯	－	－	(5.8)	2.5Y 浅黄 7/3	良	
60	124	三角トレンチ15 I1－0No.3	瀬戸美濃	灰釉皿	－	－	(6.0)	2.5Y 灰黄 7/2	良	

出土遺物観察表

単位：cm　（　）は反転実測による復元値

掲載番号	実測番号	出土位置・遺構	産地	器種	法量 口径	器高	底径	色調	焼成	備考
61	12	三角トレンチ15 Ｉ1－2	在地	五輪塔	直径 21.5	高さ 14.0	12.5	－	－	
62	47	三角トレンチ17 H2－71No.7	在地	かわらけ	－	－	(6.0)	5Y 灰 5/1	良	熔融物付着
63	45	三角トレンチ17 H2－72No.2	不明	砥石	長さ (4.0)	幅 2.7	厚さ1.3	－	－	
64	46	三角トレンチ17 H2－71No.12	在地	須恵器甕	－	－	－	2.5Y 灰白 7/1	良	
65	88	高塀トレンチ1 G2－15No.1 2号溝跡	在地	かわらけ	(11.6)	－	－	7.5YR 鈍い橙 7/6	良	
66	89	高塀トレンチ1 G2－24No.3 3号溝跡	在地	かわらけ	(14.7)	－	－	5YR 鈍い橙 6/4	良	
67	97	高塀トレンチ1 G2－24No.1 5号溝跡	瀬戸美濃	天目茶碗	(11.0)	－	－	2.5Y 灰黄 6/2	良	
68	7	高塀トレンチ1 G2－24No.9 7号溝跡	在地	かわらけ	(8.0)	2.0	(4.7)	2.5Y 黄灰 5/1	良	熔融物付着
69	98	高塀トレンチ2 G2－34No.1 8号溝跡	中国	青磁碗	－	－	－	5Y 灰白 8/1	良	
70	96	高塀トレンチ2 G2－44No.1 12号溝跡	産地不明	陶器皿	－	－	(6.0)	5YR 鈍い赤褐 5/4	良	
71	95	高塀トレンチ1 G2－15No.12 17号溝跡	在地	かわらけ	－	－	(6.6)	5Y 灰 5/1	良	熔融物付着
72	16	高塀トレンチ1 G2－15No.7 17号溝跡	瀬戸美濃	天目茶碗	(11.5)	－	－	2.5Y 灰白 8/2	良	
73	99	高塀トレンチ1 G2－15No.9 17号溝跡	常滑	常滑甕	－	－	－	5Y 灰 4/1	良	
74	92	高塀トレンチ1 G2－15No.17	在地	かわらけ	(10.5)	－	－	2.5Y 灰黄 6/2	良	熔融物付着
75	93	高塀トレンチ1 G2－16No.2	在地	かわらけ	(7.5)	1.7	(4.9)	2.5Y 灰黄 7/2	良	熔融物付着
76	94	高塀トレンチ2 G2－23No.5	在地	かわらけ	－	－	(5.0)	2.5Y 灰黄 5/1	良	熔融物付着
77	91	高塀トレンチ5 G2－13No.1	在地	かわらけ	－	－	(7.3)	5YR 明赤褐 5/6	良	
78	90	高塀トレンチ2 G2－34	在地	かわらけ	(8.5)	－	－	7.5YR 鈍い褐 5/3	良	内面煤付着
79	71	高塀トレンチ2 G2－45	在地	かわらけ	－	－	(8.4)	5YR 橙 6/6	良	
80	100	高塀トレンチ2	在地	かわらけ	(7.6)	－	－	2.5Y 黄灰 6/1	良	熔融物付着
81	101	高塀トレンチ2	在地	かわらけ	(9.6)	－	－	2.5Y 灰黄 6/2	良	熔融物付着
82	102	高塀トレンチ2	瀬戸美濃	徳利	－	－	(13.0)	7.5YR 橙 7/6	良	
83	9	高塀トレンチ2	中国	青花碗	－	－	(7.0)	2.5GY 灰白 8/1	良	
84	10	高塀トレンチ2	在地	須恵器	－	－	－	2.5GY オリーブ灰 6/1	良	
85	79	高塀トレンチ5 G2－13No.10 1号溝跡	在地	かわらけ	(10.4)	－	－	10YR 鈍い黄橙 7/4	良	
86	81	高塀トレンチ5 G2－13No.21 1号溝跡	在地	かわらけ	(8.0)	－	－	2.5Y 黄灰 5/1	良	熔融物付着
87	11	高塀トレンチ5 G2－3No.3 1号土坑	常滑	常滑甕	－	－	－	2.5Y 黒褐 3/1	良	
88	77	高塀トレンチ5 G2－13No.4 2号土坑	在地	かわらけ	(12.0)	2.2	(8.0)	5YR 鈍い橙 6/4	良	
89	82	高塀トレンチ5 G2－13No.6 2号土坑	在地	かわらけ	(11.5)	－	－	2.5Y 黄灰 5/1	良	熔融物付着
90	83	高塀トレンチ5 G2－13No.15 Pit1	在地	かわらけ	－	－	(8.0)	7.5YR 鈍い褐 6/3	良	
91	2	高塀トレンチ5 G2－13No.27 Pit1	在地	かわらけ	8.8	2.1	4.5	5YR 橙 6/6	良	
92	17	高塀トレンチ5 G2－13No.28 Pit1	瀬戸美濃	灰釉皿	(11.6)	(1.9)	－	5Y 灰白 8/2	良	
93	80	高塀トレンチ5 G2－3No.6 Pit10	在地	かわらけ	(10.8)	－	－	2.5Y 黄灰 6/1	良	熔融物付着
94	86	高塀トレンチ5 G2－2No.5	在地	かわらけ	－	－	(6.7)	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
95	74	高塀トレンチ5 G2－13	在地	かわらけ	－	－	(6.0)	10YR 鈍い黄橙 6/4	良	
96	78	高塀トレンチ5 G2－13	在地	かわらけ	(14.0)	－	－	7.5YR 橙 6/6	良	口縁部煤
97	87	高塀トレンチ5 G2－13	在地	かわらけ	－	－	－	2.5Y 黄灰 5/1	良	熔融物付着
98	8	高塀トレンチ5 G2－2No.1	在地	かわらけ	(10.6)	2.3	(5.9)	2.5Y 黄灰 6/1	良	熔融物付着
99	18	高塀トレンチ5 G2－23・25	在地	かわらけ	(11.1)	2.4	(5.5)	2.5Y 灰黄 6/2	良	熔融物付着
100	85	高塀トレンチ5 G2－3No.1	瀬戸美濃	擂鉢	－	－	－	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
101	84	高塀トレンチ5 G2－13No.3	瀬戸美濃	大皿	(23.6)	－	－	2.5Y 浅黄 7/3	良	
102	75	高塀トレンチ5 焼土層	在地	かわらけ	－	－	(15.0)	2.5Y 灰黄 6/2	良	熔融物付着
103	76	高塀トレンチ5 焼土層	在地	かわらけ	(11.6)	－	－	7.5YR 鈍い橙 6/4	良	
104	103	三角トレンチ14 Ｉ1－5	－	鉄製品	－	－	－	－	－	
105	106	三角トレンチ4 H1－48	－	釘	－	－	－	－	－	
106	104	三角トレンチ12 H2－92	－	釘	－	－	－	－	－	
107	105	三角トレンチ12 H2－93	－	釘	－	－	－	－	－	
108	107	三角トレンチ8 Ｉ1－39	－	釘	－	－	－	－	－	
109	108	高塀トレンチ5 Pit4	－	釘	－	－	－	－	－	
110	116	三角トレンチ2 H1－18No.3	－	銅製品	－	－	－	－	－	
111	115	三角トレンチ17 H2－71No.9	－	銅製品	－	－	－	－	－	
112	111	三角トレンチ12 H2－93	－	銅製品	－	－	－	－	－	
113	120	高塀G2－13No.5 2号土坑	－	古銭	径2.32	厚0.12	重2.3	－	－	天禧通寶？
114	119	三角トレンチ12 H2－91	－	古銭	－	厚0.11	重0.7	－	－	不明
115	118	三角トレンチ7 Ｉ1－19	－	古銭	径2.46	厚0.1	重1.3	－	－	開元通寶
116	117	三角トレンチ9 Ｉ1－59No.11	－	古銭	径2.23	厚0.10	重1.5	－	－	紹聖元寶
117	122	高塀トレンチ5 Pit9	－	古銭	径2.40	厚0.12	重1.3	－	－	永楽通寶

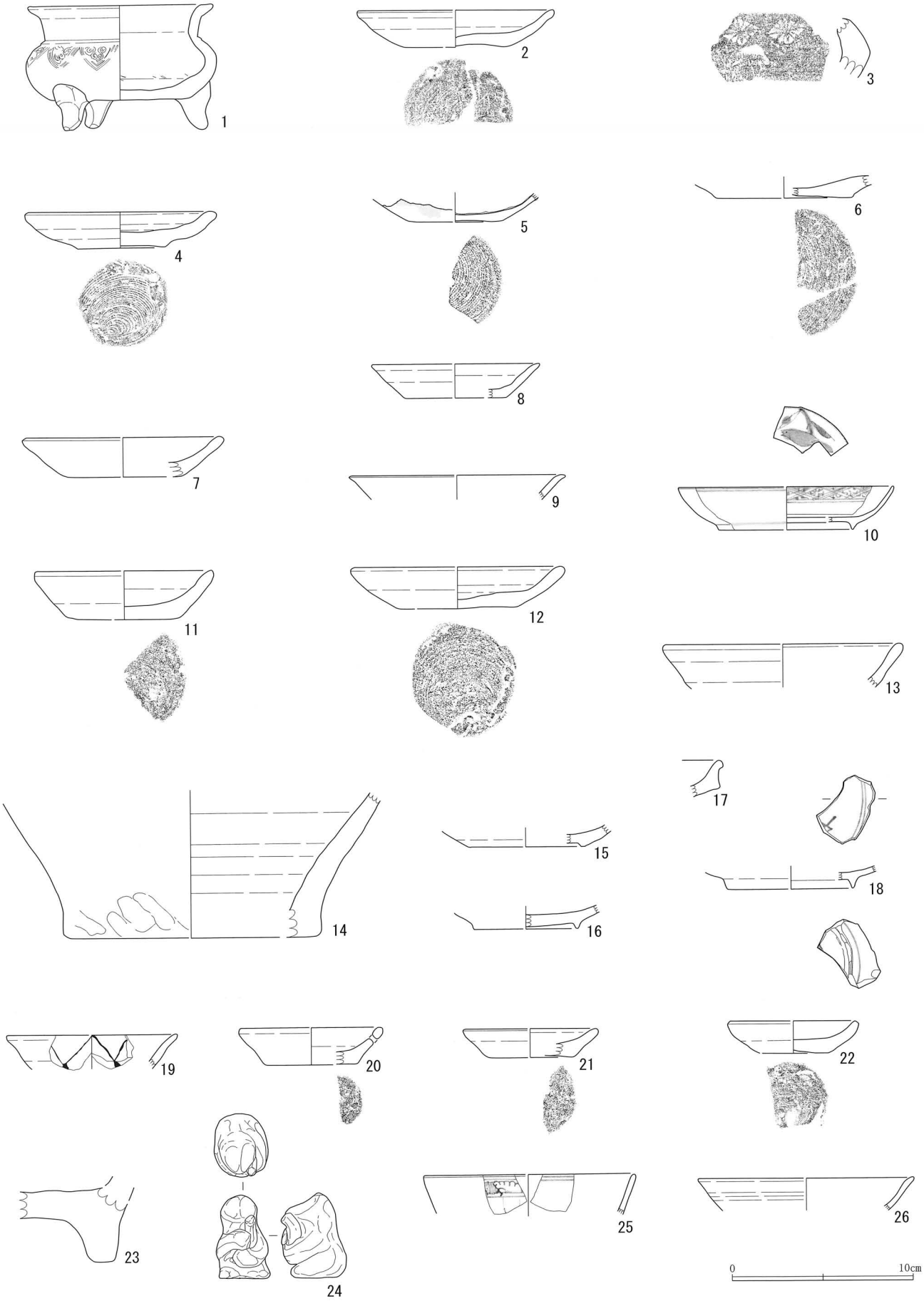


図17　字三角出土遺物（1）

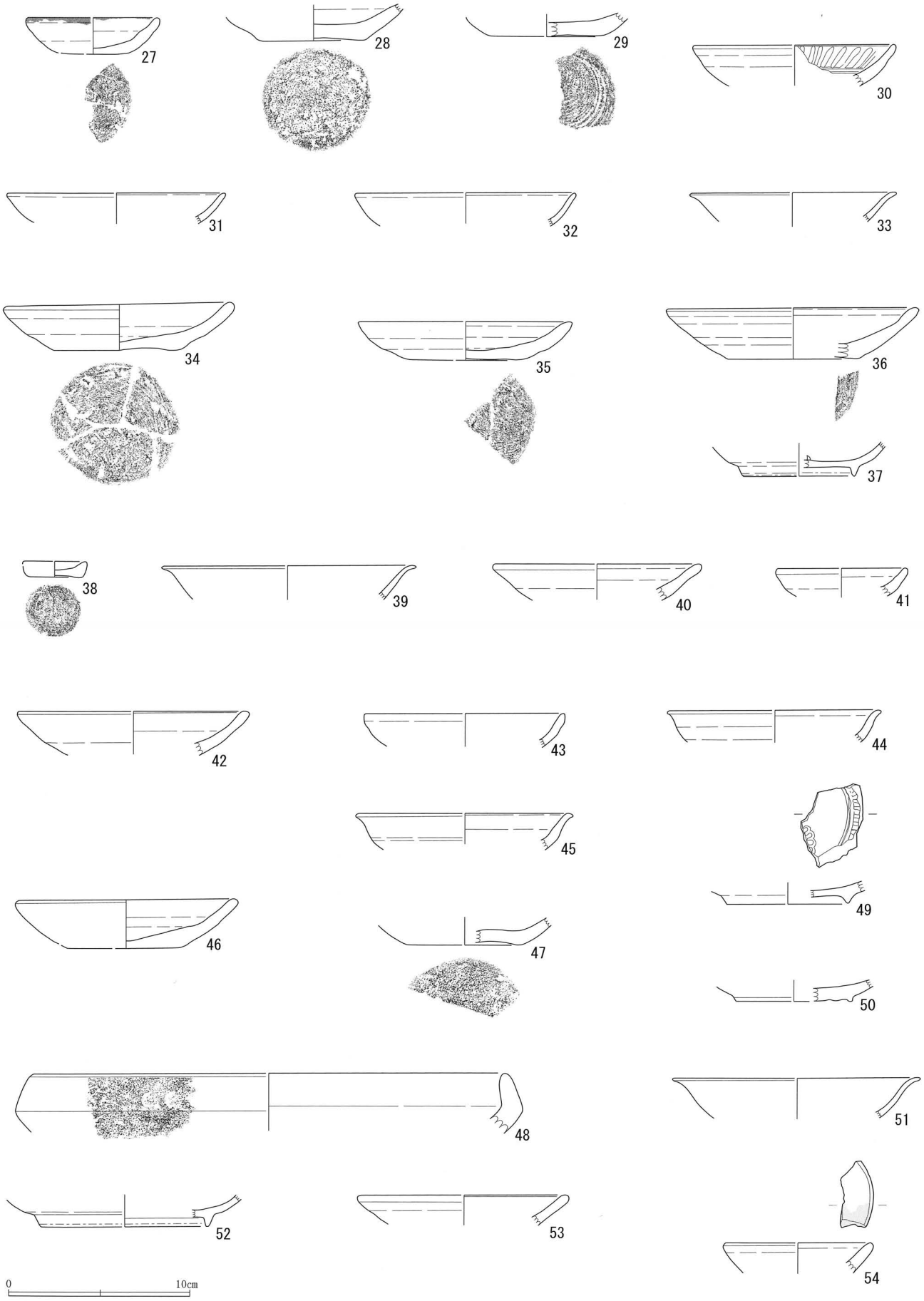


図18　字三角出土遺物（2）

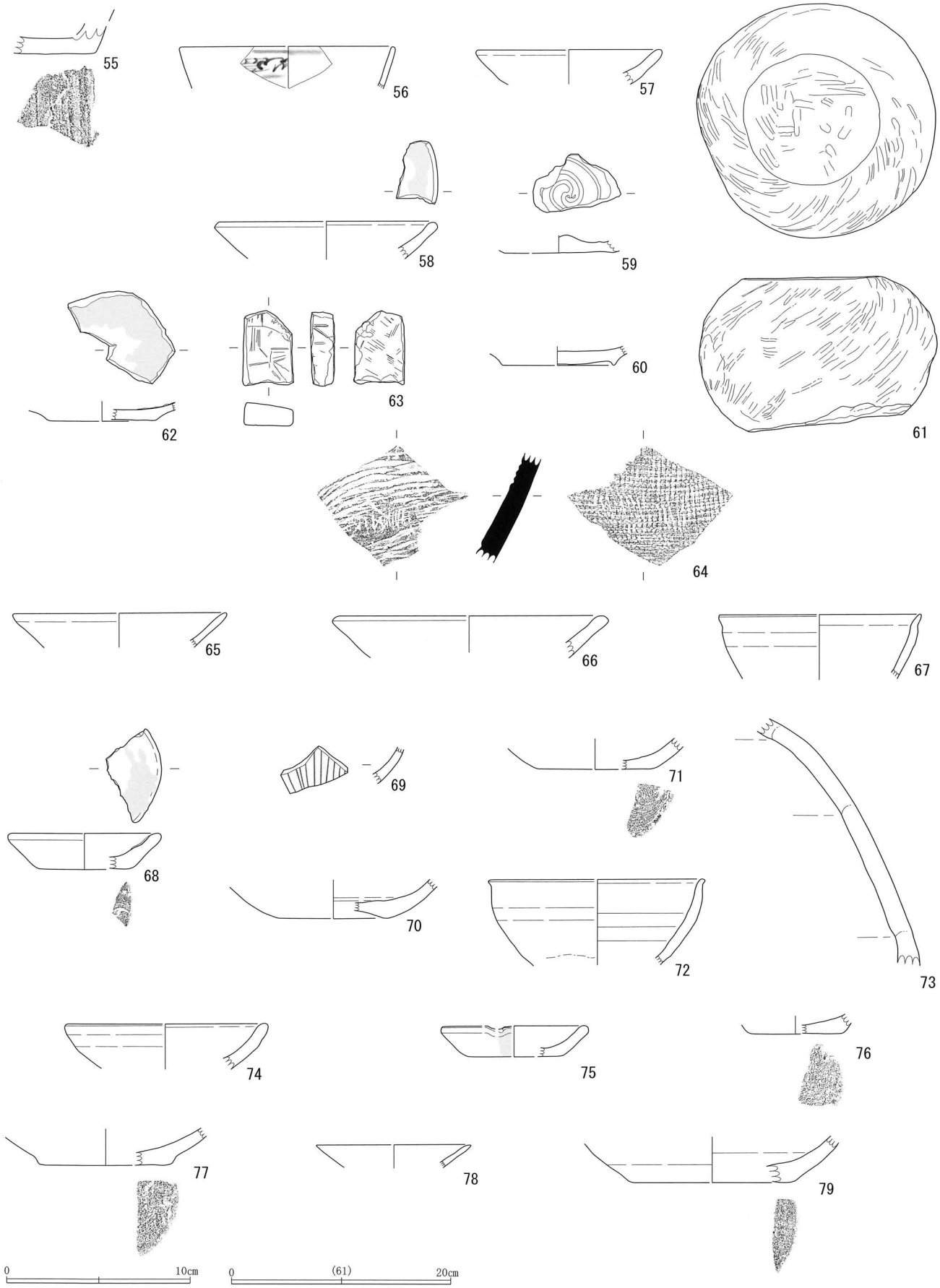


図19　字三角出土遺物（3）・字高塀出土遺物（1）

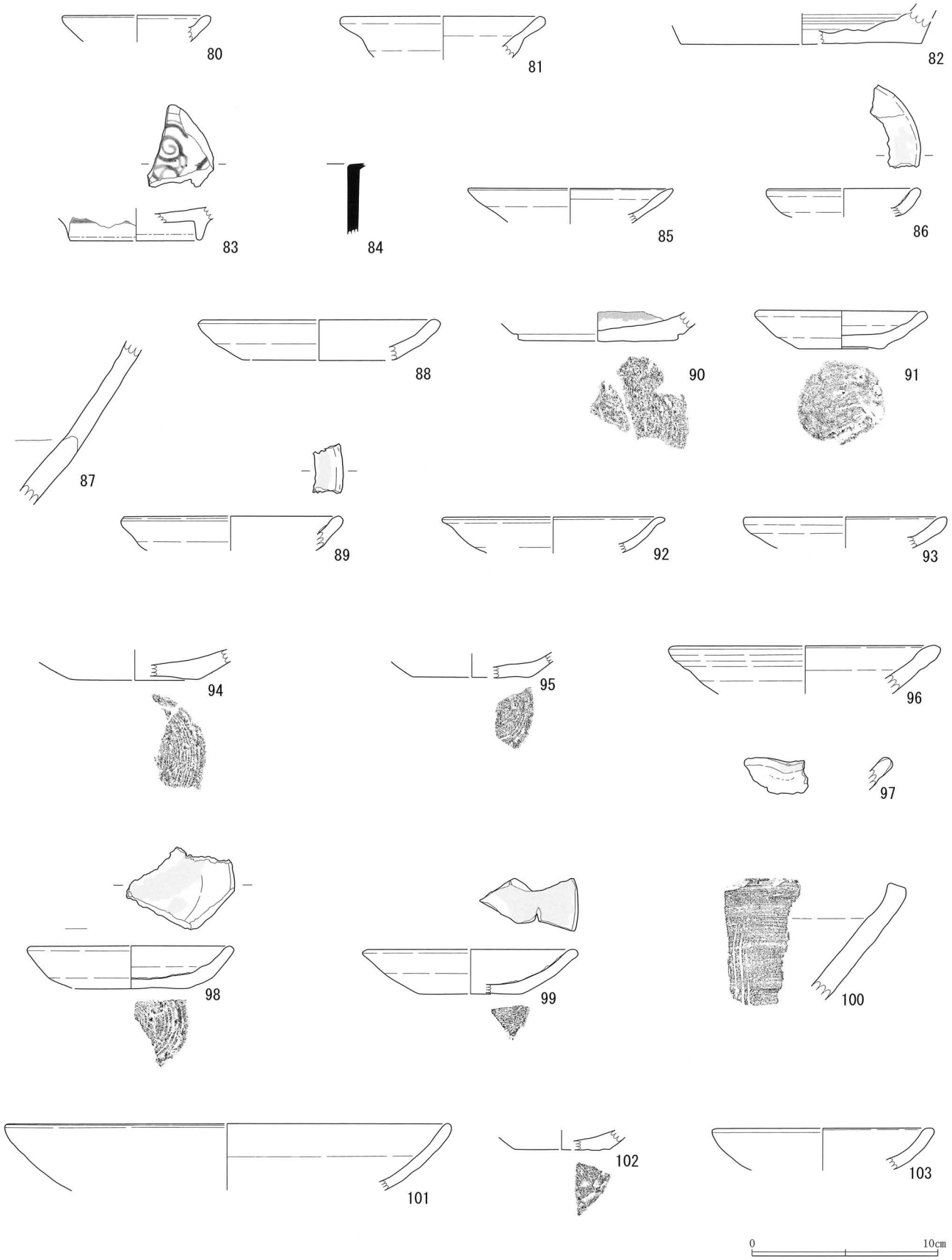


図20　字高塀出土遺物（2）

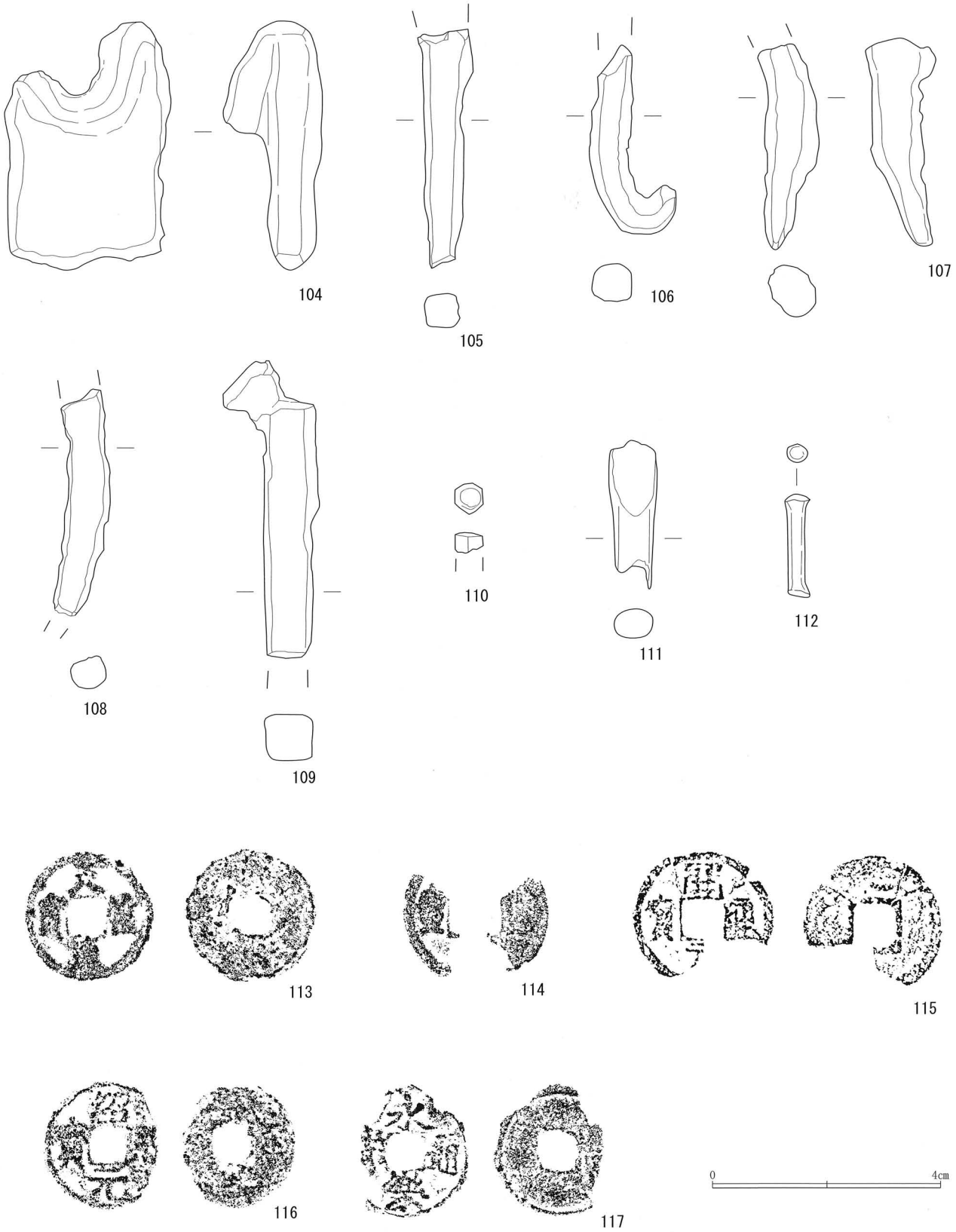


図21　字三角・字高塀出土金属製品

第４章　自然科学分析

第１節　史跡武田氏館跡大手周辺から出土した炭化種実

佐々木由香・バンダーリスダルシャン（パレオ・ラボ）

１．はじめに

史跡武田氏館跡は、永正16年(1519)に武田信虎によって築かれた館であり、62年間武田氏の本拠として整備された。ここでは城下町にあたる字三角で武田氏の時期である16世紀前半と想定されている埋土出土の炭化種実を検討し、当時の利用植物の推定を試みた。

２．試料と方法

試料は、字三角のI1-5グリッドのサブトレンチ内から回収された土壌（埋土）試料である。土壌は焼土ブロックと炭化物を多く含む、礫（最大径６㎝程度）混じりの砂質シルト層であった。調査の所見から、火災後に堆積した埋土と考えられている。

土壌は、0.25㎜目の篩を用いて浮遊物を回収した後、0.425㎜目の篩を用いて水洗洗浄し、回収した残渣から実体顕微鏡下で炭化種実の抽出・同定・計数を行った。また残渣中に炭化材が多く含まれていたため、樹種同定可能な大きさの材のみ抽出し、保管した。同定された種実および抽出した材は甲府市教育委員会で保管している。

３．結果

全試料で同定された分類群は、草本植物のイヌタデ属炭化果実、アカネ属炭化種子、ヒエ炭化果実・種子、イネ炭化果実・種子、アワ炭化種子の５分類群であった。イネには一辺が３㎝以下の炭化果実・種子塊が複数みられた。この他に同定できなかった不明Ａ炭化種子と不明Ｂ炭化種子があった。土壌試料から産出した種実の分類群・部位・産出数は表１に示した。イネの破片の個数は任意に抽出した100個（0.7ｇ）から重量換算した復元個体数である。出土個数は、イヌタデ属が完形１個、アカネ属が完形１個、ヒエが完形14個（果実・種子含む）、イネが完形2627個と破片からの復元個体数が2740個（果実・種子含む）、アワが完形３個、不明Ａが完形９個、不明Ｂが完形１個であった。ヒエおよびイネの一部には果実が部分的に付着していた。

表１　土壌試料の炭化種実同定結果（※は重量換算値）

分類群	部位	産出数
イヌタデ属	炭化果実	1
アカネ属	炭化種子	1
ヒエ	炭化種実	14
イネ	炭化種実	2627(2740※)
アワ	炭化種子	3
不明A	炭化種子	9
不明B	炭化種子	1

※完形イネ100点の重量と、完形以外イネ炭化種実破片の重量を計量して求めた復元個体数

以下に、記載と図版に写真を示し、同定の根拠とする。

(1) イヌタデ属　*Persicaria*　炭化果実　タデ科

炭化果実が出土した。上面観は円形で先端が顕著に尖り、側面観は両凸レンズ状で楕円形に近い。臍は楕円形でやや突出する。表面にはごく微細な網目文様がある。長さ1.6㎜、幅1.3㎜。

(2) アカネ属　*Rubia*　炭化種子　アカネ科

炭化種子が出土した。上面観は円形、側面観は楕円形。片側側面に大きな円形の深い孔がある。表面には微細な網目模様がある。長さ1.4㎜、幅1.2㎜。

(3) ヒエ　*Echinochloa crus-galli* P.Beauv. var. *fumentacea* Trin. 炭化果実・種子 イネ科

炭化果実・種子が出土した。種子の側面観は卵形ないし楕円形、断面は片凸レンズ形であるが、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広く、長さは胚乳の長さの2/3程度と長い。臍は幅が広いうちわ型。両端部を中心として果実（穎）が少し付着することから、イネと同様、本来は果実（穎果）であったと推定される。果実は紡錘形。果実の長さは、2.2～2.8（平均2.5）㎜、幅は1.5～2.0（平均1.8）㎜。種子の長さは、1.8～2.2（平均2.0）㎜、幅は1.5～2.0（平均1.7）㎜。

(4) イネ　*Oryza sativa* L.　炭化果実・種子　イネ科

炭化果実・種子が出土した。一部は果実・種子塊となっていた。種子の上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に中央がやや盛り上がる縦方向の２本の浅い溝がある。種子の長さ4.0～6.0（平均4.8）㎜、幅2.5～3.7（平均3.1）㎜。果実（穎）が一部に付着したものが目立ち、種子も胚が残存した玄米が目立つことから、元は果実(籾)であったと推定される。果実の表面には規則的に配列する独特の顆粒状突起がある。なお、破片については、重量から換算した復元個体数を求めた。

(5) アワ　*Setaria italica* Beauv.　炭化種子　イネ科

炭化種子が出土した。小さいが厚みがあり、上面観は楕円形、側面観は円形に近く、先端が窪むことが多い。胚の長さは胚乳の長さの2/3程度。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の小さな臍がある。長さ1.3㎜、幅1.0㎜程度。

(6) 不明A　Unknown A　炭化種子

炭化種子が出土した。上面観は卵形、側面観は球形～扁平で、下端のほぼ中央から内部にむかって湾生の胚珠がある。また胚珠に沿って割れているものがある。形状や大きさからアカザ科やヒユ科などの草本植物の種子と思われるが、遺存状況が悪いため、不明とした。

(7) 不明B　Unknown B　炭化種子

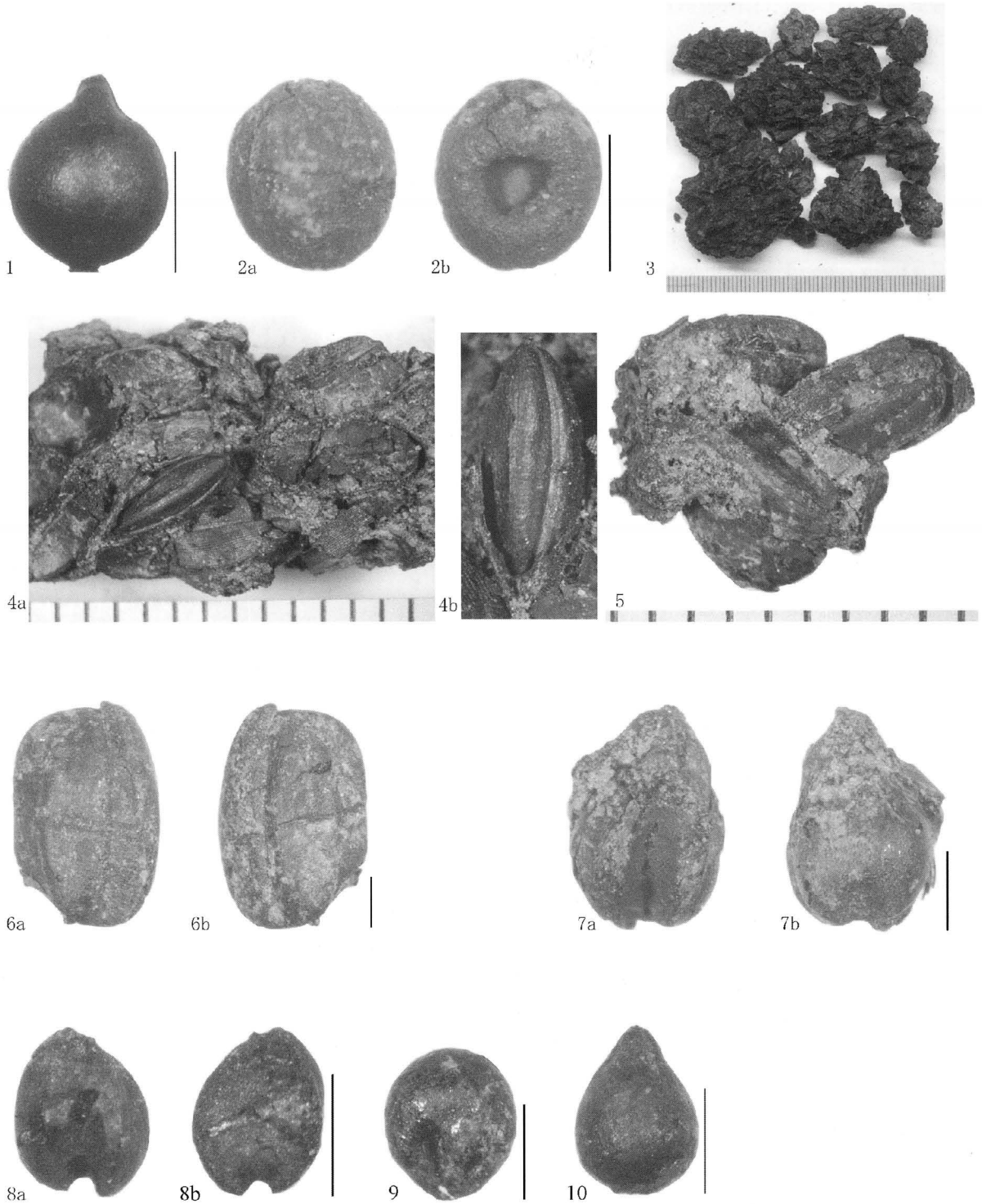
炭化種子が出土した。上面観は両凸レンズ形、側面観は先端が尖る卵形で、上部のみ先端にむかって２本の浅い稜線がある。下端には臍がある。

４．考察

得られた種実のうち、栽培植物はヒエ、イネ、アワであった。ほとんどイネが占め、復元個体数を含めると5400点弱が確認されたのに対し、ヒエは14点、アワは３点であった。これまでの調査でもＧ３-77グリッドの土坑から600個余りの炭化種実が出土し、イネが98～99％と圧倒的多数を占め、ヒエ、ダイズの仲間、マメ科が僅かに出土した。今回も同一傾向のほぼイネ単一種から構成される組成であった。ヒエとイネは本来殻付きの状態であったと考えられることから、貯蔵状態にあったものが火災により、炭化したことが示唆される。イヌタデ属やアカネ属などの草本種子は周辺に生育していたものが炭化したと考えられる。

５．おわりに

火災後の埋土から炭化種実が出土し、多量のイネの中に僅かにヒエ、アワが混じるという特異な組成であった。イネとヒエは殻つき（果実）の状態で炭化したことが考えられた。



スケール1-2，6-10：1㎜，3-5は一目盛が1㎜（4bは任意）

図版１　史跡武田氏館跡から出土した炭化種実

1．イヌタデ属炭化果実、2．アカネ属炭化種子、3．イネ炭化種実塊（塊のみ全体）、4．イネ炭化種実塊（4bは拡大）、5．イネ炭化種実塊、6．イネ炭化種子、7．ヒエ炭化種子（一部果実付着）、8．アワ炭化種子、9．不明A炭化種子、10．不明B炭化種子

第２節　史跡武田氏館跡大手周辺出土土器に付着する金属の成分分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

１．はじめに

史跡武田氏館跡大手周辺からは、金属粒および金属滓と見られるものが付着した土器が出土した。これら付着物について蛍光Ｘ線分析を行い、その金属の材質を検討した。

２．試料と方法

分析対象資料は、史跡武田氏館跡大手周辺より出土した戦国時代の土器４点（№.１は98、№.２は99、№.３・№.４は大手調査区の惣堀南土橋出土遺物）に付着する金属粒および金属滓である（図版１）。

分析装置はエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡ＸＧＴ-5000TypeⅡを使用した。装置の仕様は、Ｘ線管が最大50kV、1.00mAのロジウム(Rh)ターゲット、Ｘ線ビーム径が100μｍまたは10μｍ、検出器は高純度Si検出器(Xerophy)で、試料室の大きさは350×400×40㎜である。検出可能元素はナトリウム(Na)～ウラン(U)であるが、ナトリウム、マグネシウム(Mg)といった軽元素は蛍光Ｘ線分析装置の性質上、検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。また、試料ステージを走査させながら測定することにより元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析も可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い元素の分布図を得て、その結果を基に特徴的な箇所のポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析では50kV、1.00mA、ビーム径100μｍ、測定時間2000sを５回走査、パルス処理時間P3に、ポイント分析では50kV、0.10～1.00mA（自動設定）、ビーム径100μｍ、測定時間1500s、パルス処理時間P4に設定し、いずれも非破壊で行った。定量分析は標準試料を用いないファンダメンタル・パラメーター法（以下FP法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値は参考程度にとどめておく必要がある。

３．結果

元素マッピング図を図１～４に示す。いずれも金属成分としては銅(Cu)、鉛(Pb)がそれぞれ広く分布し、両者より範囲は狭いもののスズ(Sn)の分布も確認された。分析№.３ではヒ素(As)と金(Au)も極一部に分布している様子が確認された。

元素マッピングの結果を基に行ったポイント分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を表1および図５～９に示す。アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、リン(P)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ニッケル(Ni)、銅、亜鉛(Zn)、ヒ素、銀(Ag)、スズ、アンチモン(Sb)、金、鉛、ビスマス(Bi)が検出された。

４．考察

いずれもスズの割合はやや低いものの、銅、スズ、鉛が主に検出されており、土器中の金属はCu-Sn-Pbの銅合金、すなわち青銅の一種であったと推定される。また、銅の含有量が少ない分析№.１からは検出されなかったものの、それ以外は銀や金などが不純物として銅中に含まれているとみられ、銅中の不純物を分離する工程を経ていないことから国産の銅地金を使用していたと考えられる。いわゆる南蛮吹きと呼ばれる銅中の銀、金などの不純物の分離抽出技術が、蘇我理右衛門によって我が国に導入されたのは、慶長年間（1596～1615）頃と言われており、当遺跡より僅かに時代が下る。

表１　半定量分析結果

分析No.	分析ポイント	Al	Si	P	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Ni	Cu	Zn	As	Ag	Sn	Sb	Au	Pb	Bi
1	1	5.22	17.57	0.13	1.16	2.07	0.88	0.21	5.76	0.44	20.43	—	0.91	—	1.88	1.14	—	42.20	—
	2	9.86	16.95	1.85	0.76	1.23	0.87	0.11	5.40	0.44	29.60	—	0.15	—	1.73	0.64	—	30.40	—
	3	3.89	12.05	0.32	1.15	4.64	0.89	0.20	7.55	0.20	9.00	—	0.49	—	39.09	0.56	—	19.97	—
	4	7.67	14.55	1.22	0.66	1.84	0.72	0.16	5.89	0.55	8.79	—	1.43	—	5.42	1.22	—	49.89	—
	5	6.36	18.94	0.25	1.48	3.00	1.01	0.27	9.71	0.08	3.36	0.08	0.95	—	2.06	0.56	—	51.88	—
2	1	0.50	0.56	0.20	0.07	0.16	—	—	0.22	—	94.89	—	—	0.94	—	0.46	0.47	1.32	0.21
	2	1.96	3.25	—	0.08	0.10	—	—	0.53	—	91.30	—	—	0.59	0.19	0.68	0.78	0.38	0.15
	3	1.03	22.06	—	—	0.76	0.04	—	2.03	0.13	71.52	—	—	0.37	—	0.35	0.49	1.05	0.17
	4	3.01	6.09	—	—	1.28	0.36	—	9.34	0.34	9.20	—	—	—	51.05	1.01	—	18.31	—
	5	4.09	14.42	—	1.50	3.18	0.58	0.15	14.71	0.34	4.70	0.07	—	—	24.48	0.48	—	31.29	—
3	1	6.41	28.37	—	0.13	0.87	0.10	—	1.22	—	56.96	—	—	0.78	—	0.18	4.14	0.27	0.61
	2	3.26	25.60	0.22	0.33	1.45	0.18	0.05	3.27	0.05	63.22	—	—	0.36	—	0.28	0.18	1.34	0.20
	3	9.98	44.79	—	5.49	3.32	0.39	0.10	4.38	—	24.88	—	1.06	—	3.80	0.31	—	1.48	—
	4	7.35	23.49	0.24	1.42	3.24	1.14	0.30	13.30	0.32	29.30	—	0.86	—	1.08	0.42	—	17.57	—
	5	6.18	20.12	0.17	0.76	1.64	0.95	0.15	12.41	0.57	45.55	—	6.55	0.21	0.38	1.98	—	2.37	—
4	1	4.81	27.70	—	0.07	1.27	0.08	—	1.15	—	64.02	—	—	0.29	—	0.15	0.16	0.20	0.11
	2	3.11	21.62	—	—	1.38	0.05	—	0.79	—	71.32	—	—	0.13	0.73	0.25	—	0.62	—
	3	5.85	16.20	0.44	1.09	2.75	1.03	0.18	13.36	0.20	10.53	—	—	—	41.97	0.29	—	6.12	—
	4	4.91	23.66	1.08	2.12	4.50	0.96	0.33	15.03	0.36	10.27	—	0.78	—	2.39	2.02	—	31.59	—
	5	5.04	18.66	0.46	1.02	3.10	0.48	0.07	8.06	0.10	59.61	—	1.18	—	1.63	0.25	—	0.34	—

値は質量%　—:検出できず

分析№.３のポイント１からは金が比較的高い割合で検出された。銅合金のひとつに金を３～５%含み、煮色法により黒色を呈する赤銅と呼ばれる合金が存在する。しかし、今回の場合は、スズや鉛も検出されていること、銅の分布に対して金は極めて局所的であり、また他の試料からも少量の金が検出されていることも併せて、赤銅として金を人為的に添加したものというよりも、銅中の不純物と考えるのが妥当ではないだろうか。この場合、不純物の由来として、銅鉱石由来の他に、例えば金銅製品などを鋳潰して利用したことに由来する可能性も考えられよう。

５．おわりに

史跡武田氏館跡大手周辺より出土した土器４点の付着物を分析した結果、いずれも銅、鉛、スズが主に検出された。

参考文献

大阪市文化財協会編（1998）住友銅吹所跡発掘調査報告.
村上隆（2003）金工技術，日本の美術第443号，至文堂.

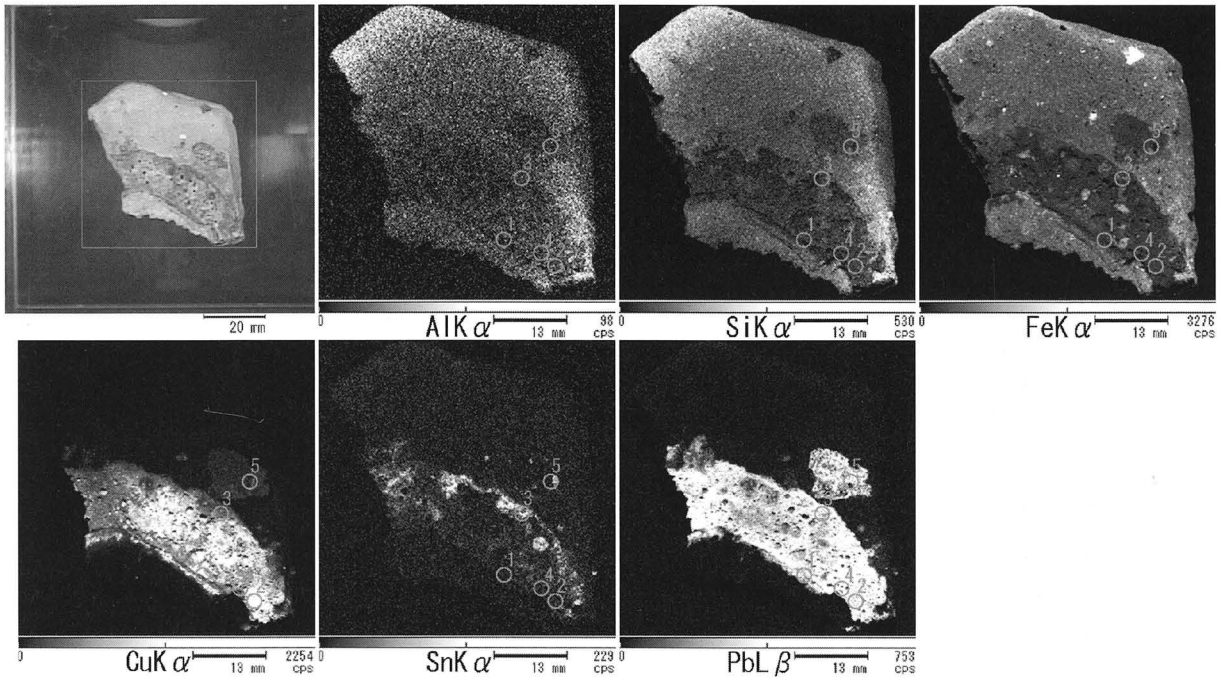


図１　分析No.１元素マッピング図

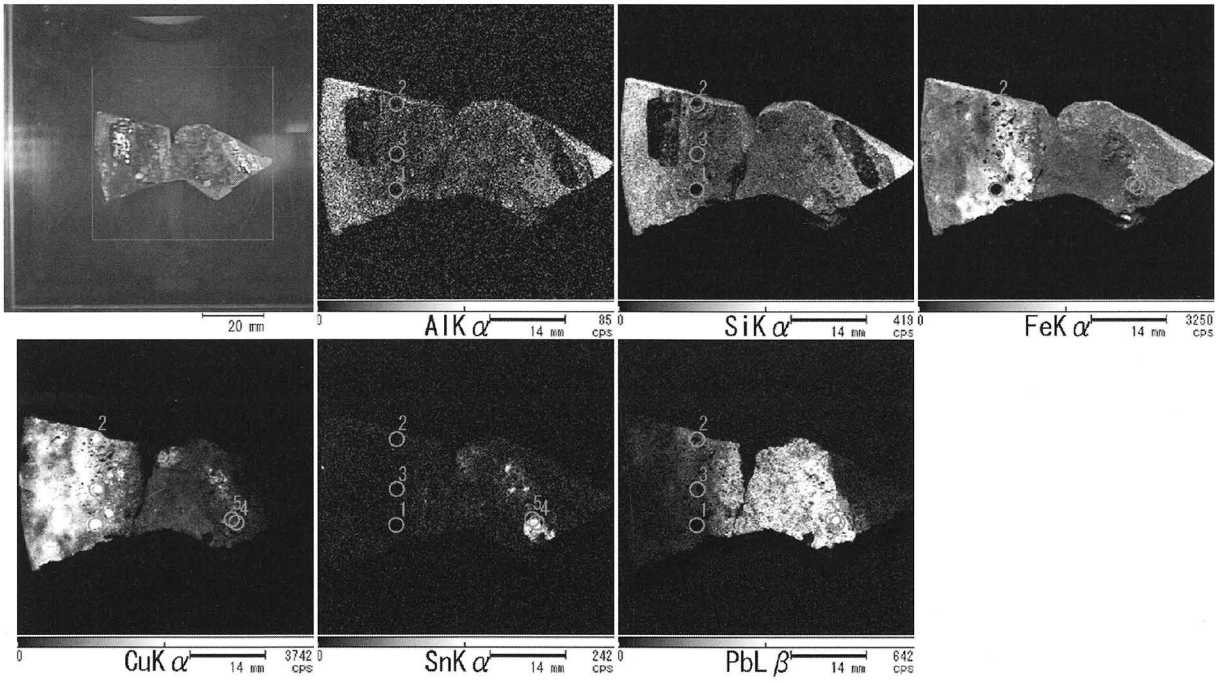


図２　分析No.２元素マッピング図

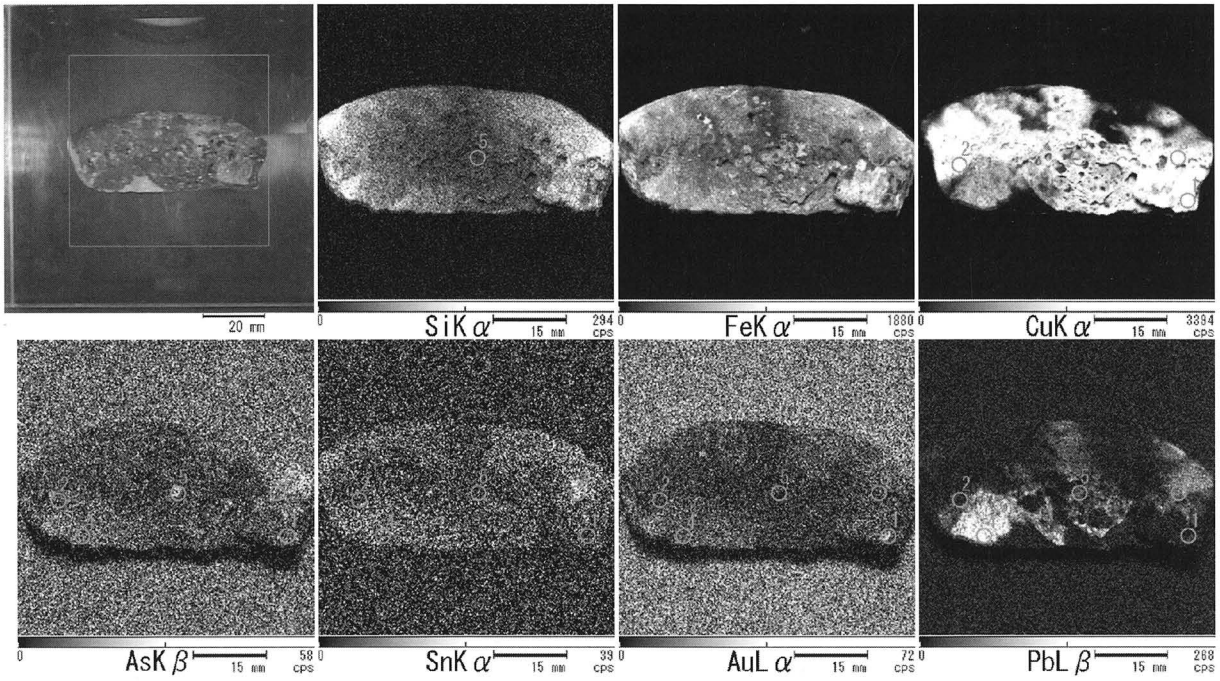


図３　分析No.３元素マッピング図

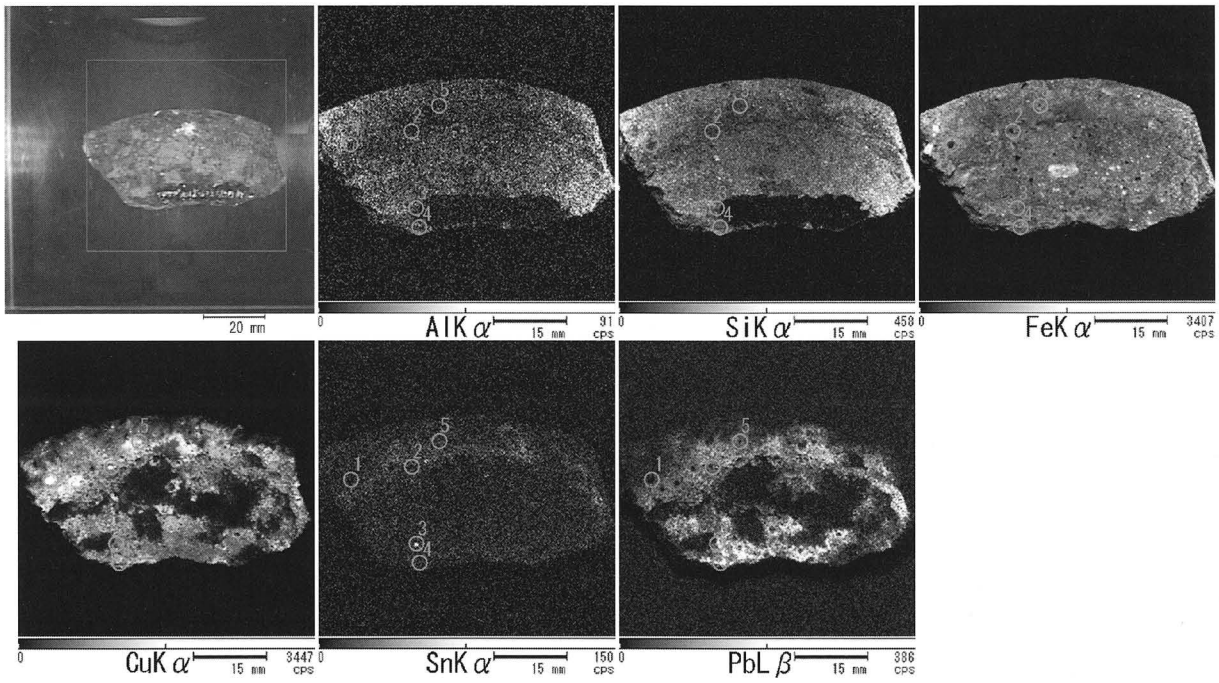


図４　分析No.４元素マッピング図

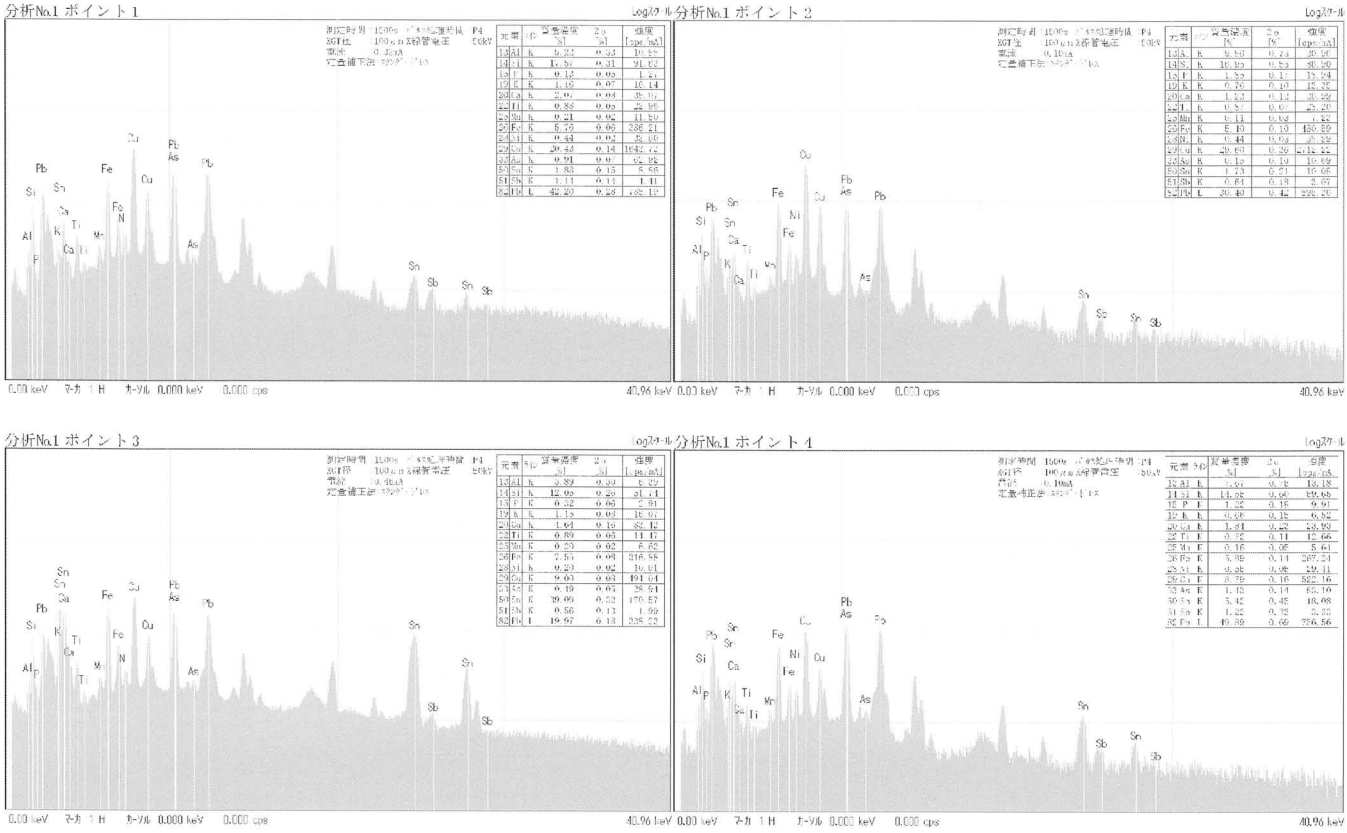


図5　ポイント分析スペクトル図（1）

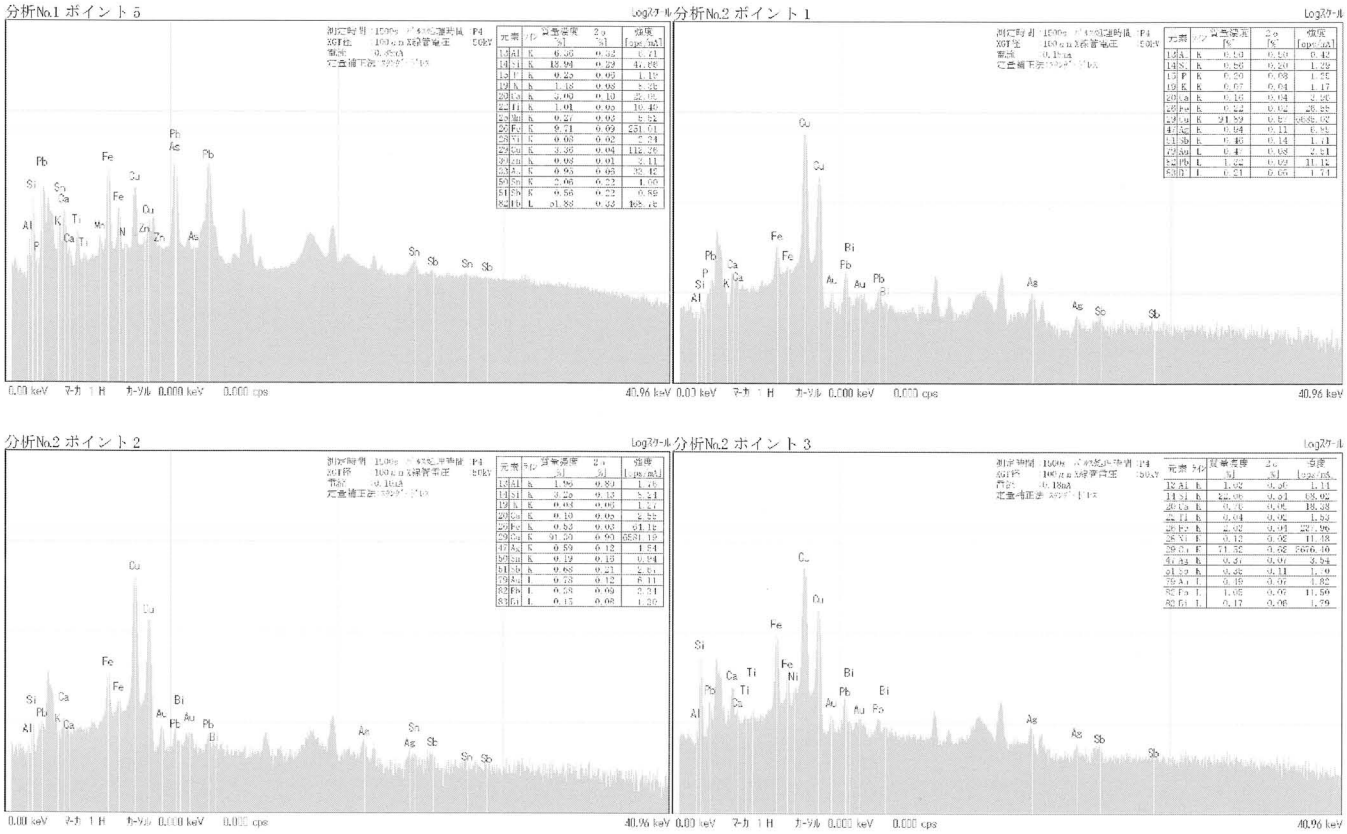


図6　ポイント分析スペクトル図（2）

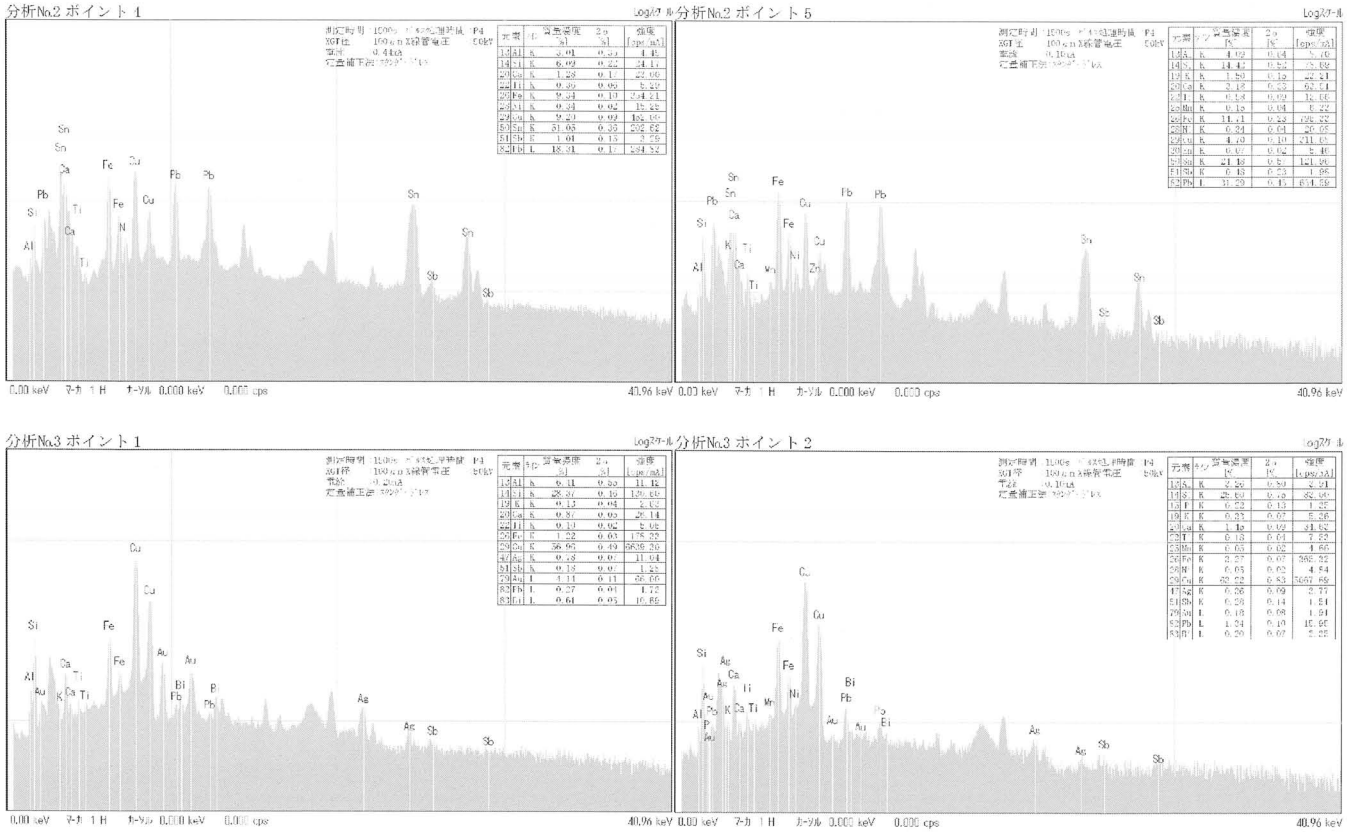


図７　ポイント分析スペクトル図（3）

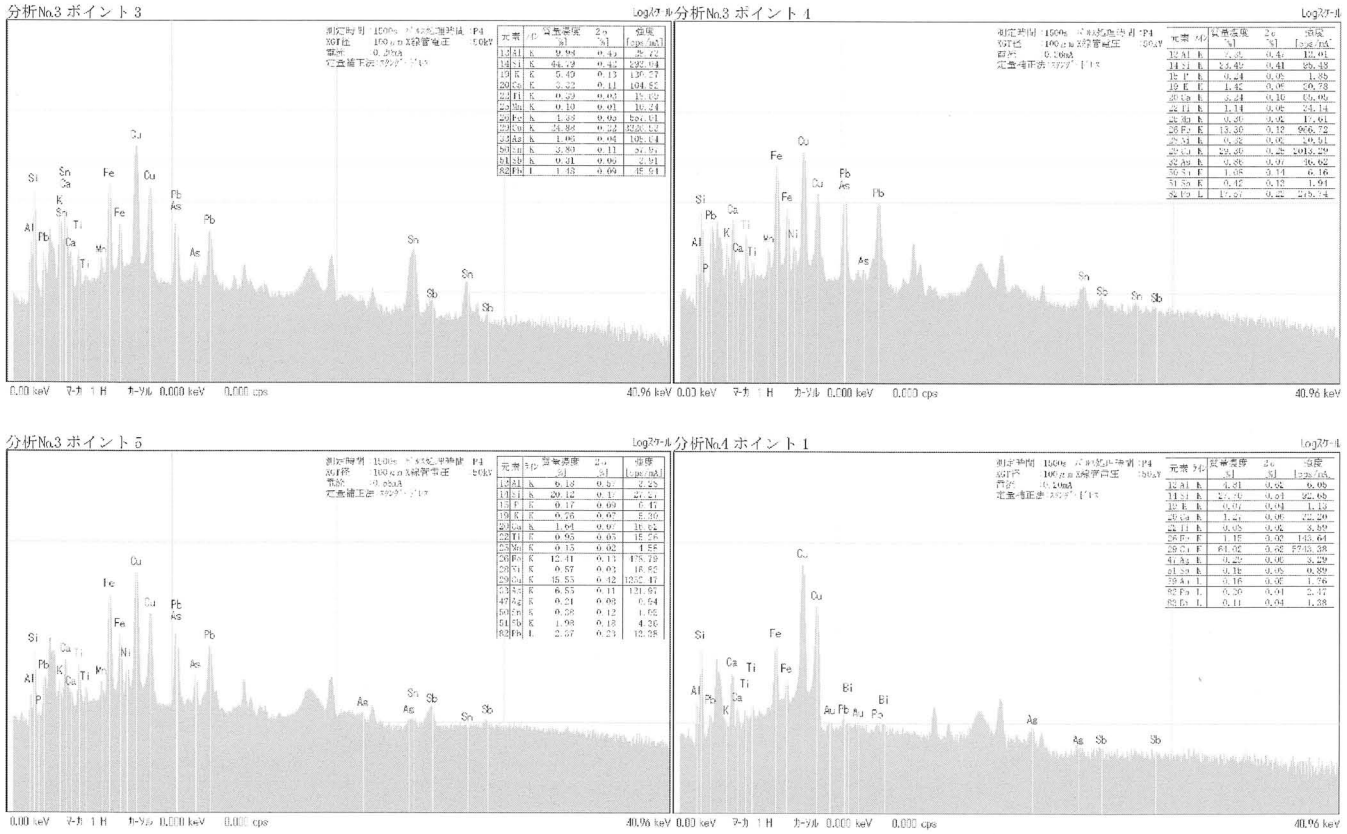


図８　ポイント分析スペクトル図（4）

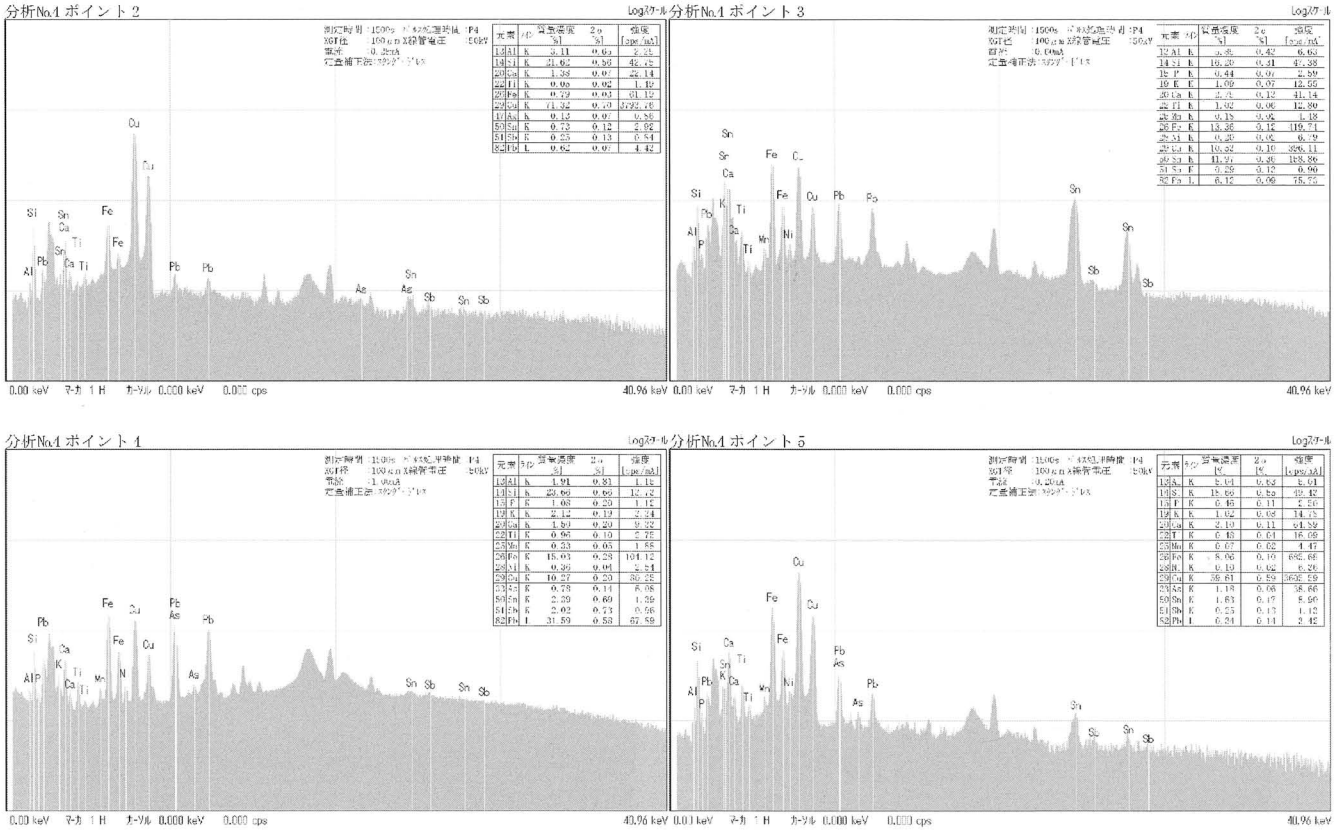
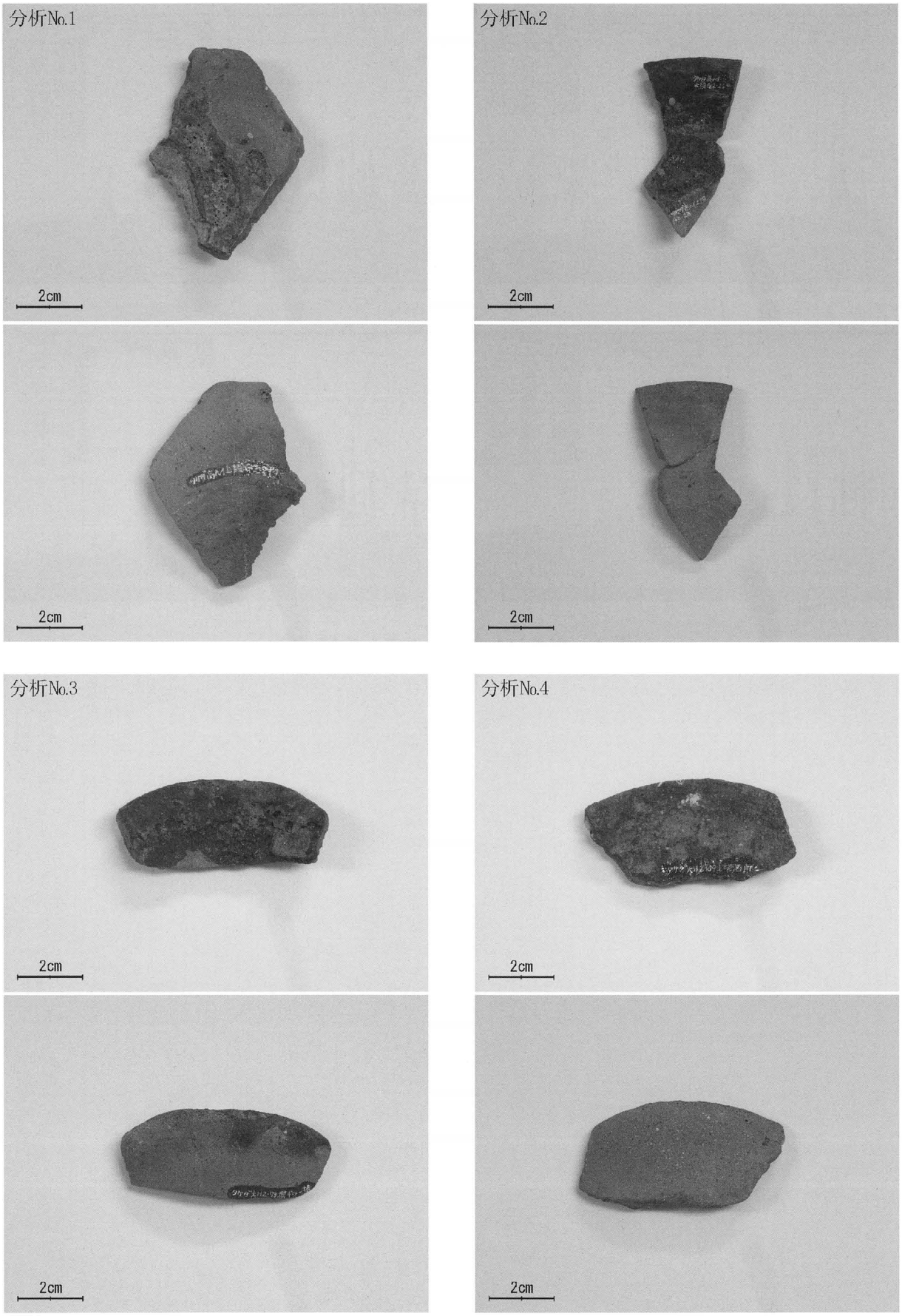


図９　ポイント分析スペクトル図（5）



図版１　分析対象資料

第５章　考　察

第１節　字三角の様相

躑躅ヶ崎の尾根筋に沿って南流する藤川と市道鍛冶小路に挟まれた三角形の地形を呈する字三角地区の主たる調査目的は、遺構の有無も含めて状況が不明であった大手東端部一帯の土地利用の形態や構造、性格の把握であった。そのため、調査トレンチは、幅２ｍで字三角全体を縦横断で確認できるよう設定した。

南北トレンチでは、東西トレンチとの交差点にあたるトレンチ７までは、比較的保存状態も良く、現状の小規模な区画内から戦国期の遺構・遺物が検出された。トレンチ７以南では地山の露出も目立ち、水田造成時に削平を受けた可能性が高いことが明らかになり、断面観察によって調査区北側では確認されなかった大規模な盛土による造成の痕跡も確認された。このことから、遺構密度が薄いトレンチ７以南であっても戦国期の段階で斜面北側の高所を切土し、南側へ盛土することで平坦面を確保した様相が見受けられたことは、土地利用の在り方を知る上で重要な発見であった。造成の状況から判断するかぎり、字三角南側一帯の旧地形は、北側に比べて傾斜が強かったものと考えられ、平坦な屋敷地の形成には大規模な造成が不可欠であったようだ。

この結果から戦国期には字三角全域に開発が及んでいたことが確認されるとともに、区画については、トレンチ間の残存状況や、遺構の連続性を考慮すると、字三角全体の縦横断調査によって戦国期に既存の地割りの原形がある程度形成されていた可能性が高いことが明らかになった。

しかしながら、個々のトレンチの様相を比較すると、水田層直下でも包含層が残存する遺構密度の高い場所と、水田層直下で地山が検出される遺構密度の低い場所に分かれる状況が浮き彫りになった。その傾向はトレンチ７とトレンチ８で顕著にみられ、トレンチ７では溝跡や土坑、ピットなどの遺構が確認されているが、一段低い区画に位置するトレンチ８では礫が露出する地山面のみが検出されており、区画の段差を挟んだ両者の様相は大きく分かれた。

それに類似した状況として、同じ水田跡の区画内で異なる様相が検出されたトレンチ５のような事例もある。トレンチ５では、トレンチ中央の２号溝跡を境に北側では水田層直下で礫層が露出する地山面上で遺構が検出され、もう一方の南側では包含層が残存し、遺構・遺物が良好な状態で出土する状況が確認されている。北側では土坑が４基連続して検出されたものの、南側に存在したような包含層はなく、明らかに南北の様相は異なっていた。

以上のようなトレンチ間やトレンチ内における遺構・遺物の検出状況の偏在は、戦国期の屋敷地割りがある程度踏襲されつつも、水田開発による造成段階で手が加えられたものである可能性が高いことを端的に示すものと考えられる。特にトレンチ５のような事例では、水田造成時に地形の高低差が比較的少ない小規模な区画同士は統合され、より大きな区画として造成された結果と理解できるのではないだろうか。

また、字三角の地割りを考える上で、個々の区画をつなぐ道路の存在は土地利用を考える上で見逃すことができない。今回の調査によって、トレンチ４やトレンチ９・16・17の一部で確認された小礫の集石は、字三角内の屋敷地をつなぐ道路跡の一部である可能性が高いと考えられ、トレンチ16・17などは、現代まで水田の畦道として継続した利用がなされたとみられる。

検出された遺構や地籍図上の区画も参考に字三角内の道路網を推定すると、調査区西側の鍛冶小路に併行するような軸線となるトレンチ16・17で検出された南北方向の道路跡を基軸とするとみられる。そのほかにも、トレンチ15東端部で検出された石列なども南北方向の道路境界の可能性があり、藤川際にも河川に沿った細い道路が存在したと考えると、南北方向には大きく２条の道路が復元さ

れる。

東西方向についても、トレンチ４を設定した細長い区画やトレンチ９南端部で検出されたような道路が接続していたと考えられ、全体的に各敷地を結ぶ道路網が整備されていたのではないかと考えられる。したがって、字三角一帯の道路網は、図１に示したような形で既存の鍛冶小路や字三角南側の東西道路のほかにも、様々な規模の道路が接続したのではないかと推測された。

試掘調査のもう一つの目的である字三角の性格に関しては、調査区全体から熔融物付着土器の出土が特徴として挙げられる。図化できなかったものも含めて、熔融物付着土器は、主にトレンチ２・３、トレンチ12・14付近に集中的に出土している。金属製品の様相をみても、同じような状況であることから、鍛冶関連遺物にまとまりがある区画に関しては、鍛冶職人が居住していた可能性がある。

同様にトレンチ５では確証はないものの、埋甕の抜き取りと思われる連続する４基の土坑が検出されている。貯蔵に関わる施設も何らかの職種に関わる遺構である可能性も考えられ、字三角の性格は、小規模な区画群が連続する利用形態と出土遺物から推察するかぎり、職人などが居住した城下町域であると考えられる。

第２節　字高塀の様相

字高塀は、武田氏館跡東側一帯に残された字名であるが、惣堀と総称している堀に伴う土塁を指した名称と考えられ、今回の調査した場所は、字三角から市道鍛冶小路を挟んだ北西側に近接している。古い地籍図などでは長方形の区画が連続した地割りが確認される一帯であり、扇状地の地形に合わせて雛壇状に造成されていた姿が窺える。

調査段階では、トレンチ１～３とトレンチ４・５の間はコンクリート擁壁によって約0.8mの段差が形成されていたが、発掘調査の結果、両区画の遺構面の高低差は、実際には約0.3m程度の段差であり、基本的に低い段差で区切られた区画であったことが確認された。反対に現状では同じ敷地内に設定されていたトレンチ４・５間では、遺構面に約0.6～0.7mの段差が生じていることから、戦国期には別の区画であったことが判明し、地形の段差による小規模な区画が連続していた状況を確認することができた。この結果から、地籍図に残る形態が比較的戦国期の区画を反映しているとみられ、字高塀一帯は、字三角同様に小規模な区画群が連続する屋敷地が展開していたと考えられる。

そうした区画のあり方を考える上で、出土遺物の様相が参考となるが、この地点で特徴的な遺物としては、字三角で散見された熔融物付着土器の存在である。特にトレンチ５内では多数の熔融物付着土器が出土するとともに、焼土に覆われた１号土坑の存在も考慮すると、この場所で鍛冶が営まれていた可能性もある。熔融物付着土器は、トレンチ２からも出土していることから、連続した屋敷地であるのか、独立した２区画の屋敷地であるかは現時点で判断はできないものの、少なくともこの地点の居住者としては、鍛冶職人の可能性が高いと考えられる。

字高塀地区の調査では、敷地の構造や形態、その性格を把握することのほかに惣堀北側の立ち上がりを把握し、その位置と規模を確認することも目的の一つであった。特に大手東側の惣堀のうち、北虎口部に開削されていた地元で「用堀」と呼ばれている溜池は、貞享３年（1686）の『古府中城下絵図』には「四方堀」と記載されていることから、武田氏館廃絶から比較的早い時期に周辺地域の農業用水の確保を目的に開削されたと考えられ、戦国期の堀の範囲や形状が復元できるかが焦点であった。

発掘調査ではトレンチ２・３の南端部では惣堀の北側の立ち上がりが既存の護岸石積みの内側で検出され、土層観察からも戦国期に開削されたことが改めて確認された。堀跡のラインについても護岸石積みによって整備された時点で規模を小さくしたことが明らかにされたものの、概ね戦国期のラインを踏襲していることが判明した。特にトレンチ３で堀の北端が検出されたことによって、溜池とし

ての用堀が堀の西・南側を中心に土塁部分まで大きく切り崩して開削されたものであったことが明らかにされた。

また、用堀の上流部に開削されていた別の溜池については、トレンチ１西端部の調査状況では惣堀の立ち上がりは確認されず、遺構確認面は急激に断ち切られたような状況が確認された。貞享の絵図にも確認されないことを考慮すると、比較的新しい時期に開削された溜池と考えられ、惣堀自体はトレンチ２・３の検出ラインを延長する位置で区画を形成していた可能性が高いと断定した。溜池の開削によって堀跡の線形が消滅したことが改めて確認されたことにより、今後の整備事業の中でどのような形で惣堀の復元を行うかが大きな課題となった。

参考文献

飯沼賢司　1985「戦国期の都市“甲府”」『甲府市史研究』第２号　甲府市市史編纂委員会
数野雅彦　1990「中世城下町甲府の立地と都市プラン」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第３号　帝京大学山梨文化財研究所
甲府市教育委員会　2000『史跡武田氏館跡Ⅵ』
甲府市教育委員会　2002『史跡武田氏館跡Ⅸ』
甲府市教育委員会　2003『史跡武田氏館跡Ⅹ』
甲府市教育委員会　2009『史跡武田氏館跡ⅩⅣ』
甲府市教育委員会　2009『武田城下町遺跡Ⅲ』

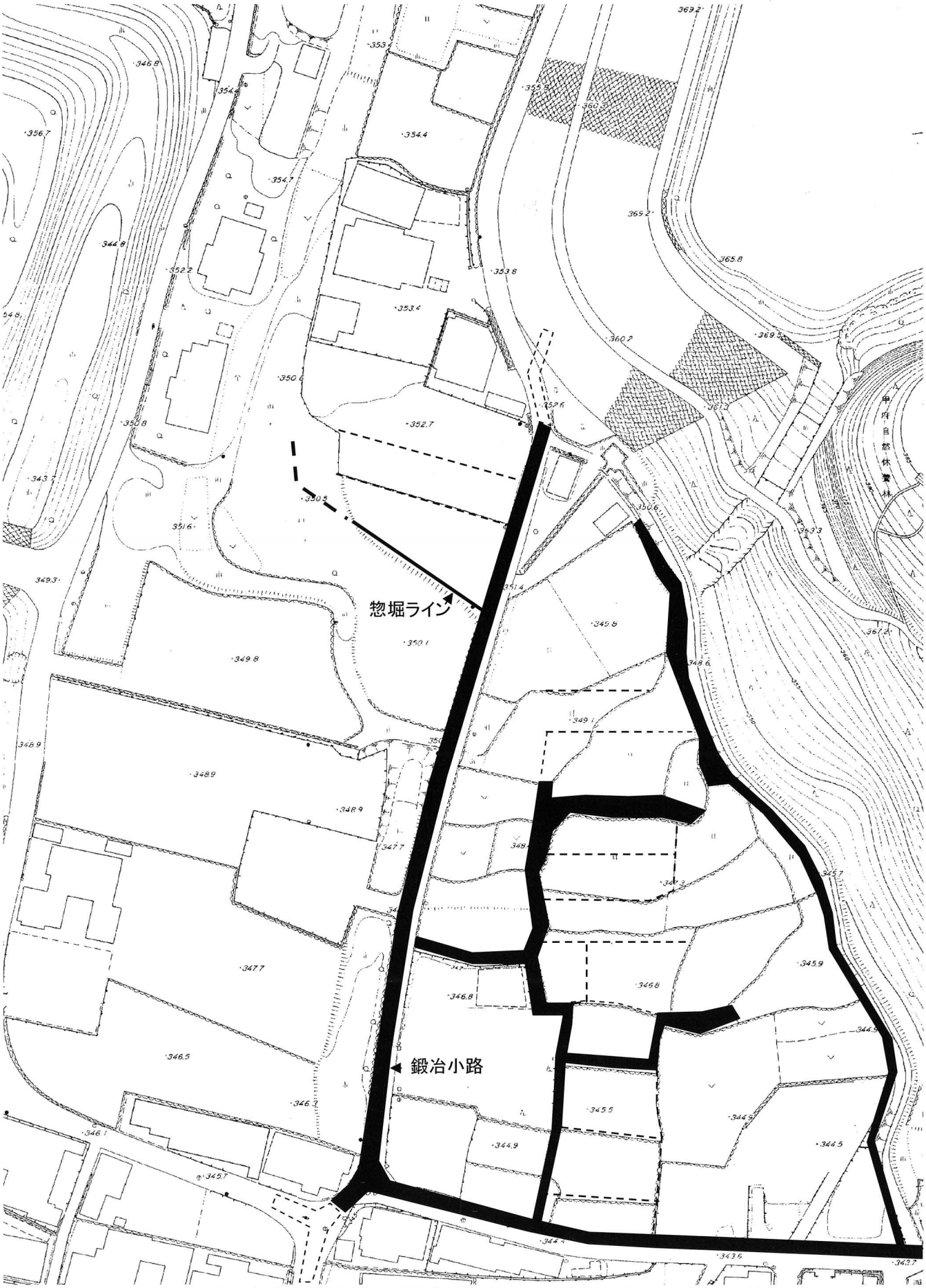


図１　字三角字高塀地割及び道路網想定図（破線：地割・黒塗：道路）

第6章　結　語

史跡武田氏館跡第１期整備事業（大手門周辺ゾーン）の中でも大手東側の外郭線と考えられる惣堀のさらに外側に位置する字三角・字高塀地区の試掘調査について報告してきた。両地区の土地利用形態については、大部分が近年まで水田として耕作されていたが、発掘調査によって、水田造成層直下に戦国時代の遺構・遺物が埋蔵されていることが確認された。その成果については第５章で検討したとおり、両地区ともに連続する小規模な屋敷区画群が戦国時代には形成されており、その区画を利用する形で水田造成などが行われてきたことが明らかにされた。このことは、調査目的の一つに挙げられた地下の保存状態や土地利用の変遷を知る上で大きな成果であった。

また、武田氏館跡における両地区の役割を考える上で、鍛冶関連の遺物である熔融物付着土器が多数出土したことは、この一帯の居住者像を考える上で極めて重要な手掛かりである。両調査地点の間には、戦国期からの古道とされる市道鍛冶小路線が現在も南北に貫いている。この道路は、武田氏館を中心に城下町内に設定されたと考えられる南北方向の５本の基軸となる街路のうち東から２番目の道路であり、戦国期にはちょうど大手東側周辺で鍛冶小路、あるいは古籠屋小路と呼ばれていたようである。字三角南側には字鍛冶小路が所在し、武田城下町遺跡の調査では、金山神社北側の区画から多数の熔融物付着土器が出土していることから、鍛冶職人の工房が想定されている。周辺部の様相も踏まえた上で字三角・字高塀の性格を考えると、鍛冶職人の居住区を含む職人街が展開していた可能性が極めて高く、地形に合わせた小規模な雛壇状の区画が並ぶ城下町域ではないかと考えられる。

字高塀については、一部は宅地化によって区画造成がなされていたが、発掘調査の結果、宅地造成以前の旧耕作土直下において戦国期の生活面とともに、惣堀の北側の立ち上がりが検出された。江戸期以降に灌漑用水として惣堀の利用と改修が図られ、２箇所の溜池が開削されているが、そのうち、古絵図等にも記載されていない溜池については、近現代になって字高塀の区画の一部を切り崩して開削したことが明らかになった。

以上の調査成果を踏まえ、史跡武田氏館跡字三角・字高塀の様相を総括すると、館の東側一帯には鍛冶職人らが居住する城下町が展開していたと結論づけられ、出土遺物からも年代的には武田期に最盛期を迎えていたことが明らかとなった。惣堀に関しても、溜池の開削や堀幅等の変更はあったものの、既存の堀ラインは概ね戦国期から踏襲されていることが確認され、復元整備をする上での貴重な情報を得ることができた。

平成16年度に策定された基本構想・基本計画の段階では、戦国期の字三角・字高塀地区の区画や詳細な様相が不明であったこともあり、基本的にはある程度現状の地形を残しつつ、全体的には緑地整備とする計画が示された。

しかし、調査の結果、織豊期に形成された惣堀・土塁によって区画された曲輪状の空間の様相とは異なり、16世紀中葉から後半にかけて成立した城下町域であったことが確認されたことを受けて、改めて整備方針も含めた整備基本計画の抜本的な見直しの必要に迫られることとなった。整備計画の見直しについては大きな課題であるが、城下町の整備方法に関しては、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡のような立体復元など先行事例もあり、今後、史跡武田氏館跡保存整備委員会等にも諮りながら、取り扱いを協議することとし、本書を結ぶこととする。

字三角・字高塀の発掘調査・出土遺物写真

武田氏館跡遠景

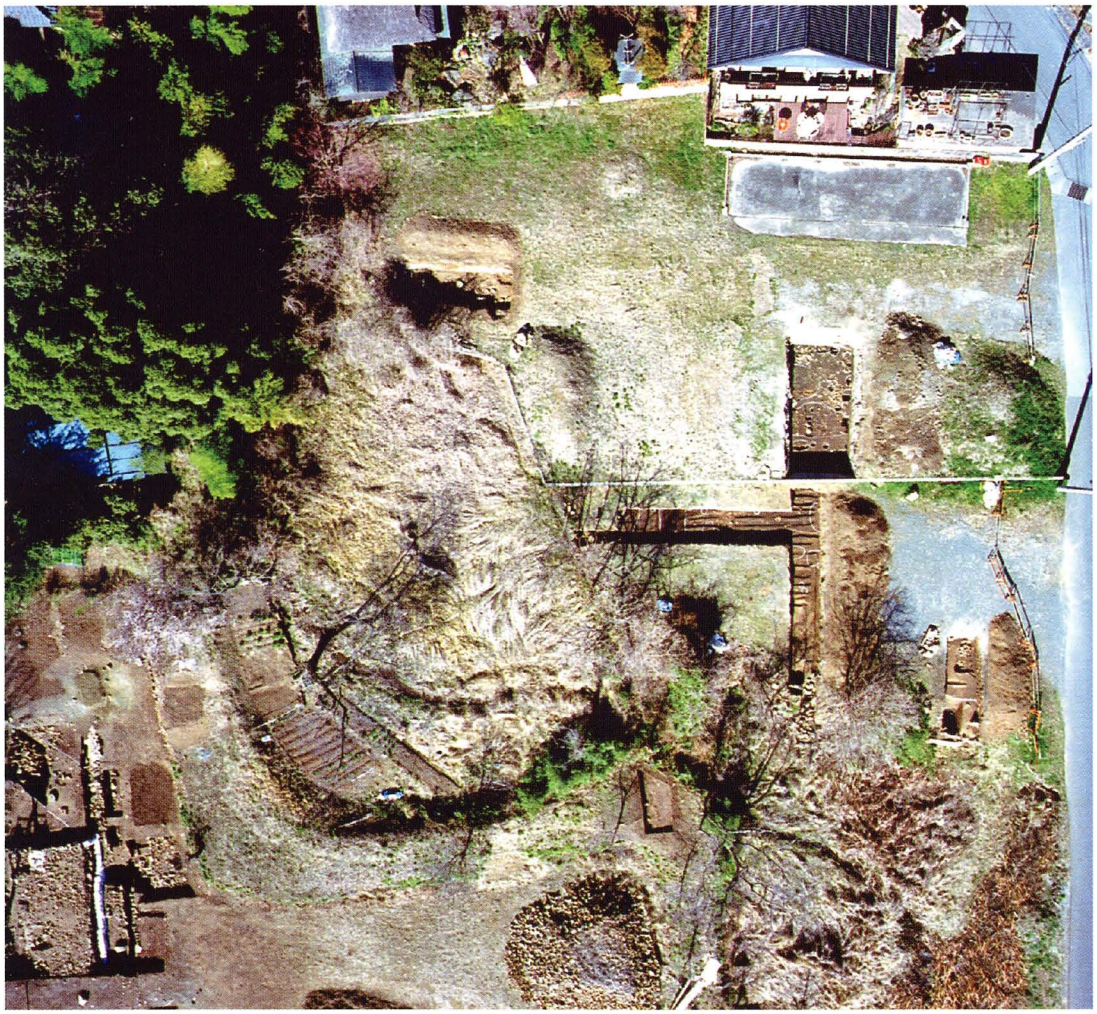
武田氏館跡近景

字三角俯瞰（西から）

字三角俯瞰（北から）

字三角全景（垂直）

字高塀俯瞰（南から）



字高塀調査区全景

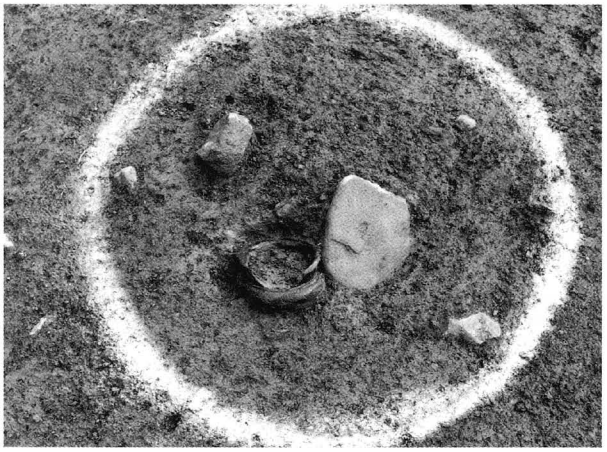
字三角調査前

調査開始直後

調査状況

遺構確認状況

トレンチ１全景



トレンチ１　Pit１内土器出土状況

トレンチ２・３全景

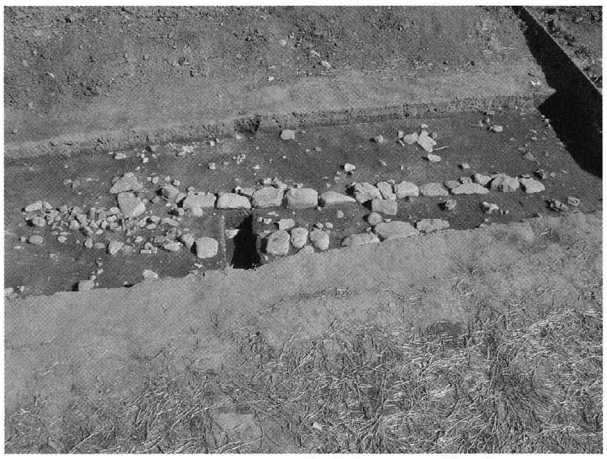
トレンチ４・５全景

トレンチ４・５全景

トレンチ５全景

トレンチ５北側土坑群

トレンチ５１号土坑断面



トレンチ５南側１号溝跡

トレンチ５遺物出土状況

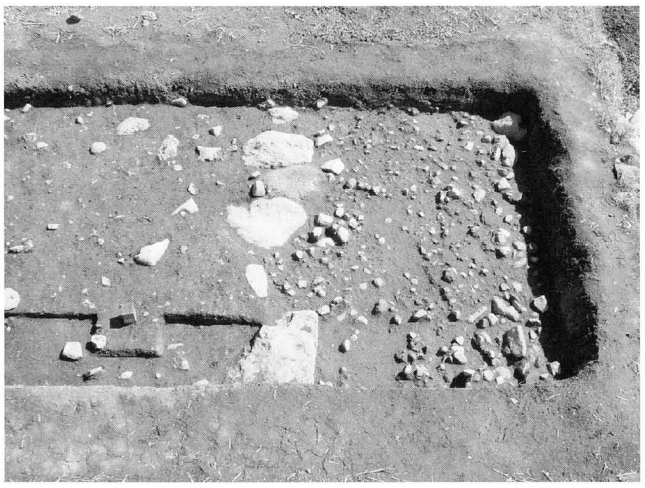
トレンチ６・７全景

トレンチ７全景

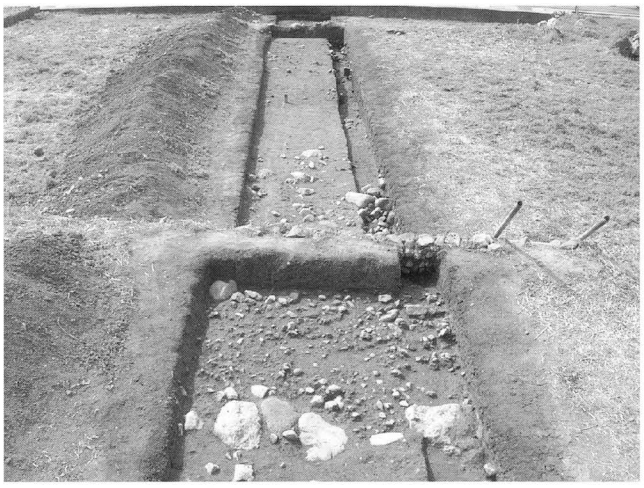
トレンチ8・9全景

トレンチ8全景

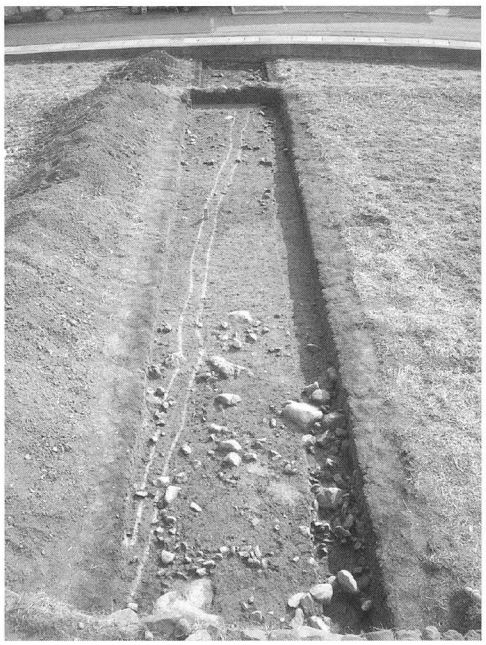
トレンチ9全景



トレンチ9南側集石

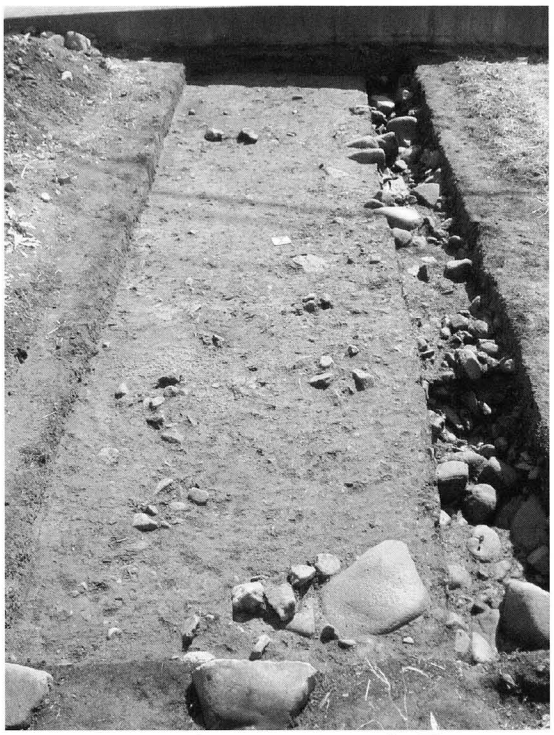


トレンチ9南側・10全景



トレンチ10全景

トレンチ10南側断面



トレンチ11全景

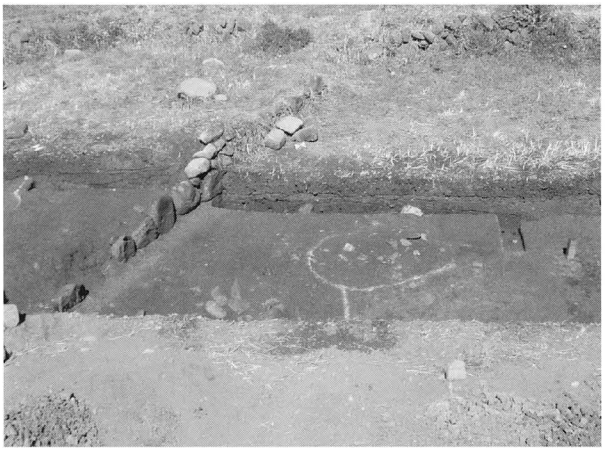
トレンチ12全景

トレンチ12・13西側全景

トレンチ13・14全景

トレンチ13東側Pit群

トレンチ13東側Pit列



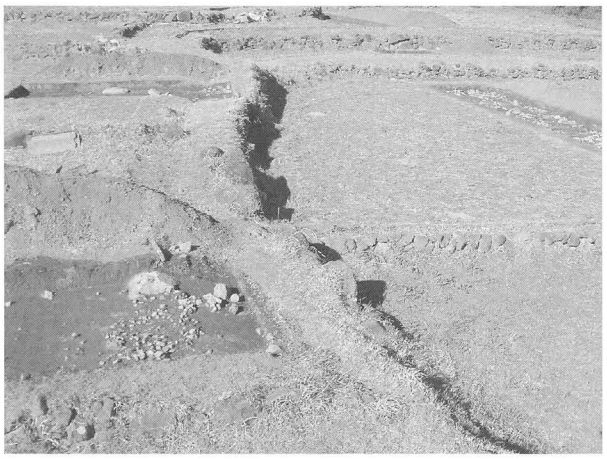
トレンチ14北壁断面

トレンチ15溝跡

トレンチ15東端部石列

トレンチ16全景

トレンチ15全景



トレンチ16・17全景

トレンチ17全景

字高塀調査前

字高塀調査状況

トレンチ1・2畑畝跡

トレンチ2南壁断面

トレンチ1遺構確認状況

トレンチ2遺構確認状況

トレンチ2惣堀跡西壁断面

トレンチ３全景

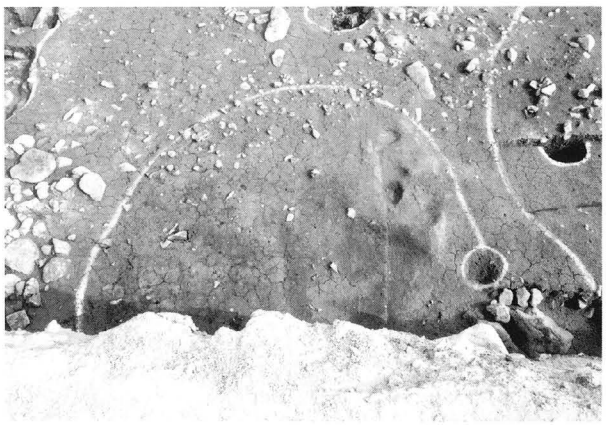
トレンチ３惣堀跡西壁断面

トレンチ４全景

トレンチ４北壁断面

トレンチ５北側全景

トレンチ５南側全景

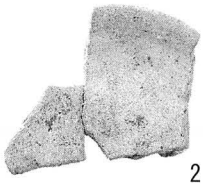


トレンチ５　１号土坑

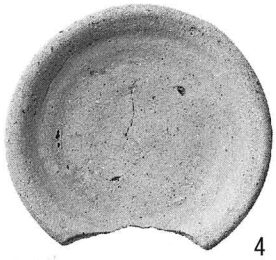
トレンチ５　１号溝跡・Pit13断面

トレンチ５全景

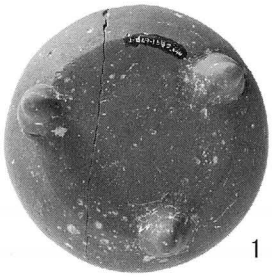
1


2

3


4

5

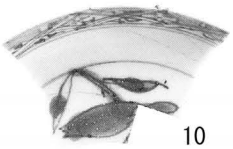

1

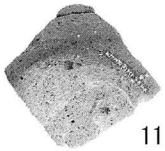
6

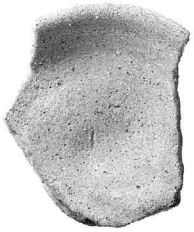
7

8

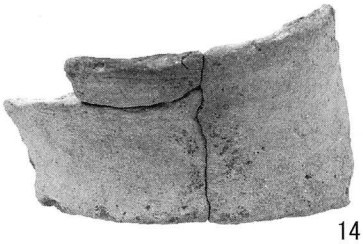
9


10

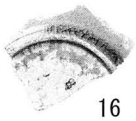

11


12

13


14

15


16

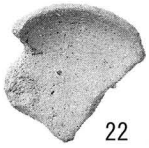
17

18

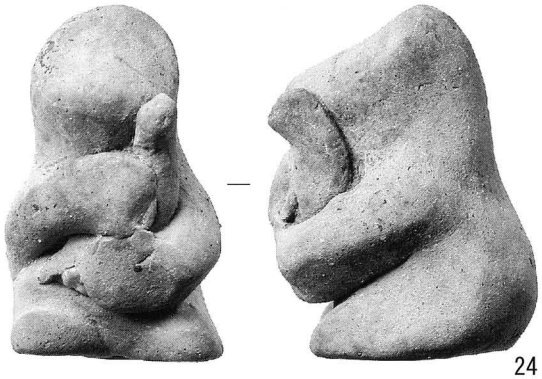
19

20

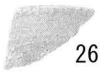
21

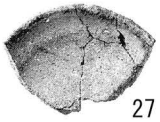

22

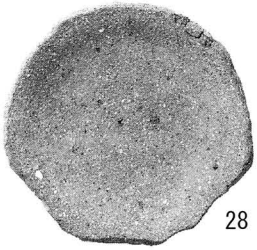
23


24

25

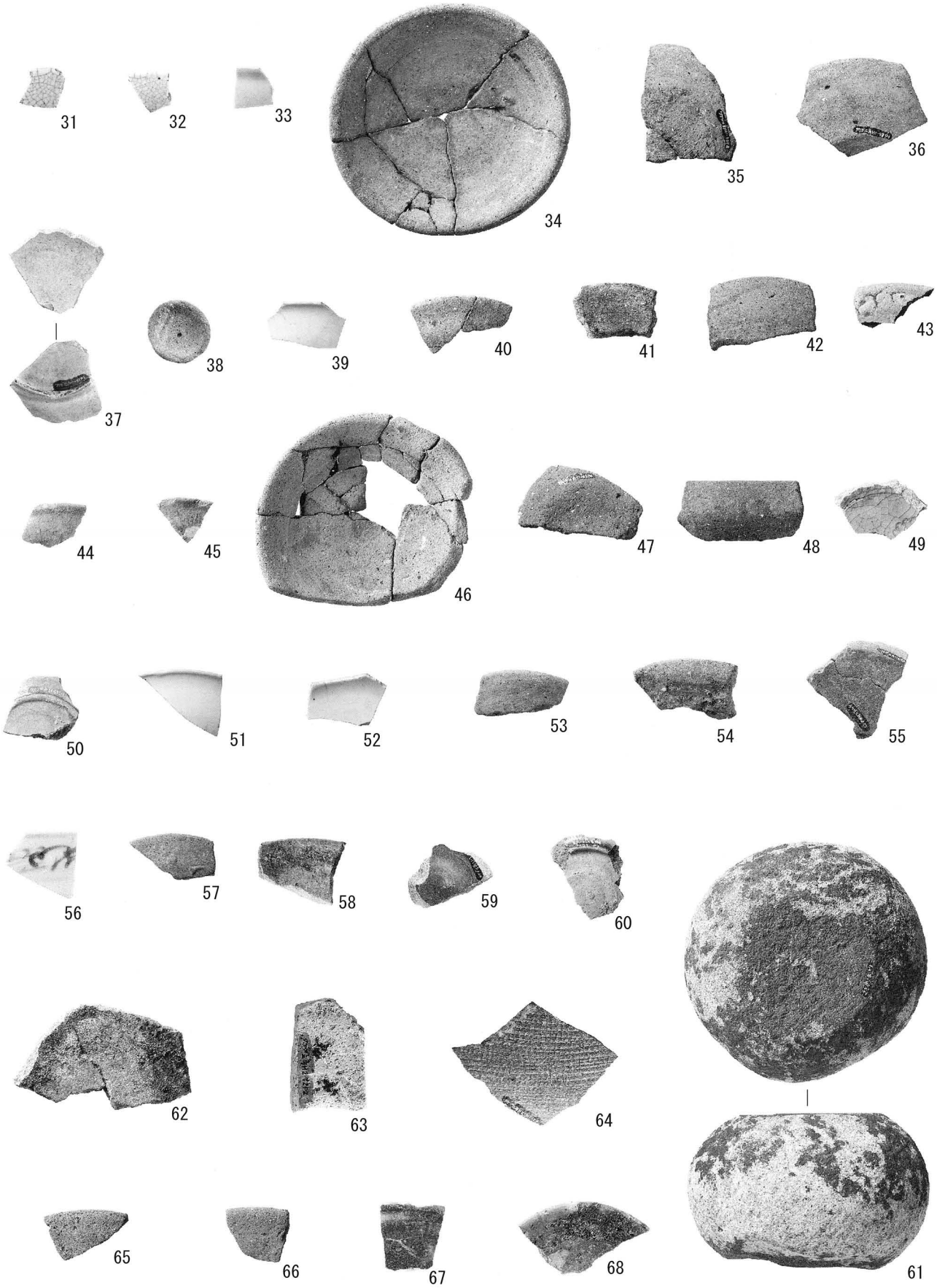

26

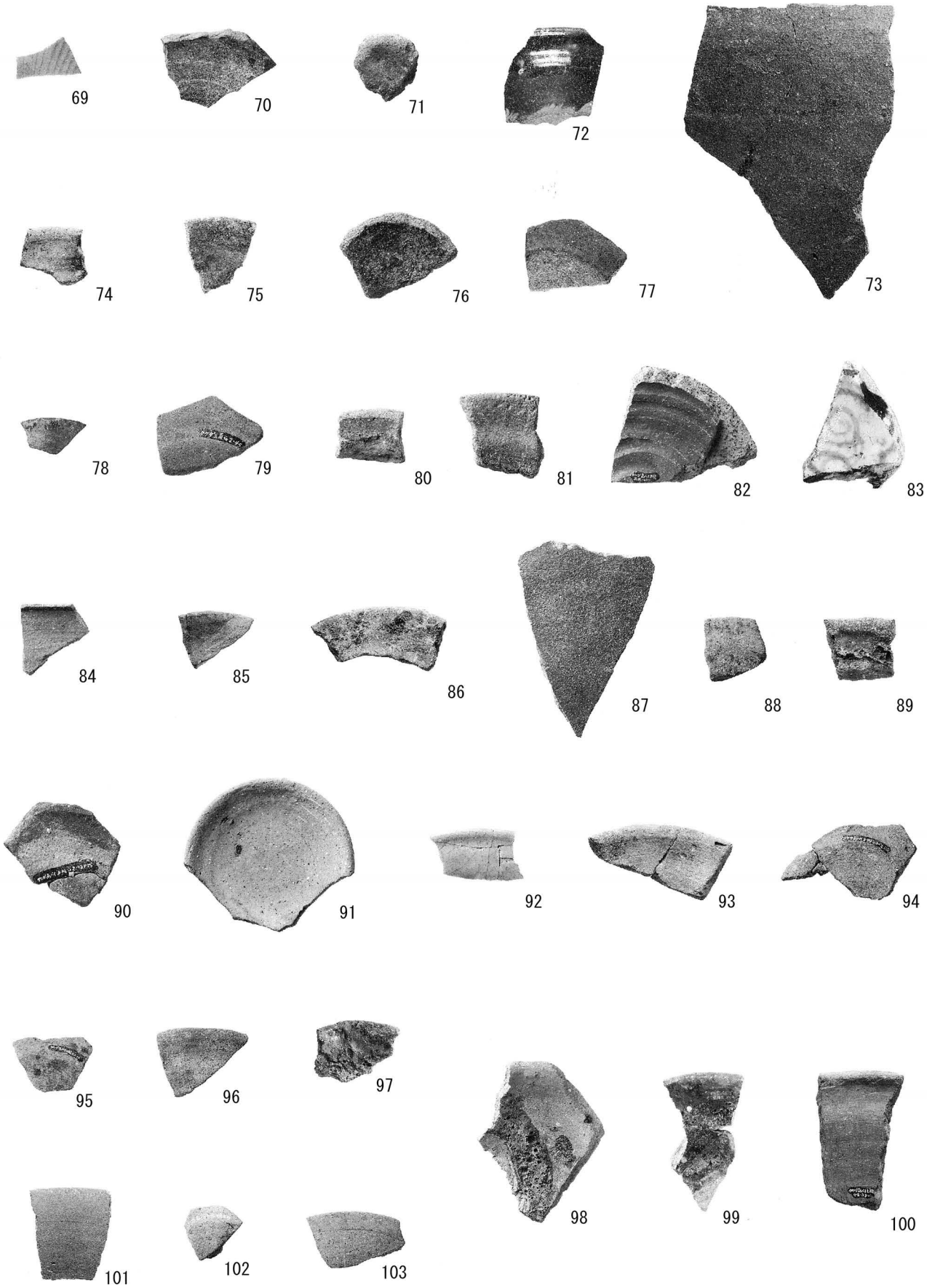

27


28

29

30


31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68


69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103

104

105

106

107

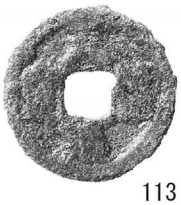
108

109

110

111

112


113

114

115

116

117

報　告　書　抄　録

ふりがな	しせきたけだしやかたあと
書名	史跡武田氏館跡XIII
副書名	史跡武田氏館跡第１期整備事業（大手門周辺ゾーン）に伴う字三角・字高塀試掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	甲府市文化財調査報告書
シリーズ番号	47
編集機関	甲府市教育委員会
所在地	〒400-8585　山梨県甲府市丸の内一丁目18番１号　電話055（223）7324
発行年月日	平成２２年３月２６日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
武田氏館跡（たけだしやかたあと）	山梨県甲府市（やまなしけんこうふし） 古府中町（こふちゅうちょう）・屋形（やかた） 三丁目（さんちょうめ）・大手（おおて） 三丁目（さんちょうめ）	19201	57	35° 40′ 14″	138° 33′ 20″	20061016 ～ 20070330	史跡環境整備に伴う試掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武田氏館跡	城館	中世	溝跡・柱穴列・土坑・柱穴	かわらけ・土器擂鉢・内耳土器・火鉢・陶磁器・古銭・釘・石臼・五輪塔	

甲府市文化財調査報告 47

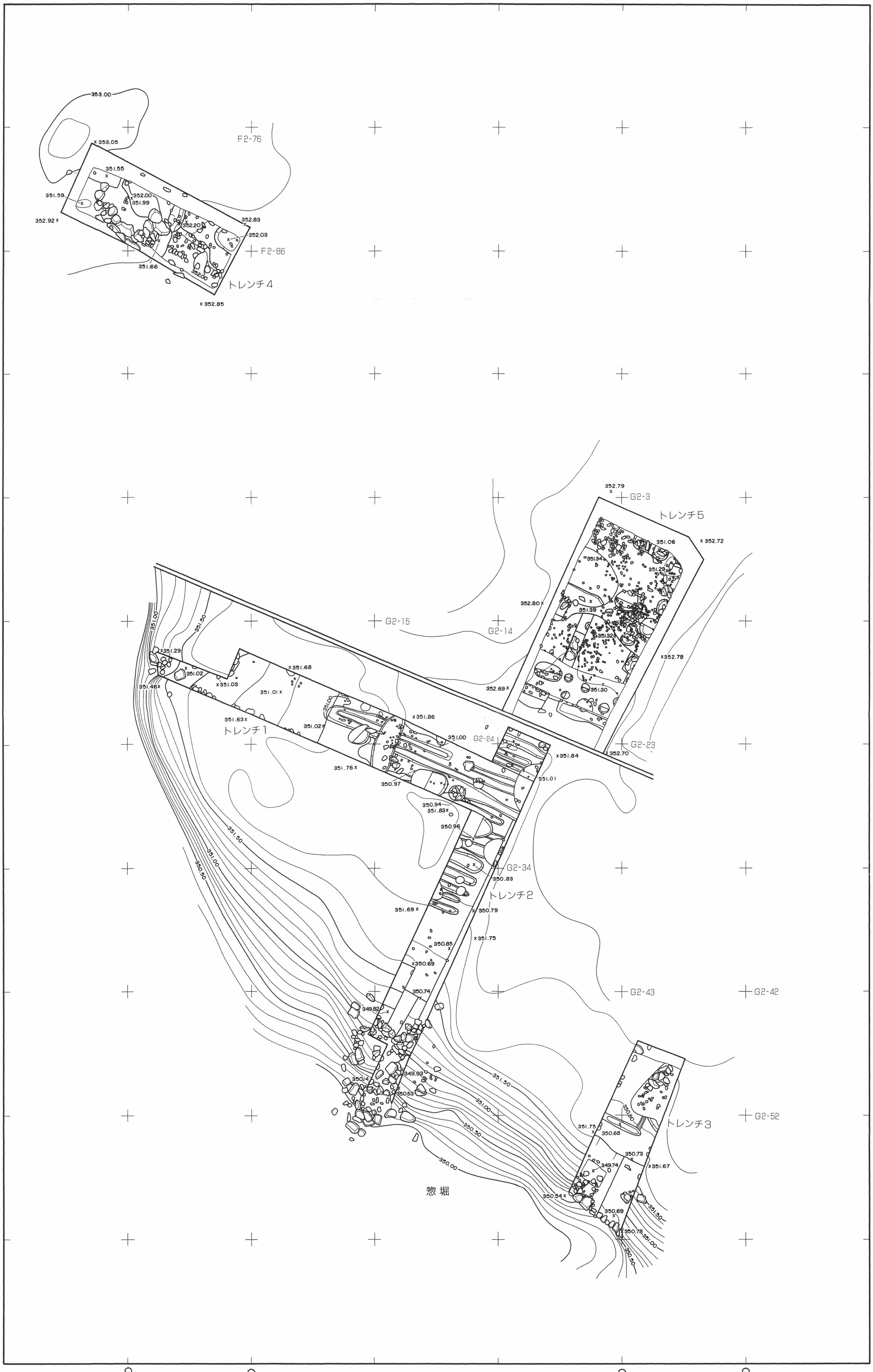
武　田　氏　館　跡　XIII

― 史跡武田氏館跡第１期整備事業(大手門周辺ゾーン)に伴う字三角･字高塀試掘調査報告書 ―

平成22年３月26日

発　行　甲府市教育委員会
〒400-8585　山梨県甲府市丸の内一丁目18番１号
TEL　０５５（２２３）７３２４
FAX　０５５（２２６）４８８９

印　刷　㈱内田印刷所
〒400-0032　山梨県甲府市中央二丁目10－18

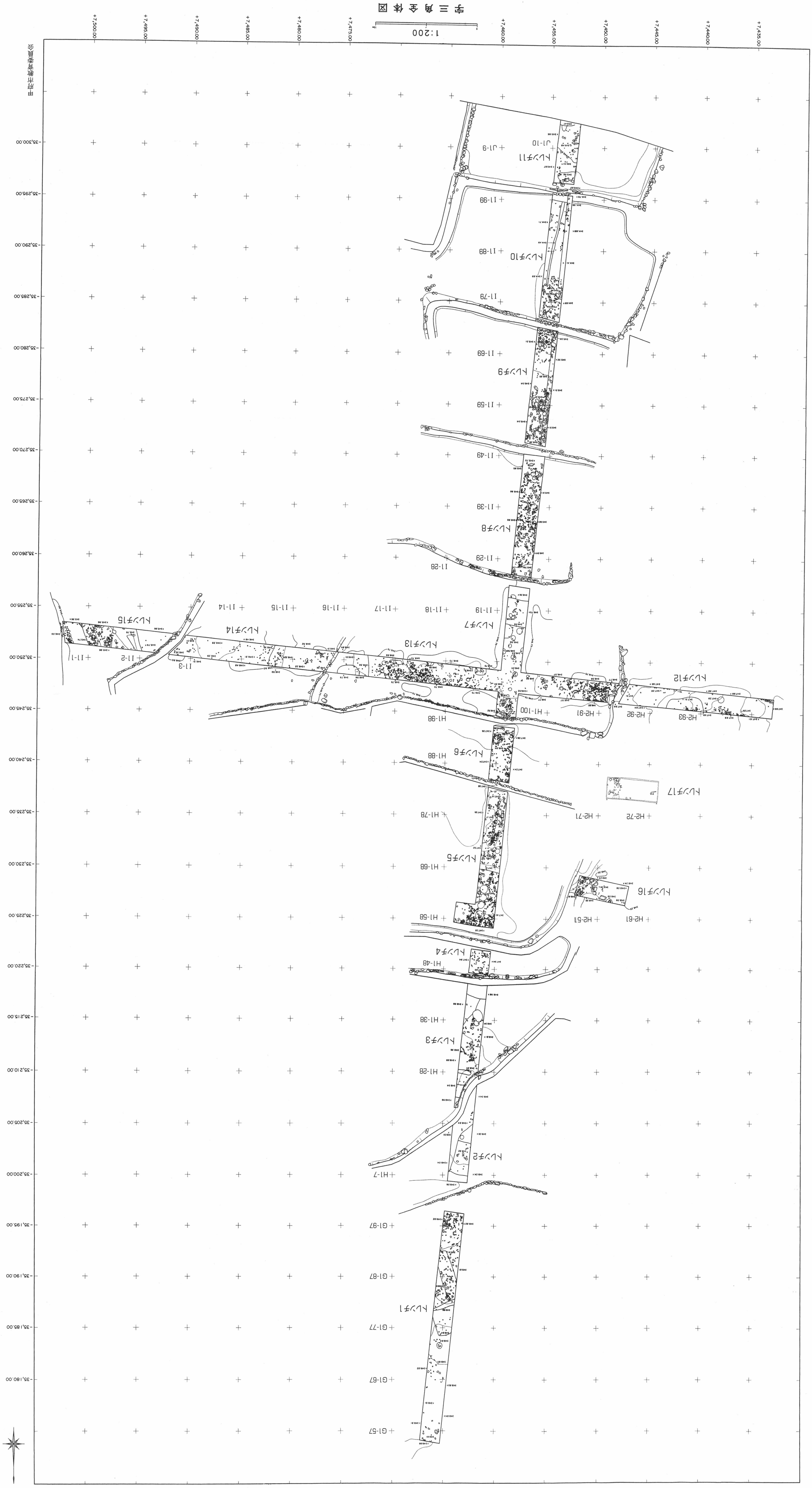


1:100

0 5 10m

字高塀全体図

甲府市教育委員会



トレンチ1
トレンチ2
トレンチ3
トレンチ4
トレンチ5
トレンチ6
トレンチ7
トレンチ8
トレンチ9
トレンチ10
トレンチ11
トレンチ12
トレンチ13
トレンチ14
トレンチ15
トレンチ16
トレンチ17
G1-57
G1-67
G1-77
G1-87
G1-97
H1-7
H1-28
H1-38
H1-48
H1-58
H1-68
H1-78
H1-88
H1-98
H1-100
H2-61
H2-51
H2-72
H2-71
H2-93
H2-92
H2-91
I1-3
I1-2
I1-1
I1-28
I1-29
I1-39
I1-49
I1-59
I1-69
I1-79
I1-89
I1-99
J1-9
J1-10
-35,180.00
-35,185.00
-35,190.00
-35,195.00
-35,200.00
-35,205.00
-35,210.00
-35,215.00
-35,220.00
-35,225.00
-35,230.00
-35,235.00
-35,240.00
-35,245.00
-35,250.00
-35,255.00
-35,260.00
-35,265.00
-35,270.00
-35,275.00
-35,280.00
-35,285.00
-35,290.00
-35,295.00
-35,300.00
+7,435.00
+7,440.00
+7,445.00
+7,450.00
+7,455.00
+7,460.00
+7,475.00
+7,480.00
+7,485.00
+7,490.00
+7,495.00
+7,500.00
1:200
0
10m
甲府市教育委員会

字三角全体図